

# 熊野遺跡第 1・2 次発掘調査報告書

2019 年 11 月

岩 沼 市 教 育 委 員 会



# 熊野遺跡第1・2次発掘調査報告書



## 例 言

- 1 本書は、宮城県岩沼市三色吉字雷神ほか地内に所在する熊野遺跡の第1次、および第2次発掘調査成果をまとめた報告書である。
- 2 本調査は、駐車場整備工事（第1次）、および駐車場造成工事（第2次）に伴う事前の記録保存を目的として実施されたものである。
- 3 発掘調査は、第1次調査は2013（平成25）年7月30日から8月19日にかけて、第2次調査は2015（平成27）年7月29日から11月18日にかけて実施し、岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査面積は第1次調査が128㎡、第2次調査が1,744㎡である。
- 4 出土資料の整理、報告書作成は、2017（平成29）年から2019（平成31・令和元）年にかけて、岩沼市文化財整理室にて行った。
- 5 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央・川島秀義・太田昭夫が担当した。
- 6 発掘調査、および整理に際し、次の諸氏、諸機関よりご協力、ご教示を賜った。記して感謝申し上げます。（五十音・敬称略）  
齋野 裕彦、白鳥 良一、千葉 宗久、古川 一明、村田 晃一  
宮城県教育庁文化財課、ホンダカーズ名取、森商事
- 7 本報告書における遺構・遺構挿図等の指示は次の通りである。
  - (1) 遺構の用語、および略称については、文化庁文化財部記念物課『発掘調査のてびき』に準拠した。
  - (2) 遺構実測図の水糸高は海拔を示す。
  - (3) 縮尺は図に示す通りである。
  - (4) 土色、および土器の色調は「新版標準土色帳」（小山・竹原 2015）による。
  - (5) 竪穴建物跡などの調査では、内部を4分割し、北東部から時計回りにA～D区と呼称して遺物を取り上げている。
  - (6) 土師器実測図内面のアミは、黒色処理（内黒）を表している。
- 8 第1次調査と第2次調査の成果については、平成25年度と平成27年度の宮城県遺跡調査成果発表会でそれぞれ内容の一部を報告しているが、本書の記載内容がそれらに優先するものである。
- 9 調査・整理に関する諸記録、および出土遺物は岩沼市教育委員会が保管している。



# 目 次

例言

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査要項	1
3. 調査の方法と概要	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
1. 遺跡の位置と地理的環境	4
2. 遺跡の歴史的環境	6
第Ⅲ章 基本層序	10
第Ⅳ章 発見された遺構と遺物	11
【1次調査】	11
1. 竪穴建物跡 (SI01 ~ SI05)	13
2. 土坑 (SK01 ~ SK10)	23
3. その他の遺物	26
【2次調査】	31
〈上段調査区〉	31
1. 竪穴建物跡 (SI01 ~ SI07)	31
2. 1号方形竪穴遺構	40
3. 掘立柱建物跡 (SB01 ~ SB06)	42
4. 柱穴列 (SA01・SA02)	47
5. 性格不明遺構 (SX01・SX02)	47
6. 土坑 (SK01 ~ SK24)	51
7. 溝跡 (SD01 ~ SK08)	58
8. 古代の遺物	59
9. その他の遺物	59
〈下段調査区〉	62
1. 堀跡 (1号堀跡)	62
2. 下段調査区出土遺物	63
第Ⅴ章 総括	64
1. 出土遺物について	64
2. 遺構について	66
3. 各時期の集落	68
4. まとめ	70
引用・参考文献	71

## 挿図目次

第 1 図	調査区位置図	3
第 2 図	岩沼市の位置と地形分類	4
第 3 図	熊野遺跡の位置	5
第 4 図	熊野遺跡周辺の旧地形図	5
第 5 図	岩沼市域の遺跡分布図	6
第 6 図	基本層序模式図	10
第 7 図	1次 遺構全体図	11
第 8 図	1次 1号竪穴建物跡 (SI01)	12
第 9 図	1次 1号竪穴建物跡 (SI01) 出土遺物	14
第 10 図	1次 2号竪穴建物跡 (SI02)	15
第 11 図	1次 2号竪穴建物跡 (SI02) 出土遺物	16
第 12 図	1次 3号竪穴建物跡 (SI03)	17
第 13 図	1次 3号竪穴建物跡 (SI03) 出土遺物 (1)	18
第 14 図	1次 3号竪穴建物跡 (SI03) 出土遺物 (2)	19
第 15 図	1次 4号竪穴建物跡 (SI04)	21
第 16 図	1次 4号竪穴建物跡 (SI04) 出土遺物	22
第 17 図	1次 5号竪穴建物跡 (SI05)	22
第 18 図	1次 土坑 (SK)	24
第 19 図	1次 土坑 (SK03・SK10) 出土遺物	25
第 20 図	1次 縄文土器実測図	27
第 21 図	1次 弥生土器実測図	28
第 22 図	1次 石器・石製品実測図	29
第 23 図	2次 1号竪穴建物跡 (SI01)	32
第 24 図	2次 上段調査区遺構全体図	33
第 25 図	2次 2・3号竪穴建物跡 (SI02・SI03)	36
第 26 図	2次 4～6号竪穴建物跡 (SI04～SI06)	38
第 27 図	2次 7号竪穴建物跡 (SI07)	39
第 28 図	2次 竪穴建物跡 (SI02・SI07) 出土遺物	40
第 29 図	2次 1号方形竪穴遺構	41
第 30 図	2次 方形竪穴遺構出土遺物	42
第 31 図	2次 1号掘立柱建物跡 (SB01)	43
第 32 図	2次 2号掘立柱建物跡 (SB02)	44
第 33 図	2次 3号掘立柱建物跡 (SB03)	45
第 34 図	2次 4・5号掘立柱建物跡 (SB04・SB05)	46
第 35 図	2次 掘立柱建物跡 (SB05) 出土遺物	47
第 36 図	2次 1号柱穴列 (SA01)・1号性格不明遺構 (SX01)・土坑 (SK2～SK14)・溝跡 (SD2・SD3)	48



第 37 図	2次 2号柱穴列 (SA02)	50
第 38 図	2次 性格不明遺構 (SX01) 出土遺物	51
第 39 図	2次 1号土坑 (SK01)	52
第 40 図	2次 土坑 (SK02・SK09・SK18) 出土遺物	53
第 41 図	2次 6号掘立柱建物跡 (SB06)・2号性格不明遺構 (SX02)・土坑 (SK15～SK24)・溝跡 (SD04～SD08)	55
第 42 図	2次 土坑 (SK15～SK24)	57
第 43 図	2次 溝跡 (SD04) 出土遺物	59
第 44 図	2次 その他の古代の遺物	60
第 45 図	2次 縄文土器・弥生土器・石器実測図	61
第 46 図	2次 下段調査区出土遺物	62
第 47 図	2次 1号堀跡	63
第 48 図	古墳時代の土師器	65
第 49 図	平安時代の土師器	66
第 50 図	時期別遺構分布	69

## 表目次

第 1 表	岩沼市域の遺跡一覧表	7
第 2 表	第1次調査 竪穴建物跡属性表	23
第 3 表	第1次調査 土坑属性表	26
第 4 表	第2次調査 竪穴建物跡属性表	40
第 5 表	第2次調査 方形竪穴遺構属性表	42
第 6 表	第2次調査 掘立柱建物跡属性表	45
第 7 表	第2次調査 土坑属性表	58
第 8 表	第2次調査 溝跡属性表	59

## 写真図版目次

写真図版 1	1次調査 調査前の現状・調査風景	73
写真図版 2	1次調査 遺構検出全景・完掘全景	74
写真図版 3	1次調査 SI01・SI02	75
写真図版 4	1次調査 SI03・SI04	76
写真図版 5	1次調査 SI04・SI05・SK01	77
写真図版 6	2次調査 調査前の現状・調査風景(上段調査区)	78
写真図版 7	2次調査 上段調査区遺構検出全景・上段調査区完掘全景	79
写真図版 8	2次調査 SI01・SI02	80
写真図版 9	2次調査 SI03・SI04・SI05・SI07	81
写真図版 10	2次調査 方形竪穴遺構・SB01・SB06・SA02	82
写真図版 11	2次調査 SX02・SK09・SK18・SK21・SK23・SD04	83
写真図版 12	2次調査 下段調査区調査前の現状・1号堀跡	84
写真図版 13	1次調査 SI01・SI02 出土遺物	85
写真図版 14	1次調査 SI03 出土遺物	86
写真図版 15	1次調査 SI03・SI04・SK03・SK10 出土遺物	87
写真図版 16	1次調査出土縄文土器	88
写真図版 17	1次調査出土弥生土器	89
写真図版 18	1次調査出土弥生土器・石器	90
写真図版 19	1次調査出土石器・石製品	91
写真図版 20	2次調査 SI01・SI02・SI07・1号方形竪穴遺構・SB05・SK02・SK09・SK18・SD04・SX01 出土遺物	92
写真図版 21	2次調査出土古代の遺物・2次調査下段調査区出土遺物	93
写真図版 22	2次調査出土縄文土器・弥生土器・石器	94

# 第 I 章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成 25 年 4 月に駐車場整備工事についての照会が事業者からあり、岩沼市教育委員会生涯学習課（以下、市教委）では、対象地が周知の埋蔵文化財包蔵地である熊野遺跡の範囲内に位置している旨を回答した。その後、平成 25 年 7 月 5 日付で事業者より協議書が提出されたが、提出された工事計画では遺構・遺物が存在した場合に多大な影響を受けることが予想されたことから、宮城県教育委員会文化財保護課（以下、県教委）より「発掘調査が必要」との指示を受けた。これを受けて市教委では、平成 25 年 7 月 30 日に確認調査を実施したが、表土直下より堅穴建物跡をはじめとする遺構や、土師器などの遺物が発見されたことから事業者と改めて協議を行ったが、計画変更は困難とのことから記録保存のための本格調査を実施することとなった。

発掘調査は平成 25 年 7 月 31 日から 8 月 19 日にかけて実施した。調査対象面積は 128 m<sup>2</sup>である。調査は現地地表下約 20 cm で検出される遺構確認面において遺構精査を実施したのち遺構の掘り下げ、土層図及び平面図の作成を随時実施し、8 月 11 日に全景撮影を行った。その後も随時遺構写真撮影、遺構図面の作成作業を経て、8 月 19 日に調査及び機材搬出を終了した。

第 2 次調査は、平成 27 年 4 月に第 1 次調査と同事業者より駐車場整備工事についての照会があったことに端を発する。市教委では、対象地が第 1 次調査地点と隣接することからその成果を踏まえ、協議・調査が必要となる旨を回答した。その後、平成 27 年 5 月 12 日付で事業者より協議書が提出され、県教委より「発掘調査が必要」との指示を受けたことから、市教委では平成 27 年 7 月 29・30 日に確認調査を実施し、一部で表土直下より堅穴建物跡をはじめとする遺構や、土師器などの遺物が発見された。このため事業者と改めて協議を行ったが、計画変更は困難とのことから記録保存のための本格調査を実施することとなった。

発掘調査は平成 25 年 7 月 31 日から 11 月 18 日にかけて実施した。調査対象面積は上段・下段調査区の総計 1,744 m<sup>2</sup>である。調査は現地地表下 10～45 cm で検出される遺構確認面において遺構精査を実施したのち遺構の掘り下げ、土層図及び平面図の作成を随時実施し、10 月 27 日に全景撮影を行った。その後も随時遺構写真撮影、遺構図面の作成作業を経て、11 月 18 日に調査及び機材搬出を終了した。

本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公共基準点 2-052(X ; -208566.917・Y ; 1354.048) と同 3-118(X ; -208697.788・Y ; 1323.361) である。なお、これらの座標数値は、国土地理院が web 上で公開している「世界測地系座標変換システム」を使用して変換したのち、「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震」による地殻変動を補正するパラメータファイルを用いて補正を行った数値である。

## 2. 調査要項

- (1) 遺 跡 名 : 熊野遺跡 (遺跡番号 15015)
- (2) 所 在 地 : 岩沼市三色吉字熊野、水神、雷神、梅
- (3) 調 査 主 体 : 岩沼市教育委員会

(4) 調査担当：岩沼市教育委員会生涯学習課

〈1次〉川又 隆央

〈2次〉川又 隆央、川島 秀義（神奈川県派遣職員）

(5) 調査期間：

〈1次〉2013(平成25)年7月30日～8月19日

〈2次〉2015(平成27)年7月29日～11月18日

(6) 調査面積：

〈1次〉128 m<sup>2</sup>

〈2次〉1,744 m<sup>2</sup>

(7) 現場調査参加者

〈1次〉伊藤 和雄、沖田 理恵、塩谷 信幸、加藤 詩織、郷内 妙子、斎藤 新彌、佐藤トシ子、菅原 孝子、早坂 富美子、南城 美代子、渡辺 幹雄

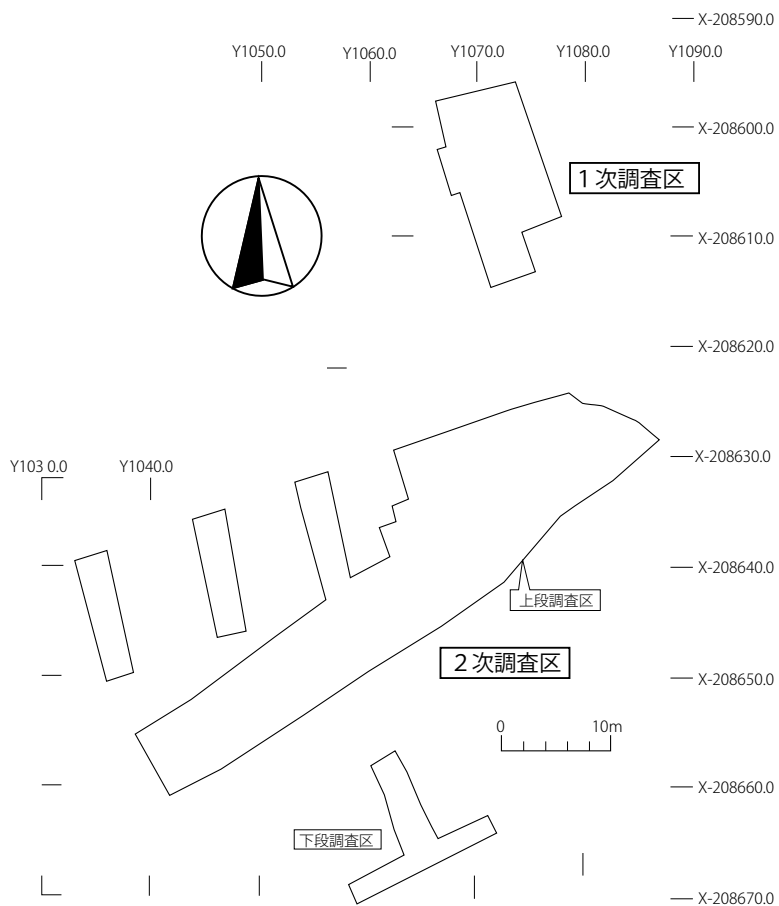
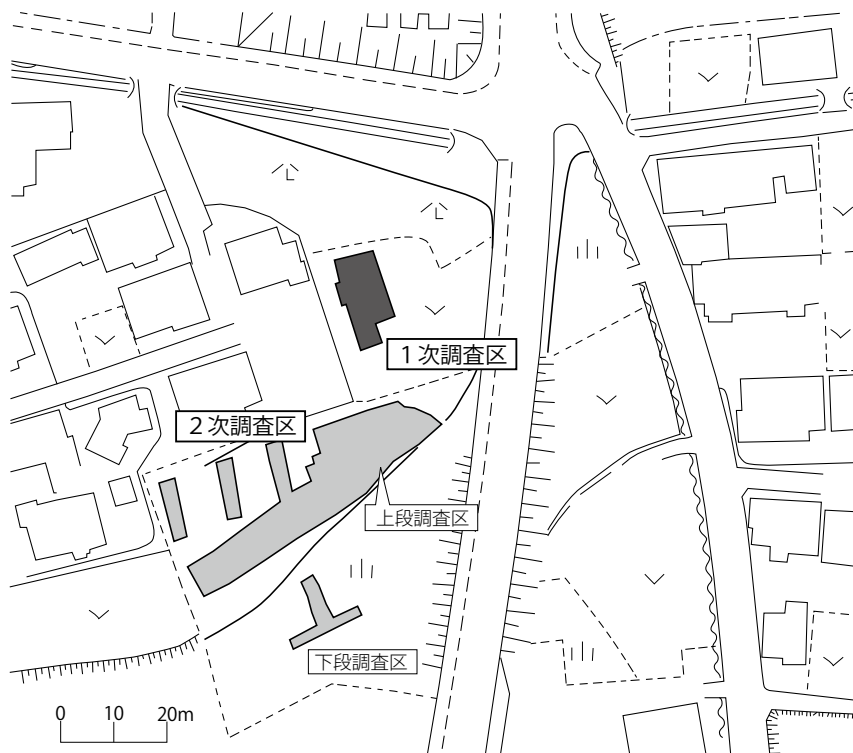
〈2次〉伊藤 和雄、塩谷 信幸、大友 和男、斎藤 新彌、佐藤トシ子、永浜 盛明、南城 美代子、渡辺 幹雄

(8) 整理作業参加者 須田 富士子、原田 とみ子、三浦 美穂子

### 3. 調査の方法と概要

今回の調査箇所は熊野遺跡全体のほぼ中央部付近であるが、1次調査区は東に向かって傾斜する尾根筋、2次調査区は南東に面する緩斜面に当たる。1次調査区付近はかつては宅地および畑地であったが、近年は竹林、畑地となっており、その中の計画で切土される全面を対象として調査を実施した。最初に重機による掘削を行ったが、かつての宅地造成時に深くまで削平が及んでおり、表土下の地山面で遺構確認作業を行った。その結果、竪穴建物跡が5棟、土坑が10基、ピットが多数検出された。それぞれ個別に遺構名を付して精査を行い、終了後に写真撮影、平面図と断面図作成を行い、完了した。

2次調査では対象面積が広範であったことから、最初に上段調査区にトレンチを6本、下段調査区にトレンチ1本を設定して遺構確認を行い、精査範囲を特定しようと図った。その結果、上段調査区では全体的に後世の改変を受けており、特に北側は大きく削平を受けていた。しかしながら東側から南西側にかけては遺構の残存が良好で、多数の遺構が密集して確認された。そのため、上段調査区の調査は遺構が確認された範囲のみを行うこととした。精査にあたっては遺構の多くが性格が明確にできないことや、山積するその後の調査予定などから、精査順に通しの遺構番号を付し、それぞれの記録を取った後に遺構名を登録することにした。出土遺物も遺構番号で取り上げ、遺構名が確定した後にそれぞれの遺構に帰属させることにした。2次調査区では最終的に竪穴建物跡が7棟、方形竪穴遺構が1棟、掘立柱建物跡が6棟、柱穴列が2列、性格不明遺構が2基、土坑が24基、溝跡が8条、ピットが多数検出された。下段調査区は丘陵の斜面から裾部にかけて位置する。そこから南側低地は水田として利用されていたが、現在は金蛇水神社の臨時駐車場となっている。下段調査区ではさらに直行するトレンチを増設し、T字状の調査区にした。その結果、丘陵裾部を巡るとみられる1条の堀跡を確認した。基本層は低地に向かってさらに深く堆積しており、途中までの調査および断面図作成となった。



第1図 調査区位置図

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

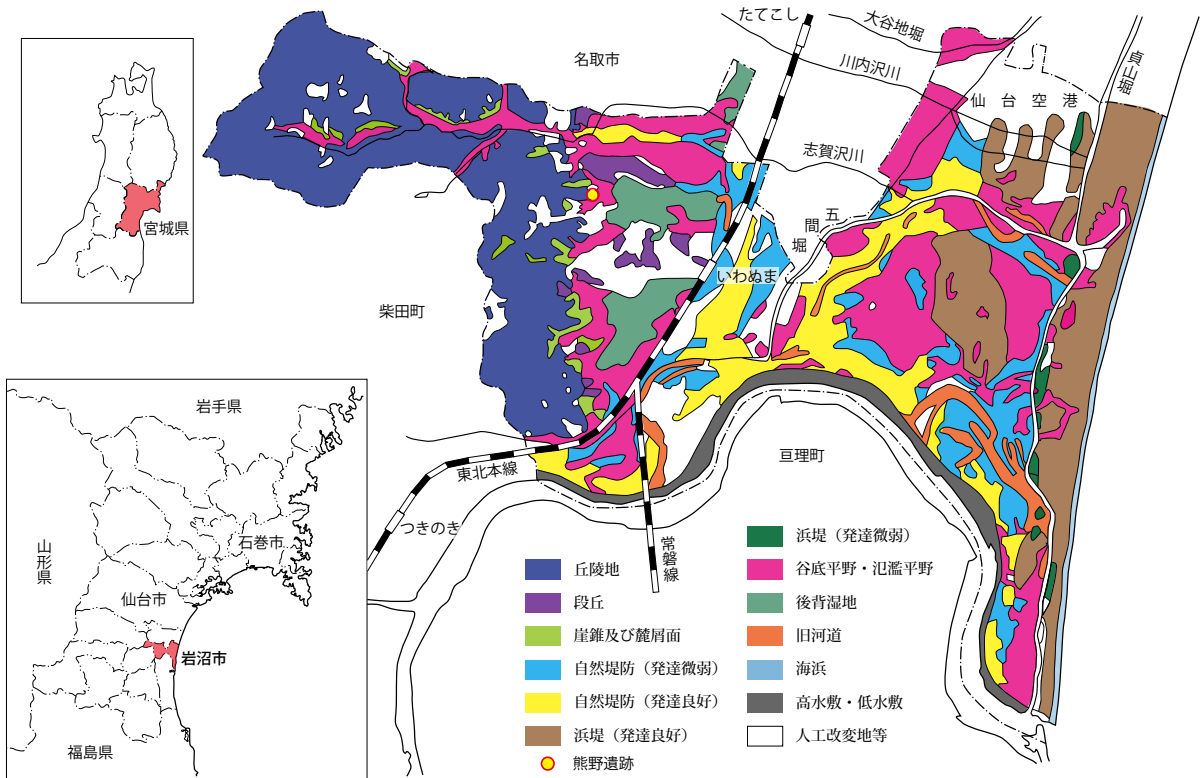
### 1. 遺跡の位置と地理的環境

熊野遺跡は、JR岩沼駅から北約 1.8 km に位置し、岩沼市三色吉字熊野、水神、雷神、梅に所在する。

岩沼市は宮城県の南部に位置し、東は太平洋に面し、西は村田町および柴田町、南は阿武隈川を隔て亘理町、北は名取市と接している。地形的には、市域西部を高館丘陵の一部である標高 200 ～ 300 m の岩沼西部丘陵が南北に走り、この丘陵からは長岡丘陵や二木・朝日丘陵などの低丘陵が東に張り出している。これらの丘陵を除く市域は仙台平野南部の一角を占める標高 10m 以下の沖積平野であり、海岸線まで広範に広がっている。この沖積平野を形成した要因の一つが海面低下による海岸線の海側への移動であり、他は大小河川による土砂の埋積作用である。とりわけ市域の南を画する大河川である阿武隈川およびその支流による埋積活動は大きく、岩沼付近から弓状に大きく蛇行して東流し、南北流域に多量の土砂を供給し、各地に自然堤防を形成している。

熊野遺跡は岩沼西部丘陵から東に短く派生する低丘陵の頂部から裾部にかけて立地している。遺跡内の標高は 8 ～ 17 m で、遺跡の範囲は東西約 420 m、南北約 120 m と東西に長い。現況は宅地、畑地、駐車場（旧水田）となっており、遺跡のほぼ中央を県道仙台岩沼線が南北に走っている。

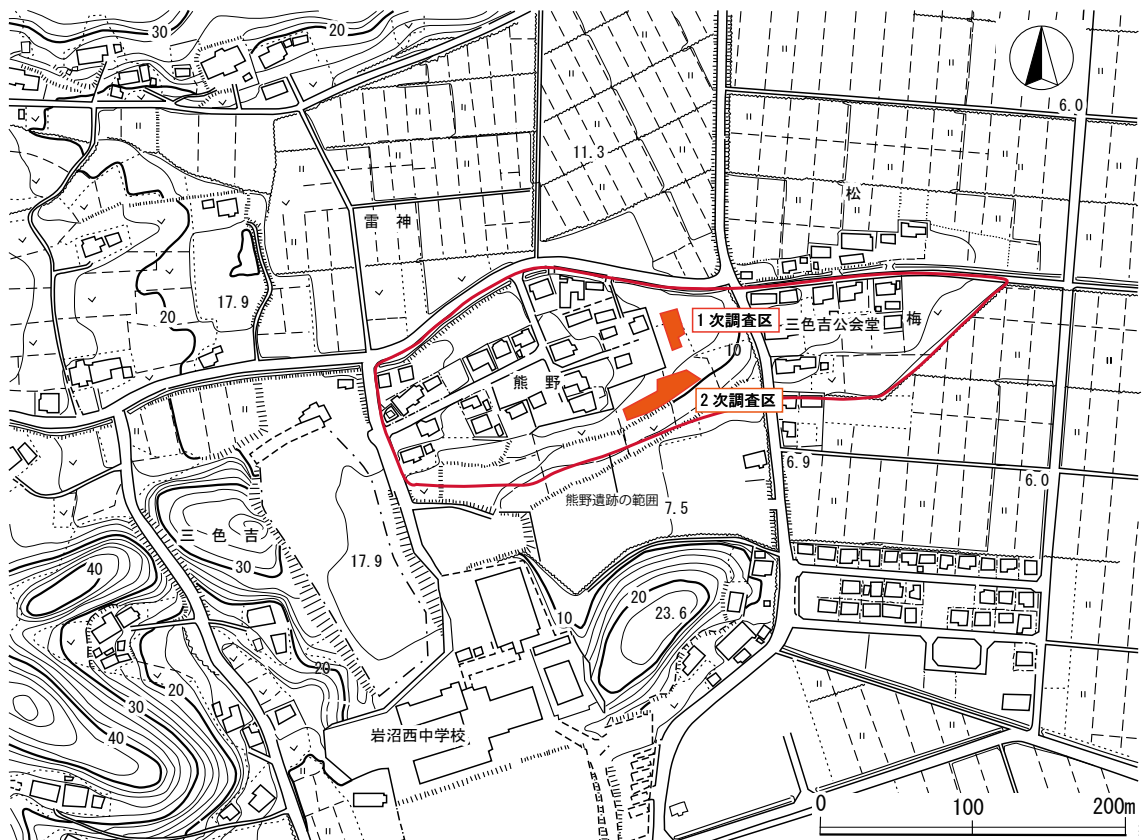
今回の 2 次 にわたる調査箇所は、遺跡全体から見ればほぼ中央部にあたり、東へ派生する尾根筋、そして南面する緩斜面に立地している。



第2図 岩沼市の位置と地形分類



第3図 熊野遺跡の位置



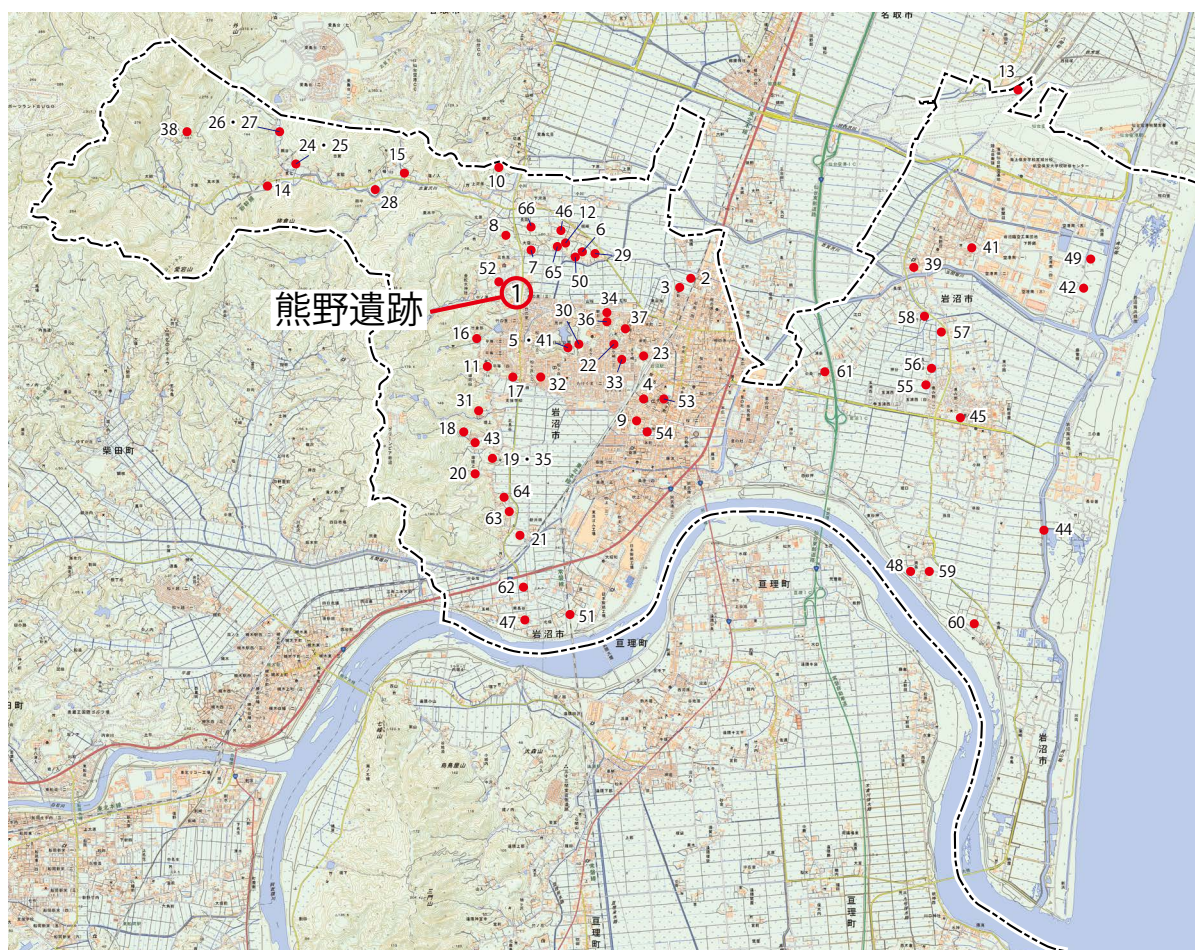
第4図 熊野遺跡周辺の旧地形図（平成3年作製）

## 2. 遺跡の歴史的環境

熊野遺跡は『岩沼市史4 資料編Ⅰ』（岩沼市 2015）による地区区分では長岡・三色吉地区に含まれる。ここではこの地区を中心に歴史的環境について概観する。なお、岩沼市内からは現在まで66箇所の遺跡が確認されているが、その大半が未調査の遺跡であり、各時代とも十分な知見が得られていないのが現状である。

岩沼市では旧石器時代の遺跡は未発見である。北に隣接する名取市では、野田山遺跡など高館丘陵から派生する低丘陵上に立地する遺跡から後期旧石器時代の石器群が出土している。今後、長岡・三色吉地区周辺でも発見される可能性が十分考えられる。

縄文時代の遺跡は岩沼市では20箇所知られており、すべて市域西側の丘陵部に位置する。鶴ヶ崎城跡（23）からは早期後葉の土器が出土しており、現在のところ岩沼市では最古の遺跡となっている（川又2005）。その後の前期前葉では畑堤上貝塚（35）から土器などが発見されている。中期後葉では、北原遺跡（8）から貯蔵穴とみられるフラスコ状土坑が多数発見され（小村田ほか 1993）、また山畑南貝塚（10）からは中期後葉から後期初頭にかけての遺構や土器や石器などの遺物が、ヤマトシジミ主体の貝層とともに確認されている。こうした縄文時代早期から後期にかけての岩沼市域西部については、周辺の貝塚などの情報を加えておおよその地形環境の変遷が推定されている。すなわち早期後葉から前期前葉の縄文海進



第5図 岩沼市域の遺跡分布図



第1表 岩沼市域の遺跡一覧表

図中番号	登録番号	遺跡名	所在地	種別	時代
2	15001	かめ塚古墳	字亀塚	古墳	古墳
3	15002	かめ塚西遺跡	字亀塚	遺物散布地	弥生・古代・近世
4	15003	丸山横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
5	15004	白山横穴墓群	土ヶ崎四丁目ほか	横穴墓	古墳
6	15005	新明塚古墳	長岡字塚腰	古墳	古墳
7	15006	杉の内遺跡	三色吉字杉の内ほか	集落跡	弥生・古墳・古代
8	15007	北原遺跡	長岡字北原ほか	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
9	15008	二木横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
10	15009	山畑南貝塚	小川字山畑南ほか	集落跡・貝塚	縄文・古代
11	15010	長谷寺横穴墓群	北長谷字畑向山	横穴墓	古墳・古代
12	15011	長塚古墳	長岡字台	古墳	古墳
13	15012	孫兵衛谷地遺跡	下野郷字小谷地	遺物散布地	古墳
14	15013	大日遺跡	志賀字新大日	集落跡	縄文
15	15014	下塩ノ入遺跡	志賀字下塩ノ入ほか	集落跡	縄文
1	15015	熊野遺跡	三色吉字熊野ほか	集落跡	縄文・弥生・古墳・古代・中世
16	15046	竹倉部遺跡	三色吉朝字竹倉部	遺物散布地	弥生・古墳・古代
17	15016	平等山横穴墓群	三色吉字畑松崎	横穴墓	古墳
18	15017	新館跡	北長谷字館下	城館跡	中世
19	15018	畑提上横穴墓群	北長谷字畑提上	横穴墓	古墳
20	15019	根方泉遺跡	南長谷字泉	遺物散布地	弥生・近世
21	15020	長谷小館跡	南長谷字姪	城館跡	中世
22	15022	土ヶ崎横穴墓群	土ヶ崎二丁目	横穴墓	古墳・古代
23	15023	鶴ヶ崎城跡	栄町一丁目ほか	城館跡	縄文・弥生・中世・近世
24	15025	八森A遺跡	志賀字新八森	集落跡	縄文
25	15026	八森B遺跡	志賀字八森	集落跡	縄文
26	15027	銅谷A遺跡	志賀字銅谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
27	15028	銅谷B遺跡	志賀字銅谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
28	15029	新宮下遺跡	志賀字新宮下	集落跡	縄文
29	15030	上根崎遺跡	長岡字上根崎ほか	集落跡	縄文・弥生・古代・中世
30	15031	引込横穴墓群	土ヶ崎四丁目	横穴墓	古墳
31	15032	古閑山遺跡	北長谷字古閑山	遺物散布地	弥生・古墳・古代
32	15033	新田遺跡	北長谷字新田ほか	遺物散布地	縄文・古代
33	15034	石垣山横穴墓群	朝日一丁目	横穴墓	古墳
34	15035	鷺崎横穴墓群	朝日二丁目	横穴墓	古墳
35	15036	畑提上貝塚	北長谷字畑提上	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
36	15037	朝日山古墳群	朝日一丁目	古墳・墓・遺物散布地	弥生・古墳・中世・近世
37	15038	朝日遺跡	朝日一丁目	遺物散布地	古墳・古代・中世
38	15039	岩蔵寺遺跡	志賀字薬師	集落跡・寺院跡	縄文・古代・中世
39	15040	下野郷館跡	下野郷字館内・館外ほか	城館跡	古代・中世・近世
40	15041	白山塚	字朝日	塚	近世?
41	15042	館外遺跡	下野郷字館外	遺物散布地	古代・近世
42	15043	にら塚遺跡	下野郷字潮入ほか	遺物散布地	古代
43	15044	新館跡前遺跡	北長谷字畑提上	遺物散布地	縄文・古代
44	15045	貞山堀(小曳堀)	相の釜～納屋	運河	近世
45	15047	新田東遺跡	押分字新田東	遺物散布地	古代・近世
46	15048	長塚北遺跡	長岡字上根崎	遺物散布地	縄文・古墳・古代
47	15049	南玉崎遺跡	南長谷字北上ほか	遺物散布地	古代・近世
48	15050	西須賀原遺跡	早股字西須賀原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
49	15051	高大瀬遺跡	下野郷字高大瀬ほか	遺物散布地	古代・近世
50	15052	長徳寺前遺跡	長岡字塚越	経塚	近世
51	15053	原遺跡	南長谷字中原ほか	官衙関連遺跡	弥生・古墳・古代
52	15054	中ノ原遺跡	三色吉字中ノ原ほか	墓	中世
53	15055	丸山遺跡	二木二丁目ほか	集落跡	中世・近世
54	15056	竹駒神社境内遺跡	稲荷町	社寺跡	中世・近世
55	15057	新筒下遺跡	押分字新筒下ほか	遺物散布地	古代・近世
56	15058	沼前遺跡	押分字沼前ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
57	15059	西土手遺跡	押分字西土手ほか	遺物散布地	中世・近世
58	15060	前條遺跡	下野郷字前條	遺物散布地	古代・近世
59	15061	刈原遺跡	早股字刈原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
60	15062	高原遺跡	寺島字高原	遺物散布地	中世・近世
61	15063	上中筋遺跡	下野郷字上中筋ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
62	15064	樋遺跡	南長谷字樋ほか	遺物散布地	縄文・古墳・古代・中世・近世
63	15065	柳遺跡	南長谷字柳	遺物散布地	古墳・古代・近世
64	15066	台遺跡	南長谷字台	遺物散布地	縄文・弥生・古墳・古代
65	15067	長塚遺跡	長岡字台	遺物散布地	縄文・古墳
66	15068	上小瀬遺跡	長岡字上小瀬ほか	集落跡	弥生・古墳・古代

時には西側丘陵付近まで海水域が拡大し、現在の沖積地の多くは内湾や入り江のような景観を呈していた。その後の海面低下により岩沼市街地付近に浜堤列（第Ⅰ浜堤列）が形成され、内湾が潟湖化し汽水域となる。この潟湖は中期後葉から後期初頭頃までは存在したようで、その後、沼地を含む湿地に変わっていたようである。縄文時代後期や晩期では志賀沢川流域に所在する大日遺跡（14）や下塩ノ入遺跡（15）が知られている。特に下塩ノ入遺跡では晩期後葉の土器や石器などが多数発見されている。

弥生時代の遺跡は岩沼市では14箇所知られているが、調査例が少なく情報が乏しいのが現状である。なお、北原遺跡からは後期後半の竪穴建物跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は29箇所知られており、その内訳は集落跡が15箇所、墳墓では高塚古墳が4基、横穴墓が10群である。前期の集落跡として注目されるのが北原遺跡であり、この時期の竪穴建物跡が36棟発見されている（小村田ほか 1993）。ここでは住居の構造が明らかとなり、住居間を通る道の存在なども推定されている（仙台市 2000）。北に隣接する名取市本郷地区の山の神遺跡は第Ⅰ浜堤列か自然堤防に立地する前期の集落跡で、竪穴建物跡が多数発見されており、付近に古墳の存在も確認されている（古川ほか 1993）。今後、岩沼市域の第Ⅰ浜堤列一帯の低地でも発見される可能性が高い。さらにこの時期の集落跡が海岸部の第Ⅱ浜堤列まで広がることを示すのが孫兵衛谷地遺跡（13）であり、土師器が多数発見されている。中期の集落跡に関わる遺構は明らかではないが、第Ⅱ浜堤列に立地する下野郷館跡（39）からは中期の土師器が出土している（川又ほか 2018）。後期では原遺跡（51）から竪穴建物跡などが検出されており、この遺跡を含めて今後さらに発見例が増える可能性が考えられる。

高塚古墳では前方後円墳のかめ塚古墳（2）があり、試掘調査の結果から前期古墳の可能性も指摘されている。また長岡丘陵上には長塚古墳（12）や新明塚古墳（6）が所在するが、時期などまだ不明な点が多い。横穴墓群は二木・朝日丘陵を中心に点在しており、岩沼市域は仙台平野でも横穴墓の密集地として知られている。多くの横穴墓がこれまで調査され、古墳時代後期から奈良時代にかけての時期のものであることがわかり、東海地方の須恵器製品を含む土器や直刀などの鉄製品、玉類などが多数発見されている。なお、最近では阿武隈川北岸の原遺跡から横穴墓群の時期と重なる遺構が多数発見され、注目を集めている。後述するように一般集落よりは交通関係の官衙的性格を持つ遺跡とみられ、横穴墓群の被葬者との関連も伺える。

古代の奈良・平安時代の遺跡は岩沼市では32箇所知られている。ほかの時代より遺跡数が多く、丘陵部に半数、沖積地に半数がそれぞれ立地している。この時代に岩沼市では海岸部の第Ⅱ浜堤列や第Ⅲ浜堤列を含む遺跡の広範な広がりが認められる。古代には全国的に道路網が整備され、陸奥国には東山道と呼ばれる官道が通じていた。平安時代中期の『延喜式』には、東山道の駅家として「玉前駅」が記載されており、この「玉前駅」についてはこれまで多くの研究者が岩沼市南長谷の玉崎に比定してきた。また多賀城跡の調査では「玉前割」の文字が書かれた木簡が出土し（宮城県多賀城跡調査研究所 1985）、玉前に関所が存在したことも明らかとなっている。この玉崎地区の東には前述した原遺跡が所在している。調査で掘立柱建物跡や溝跡が発見され、東海地方の製品とみられる円面硯など多数の遺物が出土しており、現在「玉前駅」や「玉前割」の候補地として脚光を浴びている。原遺跡は古墳時代後期から平安時代前半にかけて継続した遺跡であることもわかっており、阿武隈川の現流路に近い自然堤防に立地していることから、陸上交通だけでなく河川交通の要所でもあった可能性も考えられる。

ほかに丘陵部の遺跡には北原遺跡があり、平安時代の竪穴住居跡が1棟発見されている。また標高200m近い丘陵中腹という特異な立地を持つ岩蔵寺遺跡（38）は、山岳仏教に関わる寺院跡やその関連施

設の可能性をもつものと考えられている。岩蔵寺境内にある薬師堂には平安時代後期に遡る可能性のある仏像があり、また境内付近からは平安時代後半の遺物が発見されている。

この平安時代に遺跡が海岸部への広範な広がりをもつことは前述したが、これらの遺跡の中にはにら塚遺跡（42）のように製塩土器が発見されている遺跡もあり、海岸に近いエリアでの製塩活動を示すものとして注目される。

中世の遺跡は岩沼市では16箇所知られている。鶴ヶ崎城跡では中世後半の陶器や磁器が出土し、城の創始が中世までさかのぼることが判明している。下野郷館跡では近世の遺構と重複して、中世の遺構も多数発見されており、出土する遺物から鎌倉時代後半頃にはすでに屋敷地が存在していたことが推測されている。墓所や信仰関係では、熊野遺跡の北西約200mに中ノ原遺跡（52）がある。ここでは基壇状の高まりの上に2基の板碑が存在し、その一つの板碑下部から火葬骨が埋納された在地産の中世陶器壺が出土した。このほかにも火葬骨を伴う陶器片が発見されており、鎌倉時代後半の蔵骨器が埋納された上にその墓標として板碑が建立されたことがわかっている（川又・熊谷 2009）。前述した岩蔵寺遺跡では境内の北側山林から中世の板碑や集石遺構群が検出されており、一帯が墓域や供養の場だったことが判明している。

近世の岩沼は奥州街道沿いの宿場町として発展する。近世の遺跡としては鶴ヶ崎城跡や丸山遺跡（53）、下野郷館跡、西須賀原遺跡（48）、長徳寺前遺跡（50）などが知られている。鶴ヶ崎城跡は中世からの平山城で、近世には「岩沼城」、「岩沼要害」と呼ばれ、一時期は仙台藩内のうちわけ大名である田村氏の藩庁として、他の時期は古内氏などの居館として機能した。これまで平場や土塁などが調査され、陶器や磁器などが多数発見されている。鶴ヶ崎城跡の南西約1kmには丸山遺跡がある。この地点はかつて城下町の中で家中屋敷が立ち並ぶエリアの中にあり、調査でもそれに関わる区画溝跡や井戸跡などが検出されている。下野郷館跡は前述したように中世からの屋敷地で、近世初期からは佐藤氏、奥山氏の領地となり、その時期の屋敷跡が発見されている。特に平成28年度の調査では、掘立柱建物跡、井戸跡、区画溝などの屋敷跡を示す遺構群とともに、船着場とみられる護岸施設が発見されている。その後、18世紀以降は仙台藩直属の矢野目足軽が組織され、多くの足軽が居住する地域となり、調査でもこの時期の掘立柱建物跡や井戸跡、区画溝跡などが多数発見されている。西須賀原遺跡では調査の結果、中世末から近世にかけて営まれた居住域と畑などの生産域、墓域が発見された。墓壇は直葬墓と木棺墓の19基が検出され、銭貨や煙管などのほかに眼鏡などが副葬されていた。長徳寺前遺跡からは2基の礫石経塚が確認され、26,000点を超える大量の礫石経とともに木簡などが発見されている。経塚はひとつは直径約1.4mの円形か長円形、他は一辺約1mの方形か長方形で、造営時期については前者は出土した陶器から17世紀後半頃、後者は経碑銘から19世紀前半頃と推定されている。近世における庶民層の信仰のあり方を知る上で貴重な資料である。

このほかに近世には海岸線に平行して人工的な河川、貞山堀（木曳堀）（44）が造られた。『仙台領国絵図』などから近世初期には開削されたとも推定されており、その目的としては船による木材等の輸送路や海岸部の新田開発に合わせた排水路などが考えられている。

なお、古くからの道として伝承され、近世の地誌にも記されている東街道（東海道）が熊野遺跡付近の西側丘陵東裾を通ることが従来から指摘されてきた。その周辺には金蛇水神社や笠島道祖神、実方中将の墓、熊野三社など、古くからの寺社や伝承地が分布している。

熊野遺跡の名称は熊野の小字名を代表させて名付けられたものであるが、この地名は地内に鎮座する熊野社に由来している。

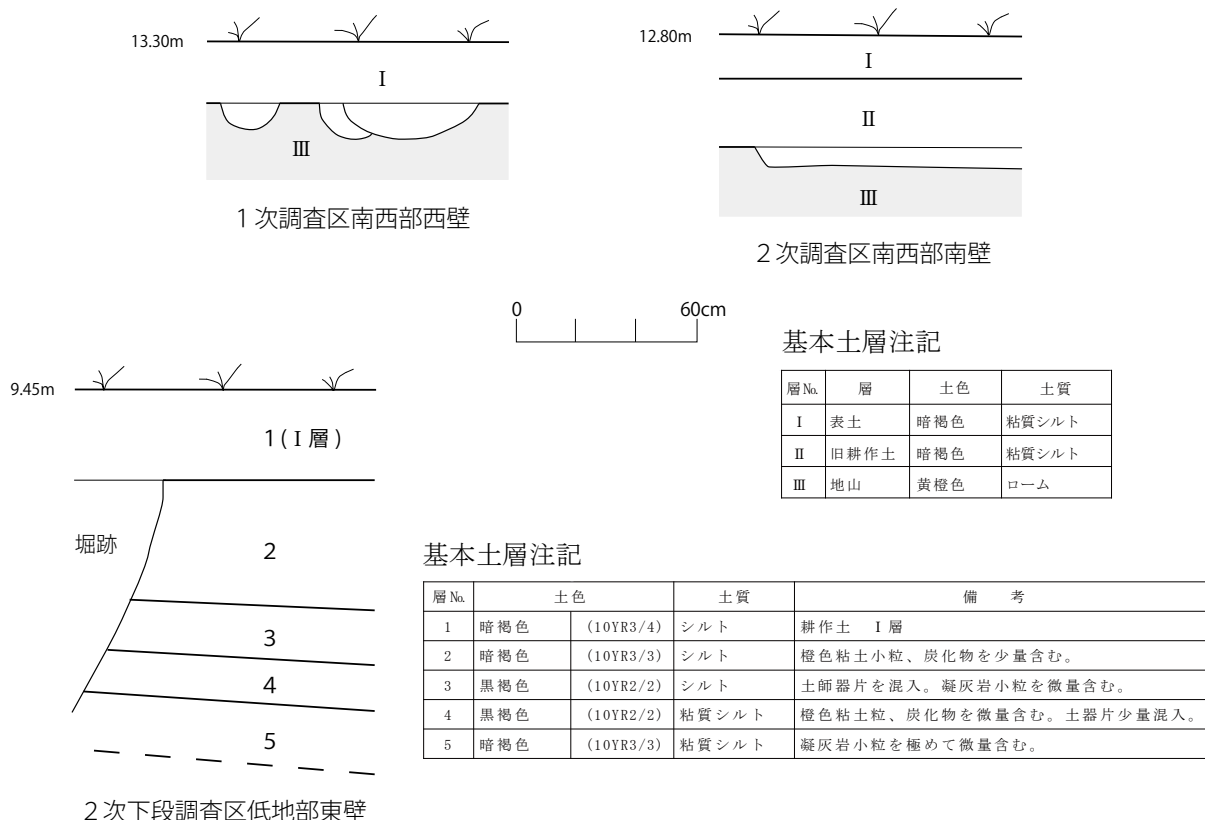
## 第Ⅲ章 基本層序

2次にわたる調査区は丘陵尾根上（1次調査区）、丘陵緩斜面（2次上段調査区）と、丘陵裾部から低地にかけて（2次下段調査区）に展開している。丘陵緩斜面については頂部に造成された住宅地の防護壁などで切土され、また削平により改変している。

【1次調査区】約 20cm 層厚の表土（Ⅰ層 耕作土）下がすぐ黄橙色ローム質土の地山層（Ⅲ層）となる。全ての遺構はこの地山面で検出されている。

【2次上段調査区】北側の改変の進んだ住宅地寄りでは表土（Ⅰ層）下すぐ地山層（Ⅲ層）となるが、南側では 15cm 前後の表土（Ⅰ層）下に約 30cm の旧耕作土（Ⅱ層）が堆積し、黄橙色ローム質土の地山層（Ⅲ層）へと続く。ここでも遺構は全てこの地山面で検出されている。

【2次下段調査区】約 30cm 層厚の表土（Ⅰ層 耕作土）下は南側の低地部に向かい、大きく傾斜する。調査区南端部で、シルトや粘土質シルトの暗褐色土および黒褐色土が深さ約 1m ほど堆積し、下層にさらに続くことが確認された。南側低地部（現金蛇水神社臨時駐車場）は東西約 150m、南北約 50m の広がりをもつ谷状地形をなしていることが推定される。

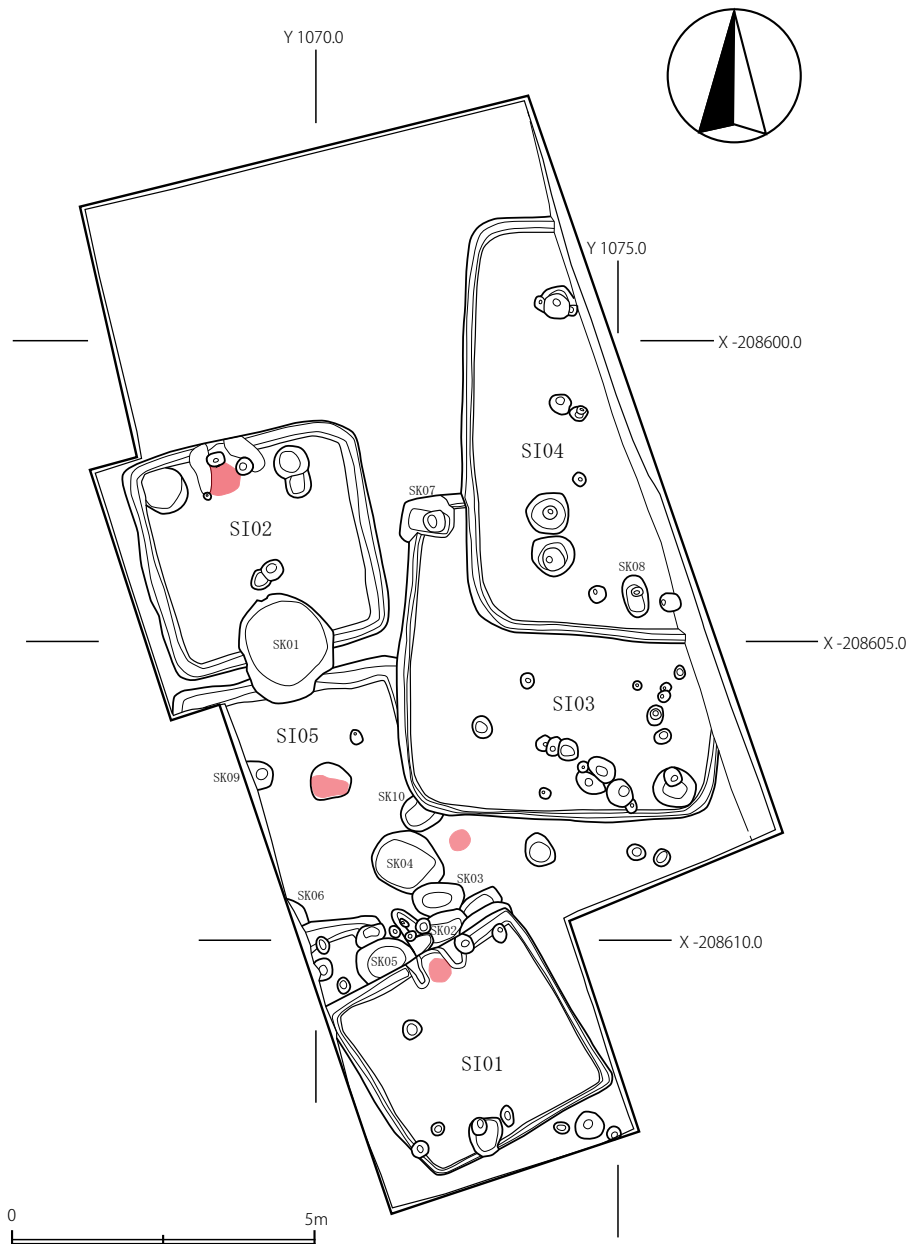


第6図 基本層序模式図

## 第IV章 発見された遺構と遺物

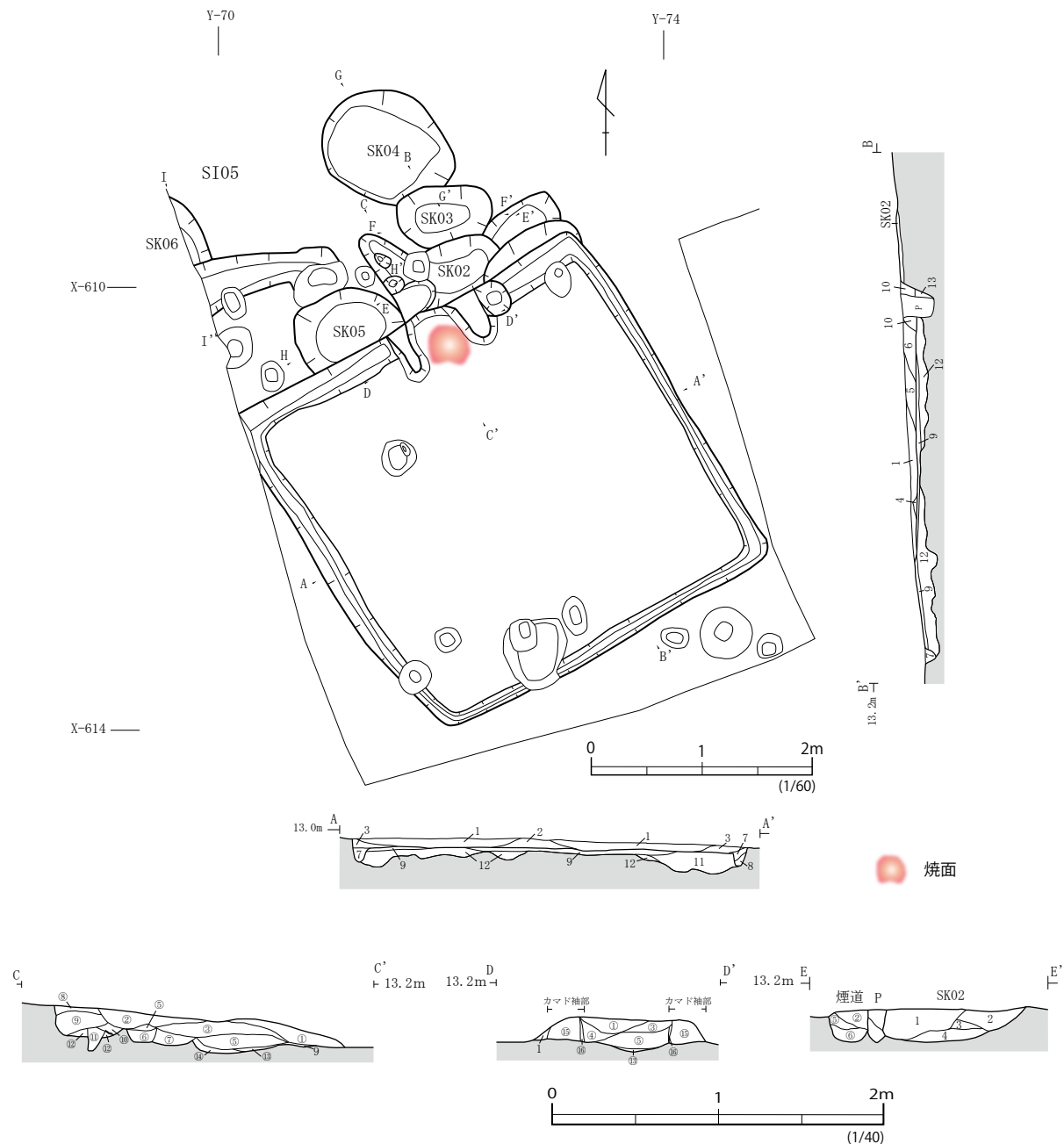
### 【1次調査】

1次調査では遺構として竪穴建物跡5棟、土坑 10 基、ピット多数が検出された。また遺物としては土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器、石器、石製品などが出土している。ここでは遺構に伴うとみられる遺物は遺構ごとに掲載し、明らかに時期の異なる遺構出土の遺物、遺構以外や基本層出土の遺物は最後にまとめて掲載している。



第7図 1次 遺構全体図

第IV章 発見された遺構と遺物【1次調査】



SI01 土層注記

層No.	土色		土質	備考
1	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	褐色ロームブロック多く含む。住居内堆積土
2	黒褐色	(10YR2/1)	シルト	焼土粒微量含む。住居内堆積土
3	黒褐色	(10YR3/2)	シルト	ローム粒少量含む。住居内堆積土
4	赤褐色	—	粘土	焼けた粘土塊。住居内堆積土
5	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	焼土粒・炭化物多量含む。カマドからの流入土。住居内堆積土
6	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土やや多く、焼土・炭化物少量含む。住居内堆積土
7	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	褐色ロームやや多く含む。住居内堆積土
8	褐色	(10YR4/4)	シルト	黒褐色土粒微量含む。住居内堆積土
9	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	ローム粒極めて多量含む。貼床
10	褐色	(10YR4/4)	粘質シルト	焼土ブロックやや多く含む。カマド袖構築土
11	黒褐色	(10YR2/2)	シルト	ロームブロック極めて多量、焼土粒微量含む。掘方堆積土
12	暗褐色	(10YR3/3)	シルト	しまり極めて強い。ロームブロック極めて多量含む。掘方堆積土
13	にぶい黄褐色	(10YR4/3)	シルト	黒褐色土少量含む。掘方堆積土

第8図 1次 1号竪穴建物跡 (SI01)

## 1. 竪穴建物跡

### (1) 1号竪穴建物跡 (SI01)

〔位置・遺存状況・重複〕調査区の南部で、全体が検出された。確認面からの深さは南にかけての緩斜面に位置するため、北では18cm、南側では2cmとなっている。土坑やピットと重複しており、その多くに切られている。

〔平面形・規模・方向〕平面形状は方形で、規模は南北辺が3.45m、東西辺が3.60mを測る。主軸は33°西へ傾く。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕床面はローム質土を用いた貼床である。北壁中央からカマドが検出された。燃焼部は天井部が失われ、ローム質土で構築された側壁部分が残存しており、その規模は幅が45cm、奥行きが50cm前後である。その奥壁から約80cm煙道部が延びているが、他の遺構に切られ遺存状態が悪い。貯蔵穴は認められなかった。

〔柱穴・周溝〕柱穴は確認されなかった。周溝はカマドを除いた四周を巡り、断面形状はやや鋭角なV字状をなす。

〔堆積土〕周溝や床面下堆積土を除き、6層確認されたが、いずれも自然堆積層である。

〔出土遺物〕(第9図)床面直上や堆積土などから土師器が出土している。7点を図示したが、カマド前面の床面直上から出土した土師器坏・甕が本建物跡の使用時期を示す資料と考えられる。1は有段丸底の内面黒色処理された坏で、外面の段は体部下方か下端に近い位置に設けられている。3は小型の甕で、底部から口縁部にかけて逆「ハ」字状に開き、口縁が短く外反するもので、頸部には段が形成されている。これら1と3の特徴は村田晃一氏による土師器編年(村田 2007)の4段階頃に相当するもので、年代的には7世紀後半頃に位置づけられる。

SI01 カマド土層注記

層No.	土色	土質	備考
①	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	焼土粒・炭化物少量含む。
②	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土粒やや多く含む。
③	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色ロームブロック少量、焼土粒微量含む。
④	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック・焼土ブロック極めて多量含む。
⑤	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土ブロック極めて多量含む。
⑥	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒少量含む。
⑦	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロックやや多く、焼土粒微量含む。
⑧	褐色 (10YR4/4)	シルト	ロームブロック主体。黒褐色土微量含む。煙道天井材
⑨	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロック多量、焼土粒・炭化物少量含む。
⑩	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土粒・炭化物やや多く含む。
⑪	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ロームブロックやや多く含む。
⑫	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロック・焼土粒微量含む。
⑬	赤褐色	シルト	被熱を受けたロームブロック極めて多量含む。
⑭	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック少量、焼土粒やや多く含む。
⑮	黄褐色	シルト	ロームブロック極めて多量、砂利微量含む。
⑯	赤褐色	シルト	被熱を受けたロームブロック粒
9	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ローム粒極めて多量含む。貼床

SK02 土層注記

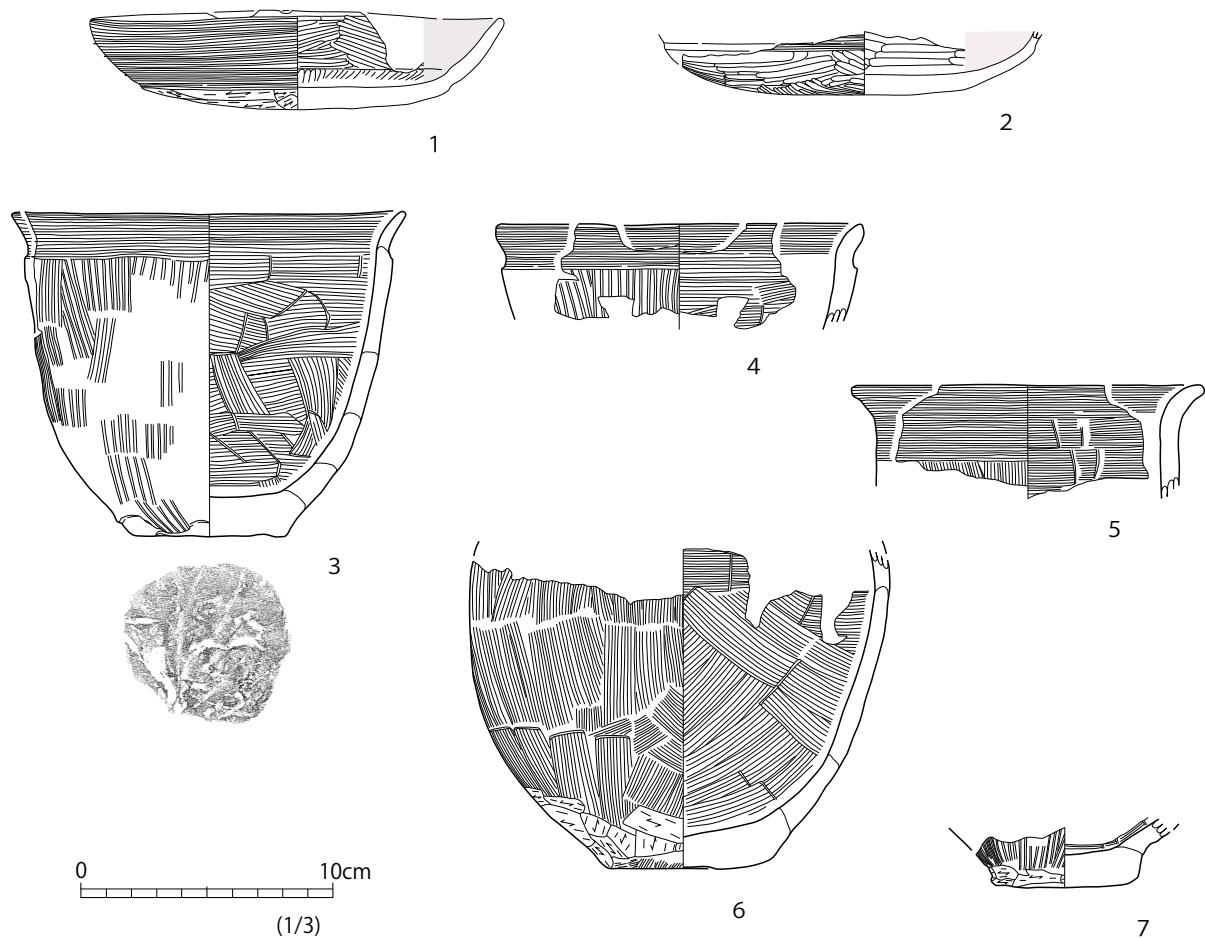
層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土粒多量に含む。炭化物少量含む
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	ロームブロック主体。黒褐色を微量含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土粒を微量含む。
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロックやや多く含む。焼土粒少量含む。

(2) 2号竪穴建物跡 (SI02)

〔位置・遺存状況・重複〕調査区のほぼ中央部で、全体が検出された。削平により遺存状態は極めて悪く、ほとんどが床面と周溝のみの確認である。南側の一部は土坑 (SK01) により切られている。

〔平面形・規模・方向〕平面形状は方形で、規模は南北辺が 3.76m、東西辺が 3.94m を測る。主軸は 14° 西へ傾く。

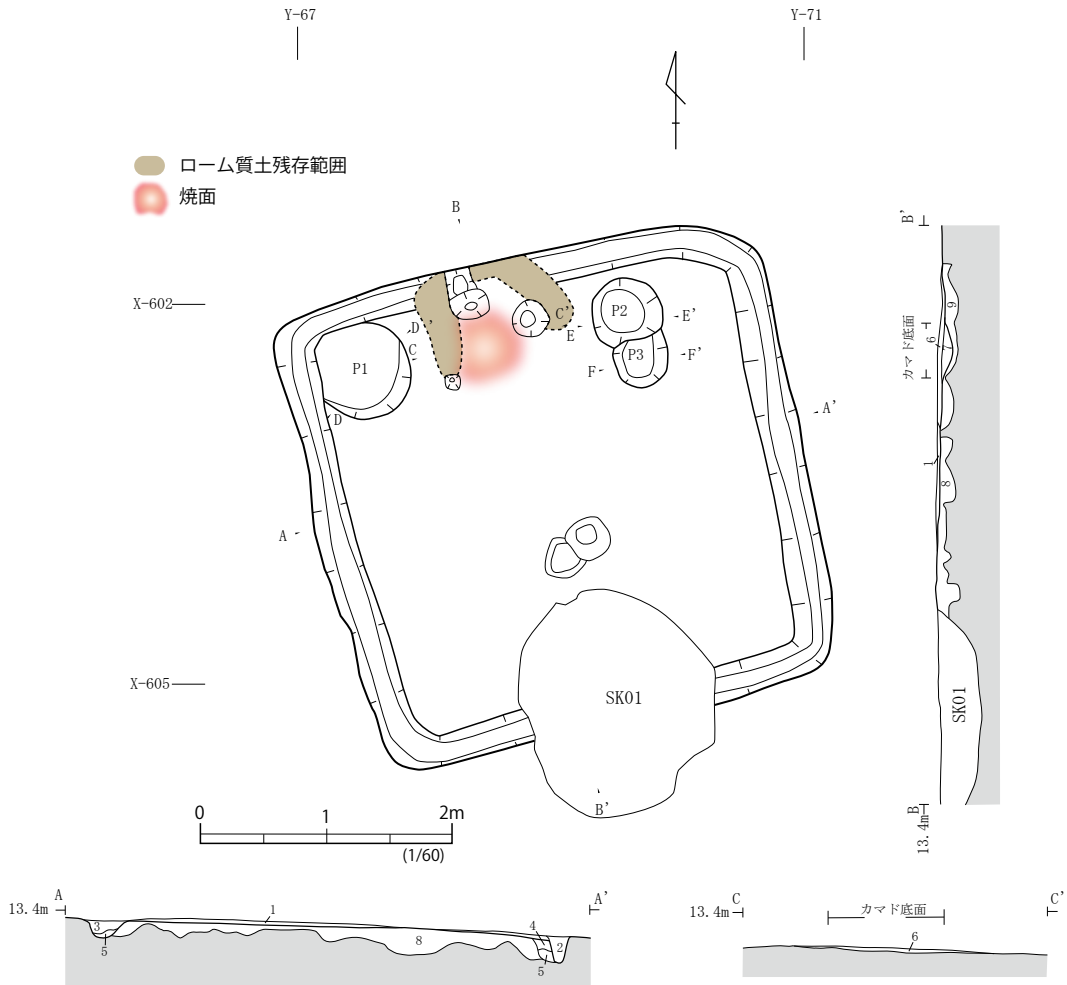
〔床面・カマド・貯蔵穴〕床面はシルト質土を用いた貼床である。北壁中央からカマドが検出されたが、天井部・側壁・煙道部とも大きく損なわれていた。カマド構築材はわずかに残る袖最下部からローム質土と推定される。燃焼部底面は堅く焼けており、その内部には小ピットが検出されされたことから、本来はカマド袖のオサエ材や支脚が存在していたと推定される。カマドの両側からはピット (P1・P2・P3) が検出された。その中の P1 は径約 70cm、深さ 15cm の円形をなしており、規模や位置などから貯蔵穴の可能性も考えられる。



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 坏	床面直上	有段、ヘラケズリ・ヨコナデーヘラミガキ・内黒	ほぼ完存	16.4	—	3.9	C-1	13-1
2	土師器 坏	堆積土	有段、ヘラミガキーヘラミガキ・内黒	底部のみ3/4	—	—	—	C-2	13-2
3	土師器 甕	カマド脇床面直上	小型、ハケメ・ヨコナデーヘラナデ・ヨコナデ	全体の1/2~1/3	(15.7)	6.2	13.0	C-3	13-3
4	土師器 甕	カマド燃焼部堀方	ハケメ・ヨコナデーヘラナデ・ヨコナデ	口縁部破片	(14.4)	—	—	C-4	13-4
5	土師器 甕	堆積土	ヘラナデ・ヨコナデーヘラナデ・ヨコナデ	口縁部破片	(14.0)	—	—	C-5	13-5
6	土師器 甕	カマド脇床面直上	ヘラナデ・ヘラケズリーヘラナデ	体部下半~底部1/1	—	6.6	—	C-6	13-6
7	土師器 甕	カマド脇床面直上	ハケメ・ヘラケズリーヘラナデ	底部1/1	—	—	5.7	C-7	13-7

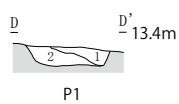
第9図 1次 1号竪穴建物跡 (SI01) 出土遺物





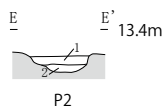
SI02 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	ロームブロックやや多く、炭化物少量含む。焼土粒含む。住居内堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	柱または杭の痕跡。ローム粒少量含む。周溝堆積土
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ロームブロック微量含む。周溝堆積土
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ローム粒少量含む。周溝掘方
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロックやや多く含む。周溝掘方
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土粒多量含む。カマド燃焼部
7	—	—	焼土主体層。焼けたロームブロック多量含む。カマド燃焼部
8	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまり極めて強い。上面が貼り床構成土。ロームブロック極めて多量含む。住居掘方
9	黒褐色	シルト	カマド掘り方。ロームブロックやや多く含む。炭化物やや多く含む。カマド掘方



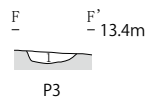
P1 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒やや多く、焼土粒微量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ローム粒多量、焼土粒やや多く含む。



P2 土層注記

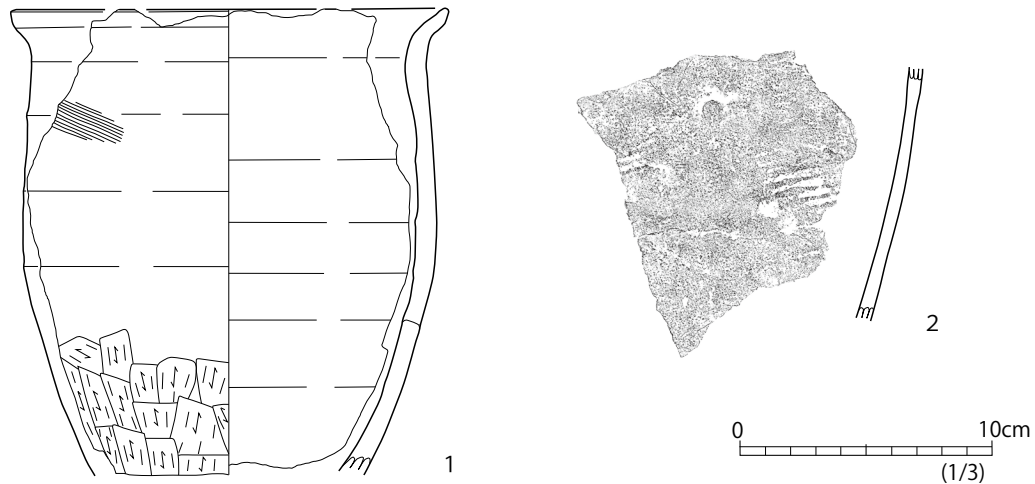
層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土ブロック多量、ローム粒・炭化物少量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土粒少量含む。



P3 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロックやや多く、炭化物微量含む。

第10図 1次 2号竪穴建物跡 (SI02)



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 甕	床面直上	ロクロナデ・ヘラケズリー・ロクロナデ	口縁部～体部破片	(17.4)	—	—	C-8	13-8
2	土師器 甕	床面直上	平行タタキ目・ロクロナデ・ヘラケズリー・ロクロナデ	口縁部～体部破片	—	—	—	C-9	13-9

第 11 図 1次 2号竪穴建物跡 (SI02) 出土遺物

〔柱穴・周溝〕 柱穴は確認されなかった。周溝はカマドを除いた四周を巡り、断面形状はU字状をなす。

〔堆積土〕 周溝や掘方堆積土を除き、1層のみの確認で、自然堆積層である。

〔出土遺物〕 (第 11 図) カマド付近の床面直上から土師器の甕破片が2点出土しており、本建物跡の使用時期を示す資料と考えられる。2点ともロクロで成形されたもので、1は中型の甕で、口縁端部はシャープさがみられない作りのものである。2の外面には成形時の平行タタキ目が確認される。これら1・2の特徴は村田晃一氏の土器編年(村田 1994)による1群土器から2群土器にかけてみられるもので、年代的には8世紀後葉から9世紀前半頃に位置づけられる。

### (3) 3号竪穴建物跡 (SI03)

〔位置・遺存状況・重複〕 調査区の中央部東側で検出された。北東部分はSI04と重複し、それに切られている。また東辺は宅地造成時の段切りによって失われている。確認面から床面までの深さは4～28cmほどである。

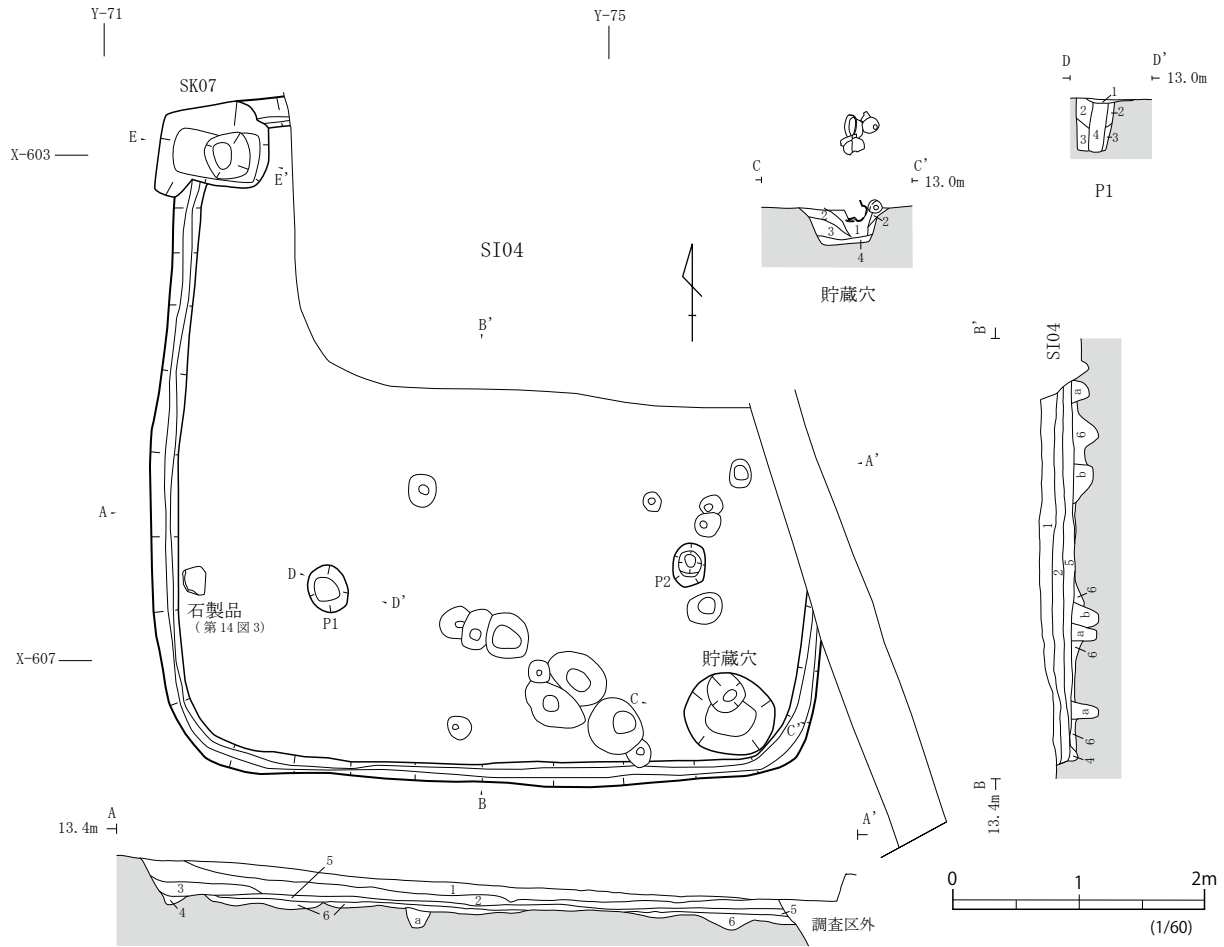
〔平面形・規模・方向〕 全体的な平面形状は不明であるが、隅丸方形をなすものと考えられる。規模は西辺が5.34m、南辺が5.28mを測る。主軸はほぼ真北である。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕 床面はローム質土を用いた貼床であり、中央から東側にかけて強く硬化している。調査区内では炉跡もカマドも確認されていない。床面の南東部から、規模が径70×65cm、深さ約30cmのほぼ円形のピットが検出された。堆積土は4層確認され、いずれも自然堆積層である。上部からは完存率の高い土師器が3点出土しており、貯蔵穴と考えられる。

〔柱穴・周溝〕 柱穴は南半部より2個(P1・P2)確認された。いずれも深さが40cm前後あり、P1からは柱痕跡が確認されている。周溝は調査区内では全周し、断面形状はV字状をなす。

〔堆積土〕 周溝や掘方堆積土を除き、3層確認され、いずれも自然堆積層である。

〔出土遺物〕 (第 13 図・第 14 図) 床面や貯蔵穴と考えられるピットから土師器が、堆積土から土師器や石器、石製品、縄文土器、弥生土器が出土している。このうち、床面や貯蔵穴出土の土師器が本建物跡の使用



SI03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土粒少量含む。住居内堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土粒多量、炭化物少量含む。住居内堆積土
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	しまりやや強い。褐色粘土粒少量含む。住居内堆積土
4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ロームブロック少量含む。周溝堆積土
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ロームブロックやや多く含む。貼床
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック・ローム粒多量含む。住居掘方埋土
a	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック微量含む。P堆積土
b	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ローム粒微量含む。P堆積土

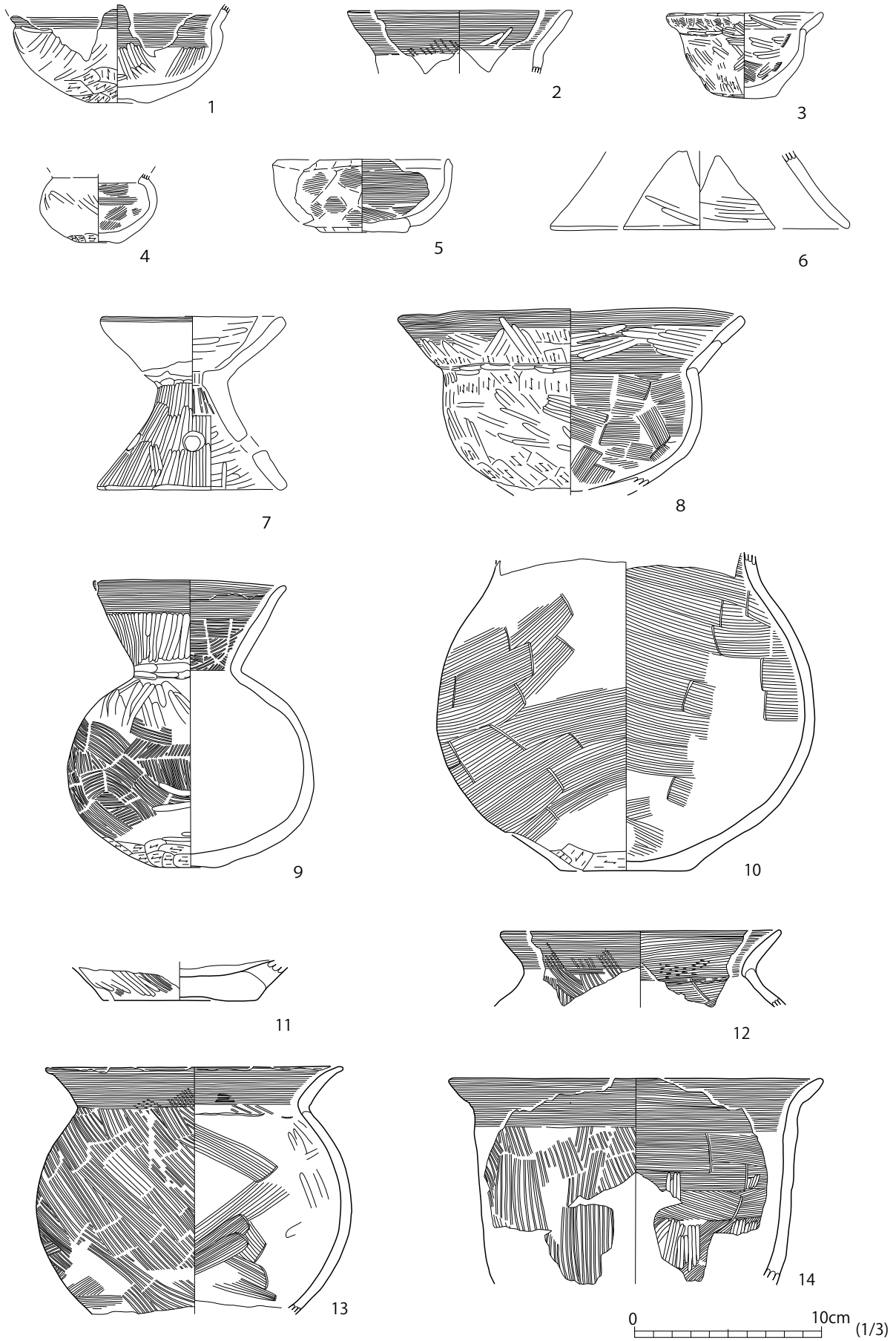
貯蔵穴土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック少量含む。
2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒やや多く含む。
3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロック多量含む。
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒微量含む。

P1 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ロームブロック少量含む。
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	ロームブロック極めて多量、黒褐色土少量含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ローム粒やや多く含む。
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ローム粒少量含む。柱痕跡。

第12図 1次 3号竪穴建物跡 (SI03)



第13図 1次 3号竖穴建物跡(SI03)出土遺物(1)



第14図 1次 3号竖穴建物跡(SI03)出土遺物(2)

第IV章 発見された遺構と遺物【1次調査】

番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 坏	堆積土	ヘラケズリ・ヨコナデ・ヘラミガキーヨコナデ・ヘラミガキ	口縁部～体部1/4	—	3.2	—	C-10	14-1
2	土師器 坏	堆積土	ハケメ・ヨコナデーヨコナデ・ヘラミガキ	口縁部破片	(12.0)	—	—	C-11	14-2
3	土師器 坏	床面	ユビナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキーヘラナデ・ヘラミガキ	口縁部1/2 他は1/1	8.4	3.6	4.6	C-12	14-3
4	土師器 坏	堆積土	ヘラケズリ・ヘラミガキーナデ	体部～底部1/1	—	—	2.6	C-13	14-4
5	土師器 坏	堆積土	ナデ・オサエーヘラナデ・ヨコナデ	口縁部～体部1/4	(9.0)	4.8	3.9	C-14	14-5
6	土師器 高坏	堆積土	ヘラミガキーヘラミガキ	脚部破片	(16.0)	—	—	C-15	14-6
7	土師器 器台	貯蔵穴	ヘラケズリ・ヨコナデ・ヘラミガキーヘラナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	脚部完存、坏部1/4	(10.0)	10.2	9.3	C-16	14-7
8	土師器 台付鉢	貯蔵穴	ヘラケズリ・ヨコナデ・ヘラミガキーヘラナデ・ヨコナデ	口縁部～体部1/1	18.6	—	—	C-17	14-8
9	土師器 壺	貯蔵穴	ハケメ・ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキーハケメ・ヨコナデ	ほぼ完存	13.1	3.8	15.9	C-18	14-9
10	土師器 壺	堆積土	ヘラナデ・ヘラケズリーヘラナデ	底部～体部1/2	—	7.0	—	C-19	14-10
11	土師器 壺	堆積土	ハケメ・ヘラミガキー?	底部3/4	—	8.2	—	C-20	14-11
12	土師器 甕	堆積土	ハケメ・ヨコナデーハケメ・ヘラナデ・ヨコナデ	口縁部破片	(15.0)	—	—	C-22	14-12
13	土師器 甕	貯蔵穴	ハケメ・ナデ・ヨコナデーハケメ・ヘラナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	口縁部～体部1/2	(15.9)	—	—	C-21	15-1
14	土師器 甕	堆積土	ハケメ・ヨコナデーヘラナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	口縁部～体部破片	(20.0)	—	—	C-23	15-2

番号	種別	遺構・細部	特徴	残存	法量 (cm, g)				登録番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ	重さ		
1	砥石	堆積土	扁平に打ち割った礫の両側面を砥面している。 細粒凝灰岩	一端欠損	14.0	6.9	1.3	153.5	Kc-1	19-4
2	砥石	—	細長い角状の礫の二面に砥面が認められる。 安山岩	完存	11.8	5.1	3.0	313.0	Kc-2	19-5
3	砥石(?)	堆積土	板状の礫の一面に砥面が認められる。 石皿か磨石の可能性もあり。 安山岩	完存	24.8	20.5	7.1	4830.0	Kc-3	19-6
4	砥石(?)	堆積土	板状の礫の両面に砥面が認められる。 磨石の可能性もあり。 安山岩	半分欠損	19.6	9.7	2.6	649.0	Kc-4	19-7
5	砥石(?)	堆積土	角状の礫の一面に砥面が、他の面に敲打痕が認められる。 磨石と敲石の可能性もあり。 安山岩	完存	16.3	8.3	6.0	1290.0	Kc-5	19-8

時期を示す資料と考えられる。また堆積土出土の土師器や砥石とみられる石製品も本建物跡の使用時期に近い資料と考えられる(ただし第13図14は特徴から混入した後の時期のものと考えられる)。1～13の土師器は坏・高坏・器台・台付鉢・壺・甕から構成され、当時の器種組成をほぼ示すものと考えられる。特徴からは土師器編年の塩釜式の範疇に含まれるもので、年代的には4世紀に位置づけられる。より詳細な位置づけについては第V章で述べたい。砥石とみられる石製品が5点出土している。その中の3は西側の床面に近い堆積土から出土しており、板状の自然礫の一面に砥面が認められる。

(4) 4号竪穴建物跡(SI04)

〔位置・遺存状況・重複〕調査区の東側で検出された。南側はSI03と重複し、それより新しい。また東半部は宅地造成時の段切りによって失われている。確認面から床面までの深さは14cmほどである。

〔平面形・規模・方向〕全体的な平面形は不明であるが、隅丸方形をなすものと推測される。規模は西辺で6.84mを測る。主軸はほぼ真北である。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕床面はローム質土を用いた貼床であり、中央付近で強く硬化している。調査区内では炉跡もカマドも確認されていない。また貯蔵穴も確認されていない。

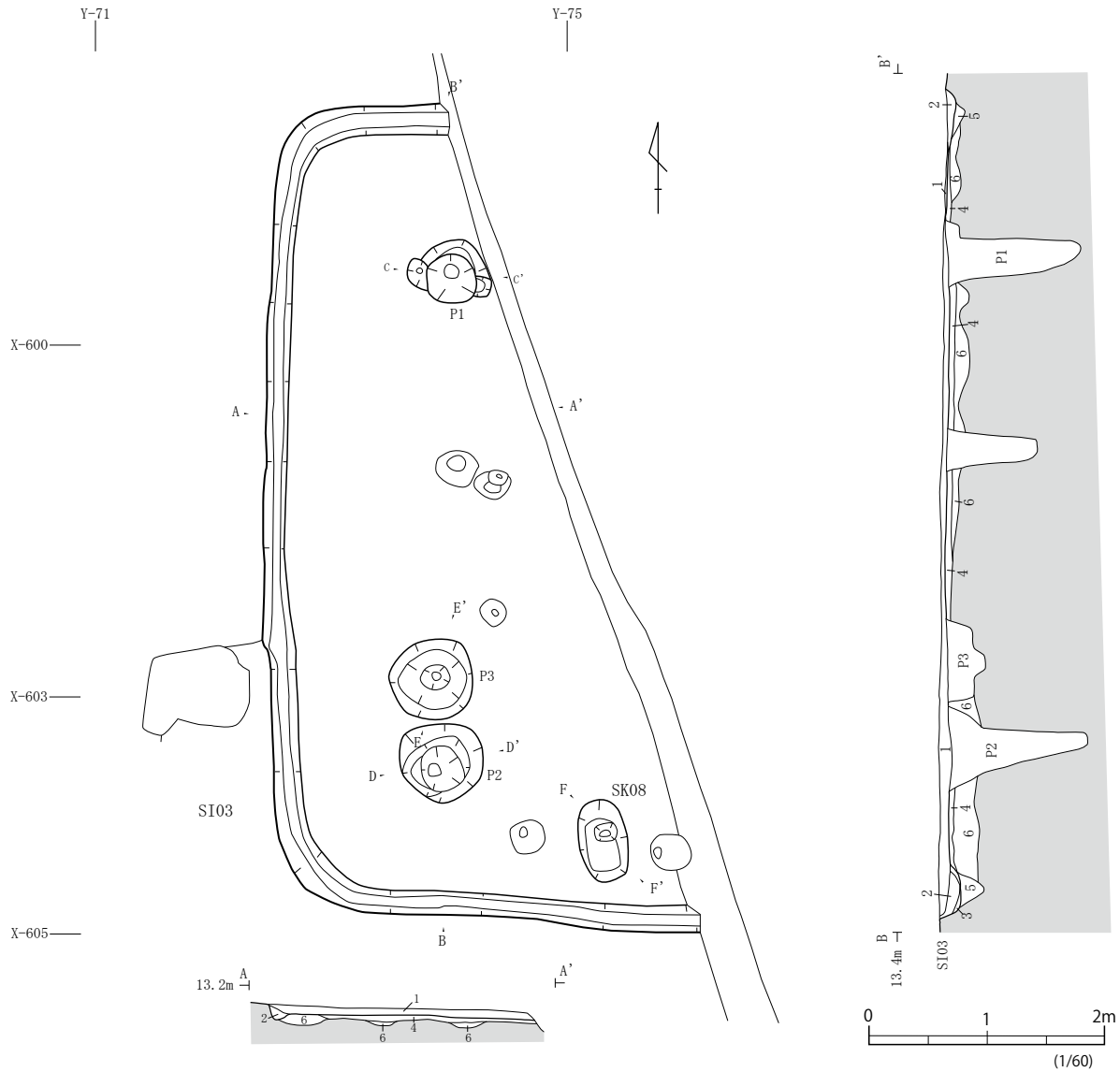
〔柱穴・周溝〕柱穴は2個(P1・P2)確認された。いずれも深さが1m前後あり、支柱穴と考えられる。周溝は調査区内では全周し、断面形状はU字状をなす。

〔堆積土〕周溝や掘方堆積土を除き、自然堆積層の1層のみが確認された。

〔出土遺物〕(第16図)建物掘方や堆積土、ピット堆積土から土師器や縄文土器、弥生土器、石器が出土している。この中の土師器は直接本建物跡の使用時期を示すものではないが、近接した時期のものと考えられる。器種としては小型の壺および甕があり、特徴から土師器編年の塩釜式か南小泉式に相当し、年代的には4～5世紀頃と推定される。

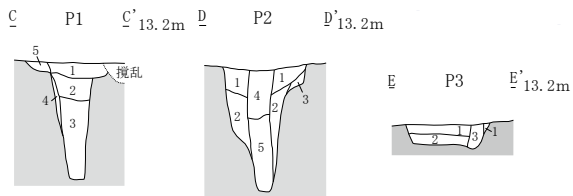
(5) 5号竪穴建物跡(SI05)

〔位置・遺存状況・重複〕調査区の西側で検出された。東辺はSI03、南側は複数の土坑と重複し、それ



SI04 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2) シルト	しまり弱い。ローム粒少量含む。住居内堆積土
2	黒褐色	(10YR2/3) シルト	しまりやや強い。ローム粒多量、炭化物微量含む。周溝堆積土
3	黒褐色	(10YR2/2) シルト	しまりやや弱い。ローム粒少量含む。周溝堆積土
4	黒褐色	(10YR3/2) シルト	ロームブロック極めて多量含む。SI04貼床
5	黒褐色	(10YR3/1) シルト	ロームブロックやや多く含む。周溝覆土。周溝堀方
6	暗褐色	(10YR3/3) シルト	ロームブロックやや多く含む。SI04掘方埋土。住居堀方



P1 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR2/2) シルト	ロームブロック・ローム粒少量、焼土粒微量含む。
2	黒褐色	(10YR3/2) シルト	ロームブロック多量、焼土粒微量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3) シルト	しまり弱い。ローム粒やや多く含む。
4	暗褐色	(10YR3/3) シルト	ロームブロック極めて多量含む。
5	暗褐色	(10YR3/3) シルト	ローム粒少量含む。

P2 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/1) シルト	ロームブロック・ローム粒少量含む。
2	暗褐色	(10YR3/3) シルト	ロームブロック極めて多量含む。
3	黒褐色	(10YR2/2) シルト	ロームブロック微量含む。
4	黒褐色	(10YR3/1) シルト	しまり弱い。ロームブロック微量含む。
5	暗褐色	(10YR3/3) シルト	しまり弱い。ローム粒少量含む。

P3 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(10YR3/2) シルト	ローム粒極めて多量含む。
2	黒褐色	(10YR2/2) シルト	ロームブロック少量含む。
3	暗褐色	(10YR3/3) シルト	ロームブロックやや多く含む。

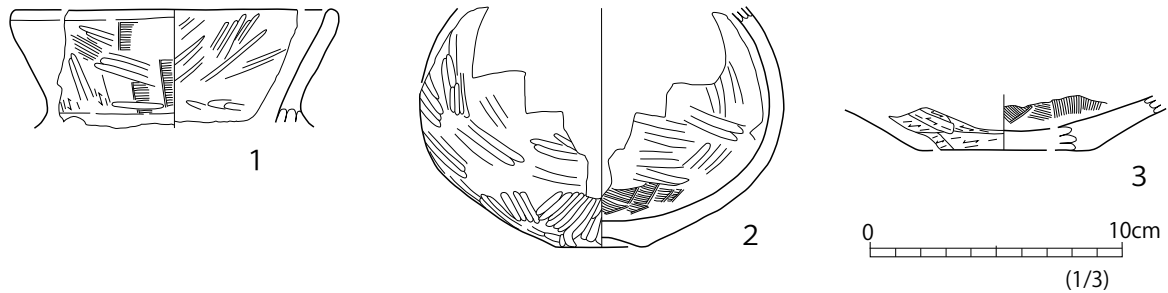
第15図 1次 4号竪穴建物跡 (SI04)

第IV章 発見された遺構と遺物【1次調査】

らの多くに切られている。また西側は調査区外に延びている。削平により壁は残存せず、床面と周溝のみの確認である。

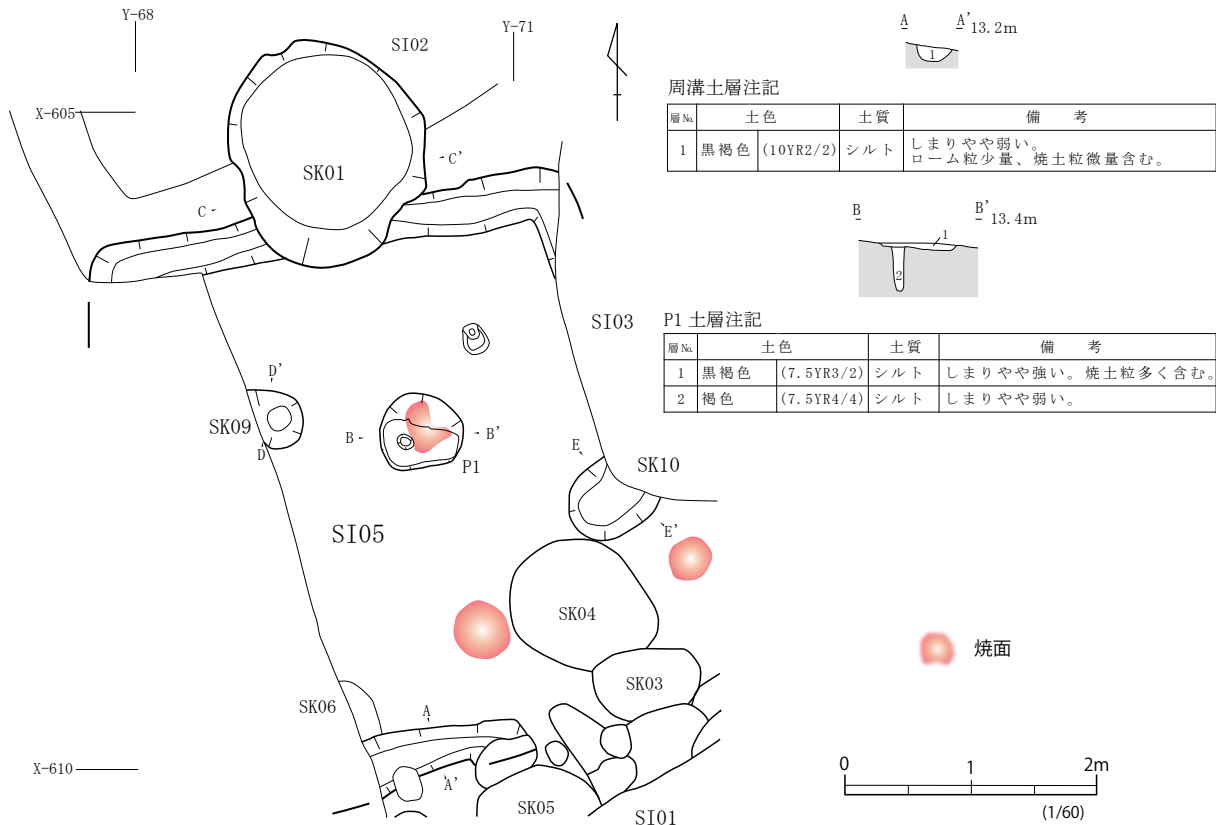
〔平面形・規模・方向〕 全体的な平面形状は不明であるが、周溝の形状から方形をなすものと推測される。規模は北辺で3.73m以上を測る。主軸は11°西へ傾くと思われる。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕 床面での貼床は確認されなかった。調査区内では焼面を伴うピット(P1)が確認



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 壺	堀方	ヘラナデ・ヘラミガキーヘラミガキ	口縁部破片	(12.7)	—	—	C-24	15-3
2	土師器 壺	堀方	ヘラミガキーヘラナデ・ヘラミガキ	体部～底部1/4	—	3.5	—	C-25	15-4
3	土師器 甕	堆積土	ヘラケズリーヘラナデ	底部破片	—	(6.8)	—	C-26	15-5

第16図 1次 4号竪穴建物跡(SI04)出土遺物



第17図 1次 5号竪穴建物跡(SI05)



されたが、炉跡の可能性が考えられる。なお床面の南部と南東部でも焼面が確認されている。

〔柱穴・周溝〕柱穴は確認されなかった。周溝は調査区内では南東部を除いて全周し、断面形状はU字状をなす。

〔堆積土〕周溝の堆積土のみ確認された。

〔出土遺物〕出土していない。重複関係から、SI03の時期の4世紀より以前の建物跡とみられる。

第2表 第1次調査竪穴建物跡属性表

遺構名	平面形	規模 (m) 東西×南北	軸方位	床	カマド	カマド構築材	煙道部	炉	柱穴	周溝	出土遺物	時期	備考
SI01	方形	3.60 × 3.45	N-33° -W	貼床 (ローム)	北壁中央	ローム質土	短煙道	-	未確認	カマドを除く四辺	土師器	7世紀後半	
SI02	方形	3.94 × 3.76	N-14° -W	貼床 (ローム)	北壁中央	ローム質土	不明	-	未確認	カマドを除く四辺	土師器	8世紀後半～ 9世紀前半	床面のみの検出
SI03	隅丸方形	5.28 × 5.34	N-1° -E	貼床 (ローム)	-	-	-	未確認	P1・P2	四辺	土師器・石製品・ 石器・縄文土器・ 弥生土器	4世紀	建物内南東部に貯蔵穴1基
SI04	隅丸方形?	南北 6.84	真北	貼床 (ローム)	-	-	-	未確認	P1・P2	東・北・南壁	土師器・縄文土器・ 弥生土器・石器	4～5世紀	
SI05	方形?	東西 3.8 以上	N-11° -W	地山	-	-	-	中央 地床 炉?	未確認	北壁・西壁?	-	4世紀?	SI03より旧

## 2. 土坑

### (1) 1号土坑 (SK01)

SI02の南側とSI05の北辺を切っており、それらより新しい。平面形状はほぼ円形で、規模は長軸が1.77m、短軸が1.57m、確認面からの深さは30cmを測る。断面形状は逆台形である。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。

### (2) 2号土坑 (SK02)

SK03を切り、SI01に切られているが、ほかにもいくつかのピットと重複している。平面形状は楕円形をなすとみられ、規模は長軸が0.65m以上、短軸が0.48m以上、確認面からの深さは28cmを測る。断面形状は皿形である。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。

### (3) 3号土坑 (SK03)

SK04を切り、SK02に切られている。平面形状は楕円形をなすとみられ、規模は長軸が0.85m以上、短軸が0.55m、確認面からの深さは21cmを測る。断面形状は緩やかなU字形である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積土である。遺物は堆積土中からクロロで成形された土師器が出土している(第19図)。1は口径の割には底径が大きく、口縁部が内弯して立ち上がる形態のものである。底部切り離しが回転糸切りで、その後に手持ちヘラケズリの再調整が行われており、内面は黒色処理が施されている。これらの形態や技法は、平安時代でも前葉の9世紀代の土器に多くみられる特徴である。

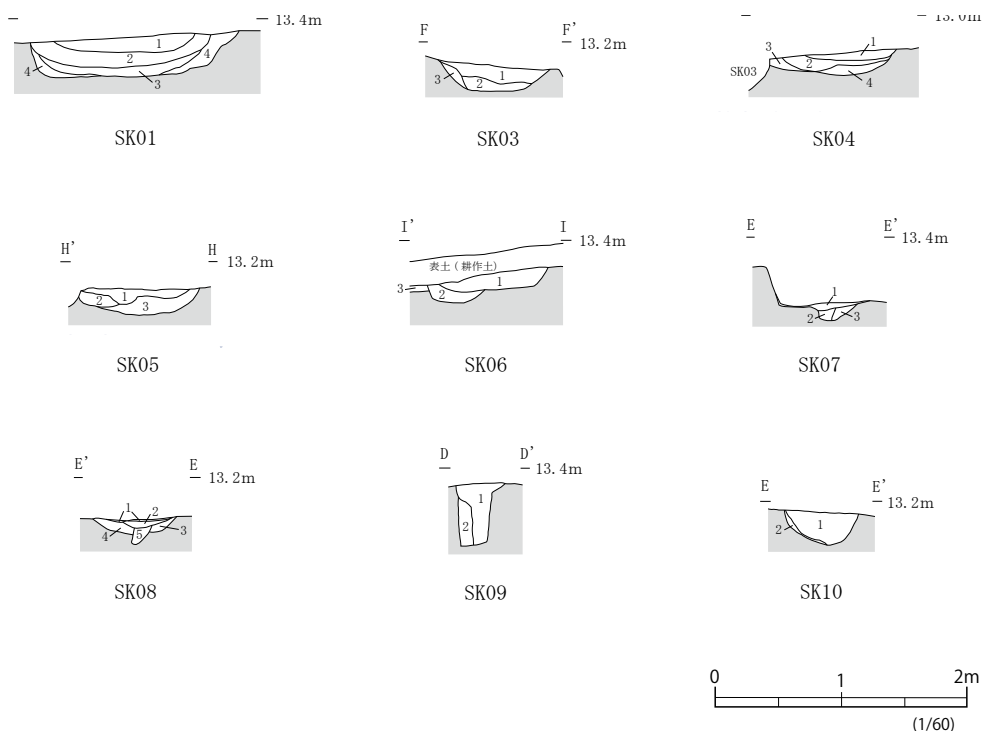
### (4) 4号土坑 (SK04)

SK03に一部切られているが、平面形状はほぼ略円形をなし、規模は長軸が1.18m、短軸が0.98m、確認面からの深さは20cmを測る。断面形状は皿形である。堆積土は4層に分かれ、いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。

### (5) 5号土坑 (SK05)

SI01に南側が切られ、北側のピットを切っている。平面形状はほぼ略円形をなすものとみられ、規模は長

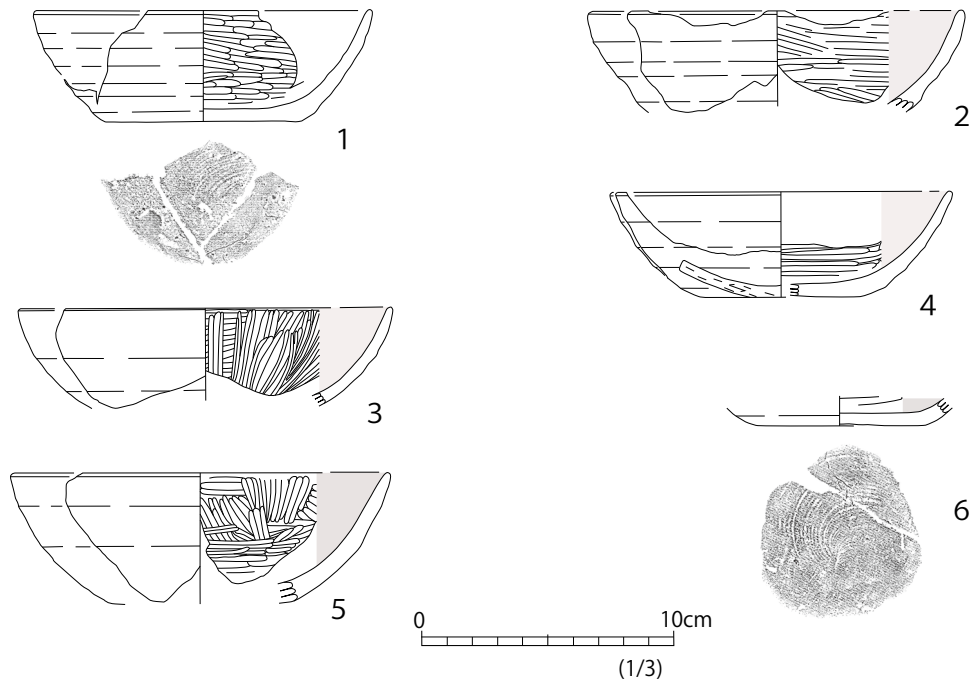
第IV章 発見された遺構と遺物【1次調査】



SK 土層注記

遺構	層No.	土色	土質	備考
SK01	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	しまり強い。ローム粒多量含む。
	2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	しまり強い。ローム粒多量、焼土粒微量含む。
	3	黒色 (10YR2/1)	シルト	しまり弱い。ローム粒少量含む。
	4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	崩落土。しまり弱い。ロームブロック多量含む。
SK03	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック微量、焼土粒極めて多量含む。
	2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒やや多く含む。
	3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	ロームブロック多量、焼土粒少量含む。
SK04	1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土粒少量含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土粒多量含む。
	3	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土粒多量含む。柱痕跡
	4	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	しまり弱い。褐色粘土粒少量含む。
SK05	1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	しまりやや弱い。ローム粒多量、焼土粒・炭化物微量含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりやや弱い。ローム粒少量、焼土粒・炭化物微量含む。
	3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	しまりやや弱い。ローム粒多量、焼土粒微量含む。
SK06	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土粒極めて多量、炭化物少量含む。SK06
	2	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒少量含む。SI05周溝堆積土。
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロックやや多く含む。
SK07	1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ロームブロックやや多く、焼土粒微量含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロック多量含む。
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック極めて多量含む。
SK08	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	焼土粒微量含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロック多量含む。
	3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒極めて多量含む。
	4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒少量含む。
	5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒微量含む。
SK09	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまり強い。ロームブロック少量、ローム粒多量、炭化物・焼土粒微量含む。
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	しまり弱い。ローム粒多量含む。
SK10	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまり極めて強い。ローム粒・炭化物・焼土粒多量含む。
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	崩落土。しまり強い。

第18図 1次 土坑(SK)



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 坏	SK03	ロクロナデ、底部回転系切り・手持ちヘラケズリーヘラミガキ・内黒	口縁部～底部1/4	(13.4)	7.8	4.4	C-27	15-6
2	土師器 坏	SK03	ロクロナデヘラミガキ・内黒	口縁部1/5	(14.8)	—	—	C-28	15-7
3	土師器 坏	SK03	ロクロナデヘラミガキ・内黒	口縁部1/4	(15.3)	—	—	C-29	15-8
4	土師器 坏	SK10	ロクロナデ・ヘラケズリ、底部手持ちヘラケズリーヘラミガキ・内黒	口縁部～底部1/5	(13.6)	(6.2)	(4.2)	C-30	15-9
5	土師器 坏	SK10	ロクロナデヘラミガキ・内黒	口縁部1/5	(15.0)	—	—	C-31	15-10
6	土師器 坏	SK10	ロクロナデ、底部回転系切り・手持ちヘラケズリーヘラミガキ・内黒(?)	底部4/5	—	6.8	—	C-32	15-11

第 19 図 1次 土坑 (SK03・SK10) 出土遺物

軸が 0.95 m、短軸が 0.58m 以上、確認面からの深さは 24cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。

(6) 6号土坑 (SK06)

一部のみの確認で、南側は SI05 の周溝を切っている。平面形状は不明で、規模は長軸が 0.87 m、短軸が 0.17m 以上、確認面からの深さは 15cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は 1層確認され、自然堆積土である。遺物は出土していない。

(7) 7号土坑 (SK07)

SI03 の北西隅を切っている。平面形状は不定の長方形をなし、規模は長軸が 0.87 m、短軸が 0.65m、確認面からの深さは 39cm を測る。断面形状は不定形である。堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。

(8) 8号土坑 (SK08)

SI04 の南側床面から確認されており、SI04 より古い可能性が考えられる。平面形状は南北に長い楕円形をなし、規模は長軸が 0.72 m、短軸が 0.42m、確認面からの深さは 20cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は5層に分かれ、いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。

(9) 9号土坑 (SK09)

SI05 の床面から確認されており、さらに西側の調査区外に延びる。SI05 との切り合い関係は不明である。

#### 第IV章 発見された遺構と遺物【1次調査】

平面形状は略円形とみられ、規模は長軸が0.46 m、短軸が0.36m以上、確認面からの深さは51cmを測る。断面形状は箱形に近い。形状や深さから柱穴の可能性も考えられる。堆積土は2層確認された。遺物は出土していない。

##### (10) 10号土坑(SK10)

SI03を切る。平面形状は楕円形をなすとみられ、規模は長軸が0.90m以上、短軸が0.65m、確認面からの深さは26cmを測る。断面形状は緩やかなU字形である。堆積土は2層に分かれ、いずれも自然堆積土である。遺物は堆積土中からロクロで成形された土師器が出土している(第19図)。4は口径の割には底径が大きく、口縁部が内弯して立ち上がる。底部切り離しは不明で、手持ちヘラケズリの再調整が行われているもので、内面は黒色処理が施されている。これらの形態や技法から、SK03出土の土師器と同様に平安時代でも前葉の9世紀代の土器とみられる。

第3表 第1次調査土坑属性表

遺構名	平面形	断面形	規模 (m)		深さ (m)	堆積土の状況	遺物	備考	平面図	断面図
			長軸	短軸						
SK01	円形	逆台形	1.77	1.57	0.30	自然堆積	なし		17	18
SK02	楕円形	皿形	0.65	0.48	0.28	自然堆積	なし	SI01より旧	8	8
SK03	楕円形	U字形	0.85	0.55	0.21	自然堆積	ロクロ土師器・坏	SK04より新・SK02より旧	8	18
SK04	略円形	皿形	1.18	0.98	0.20	自然堆積	なし	SK03より旧	8	18
SK05	略円形	皿形	0.95	0.58以上	0.24	自然堆積	なし	SI01より旧	8	18
SK06	不明	皿形	0.87	0.15以上	0.15	自然堆積	なし	SI05より新	8	18
SK07	長方形	不定形	0.87	0.65	0.39	自然堆積	なし	SI03より新	12	18
SK08	楕円形	皿形	0.72	0.42	0.20	自然堆積	なし	SI04より旧	15	18
SK09	略円形	長方形	0.46	0.36以上	0.51	人為的埋土	なし	SI05との新旧は不明	17	18
SK10	楕円形	U字形	0.90	0.65	0.26	自然堆積	ロクロ土師器・坏	SI03より新	17	18

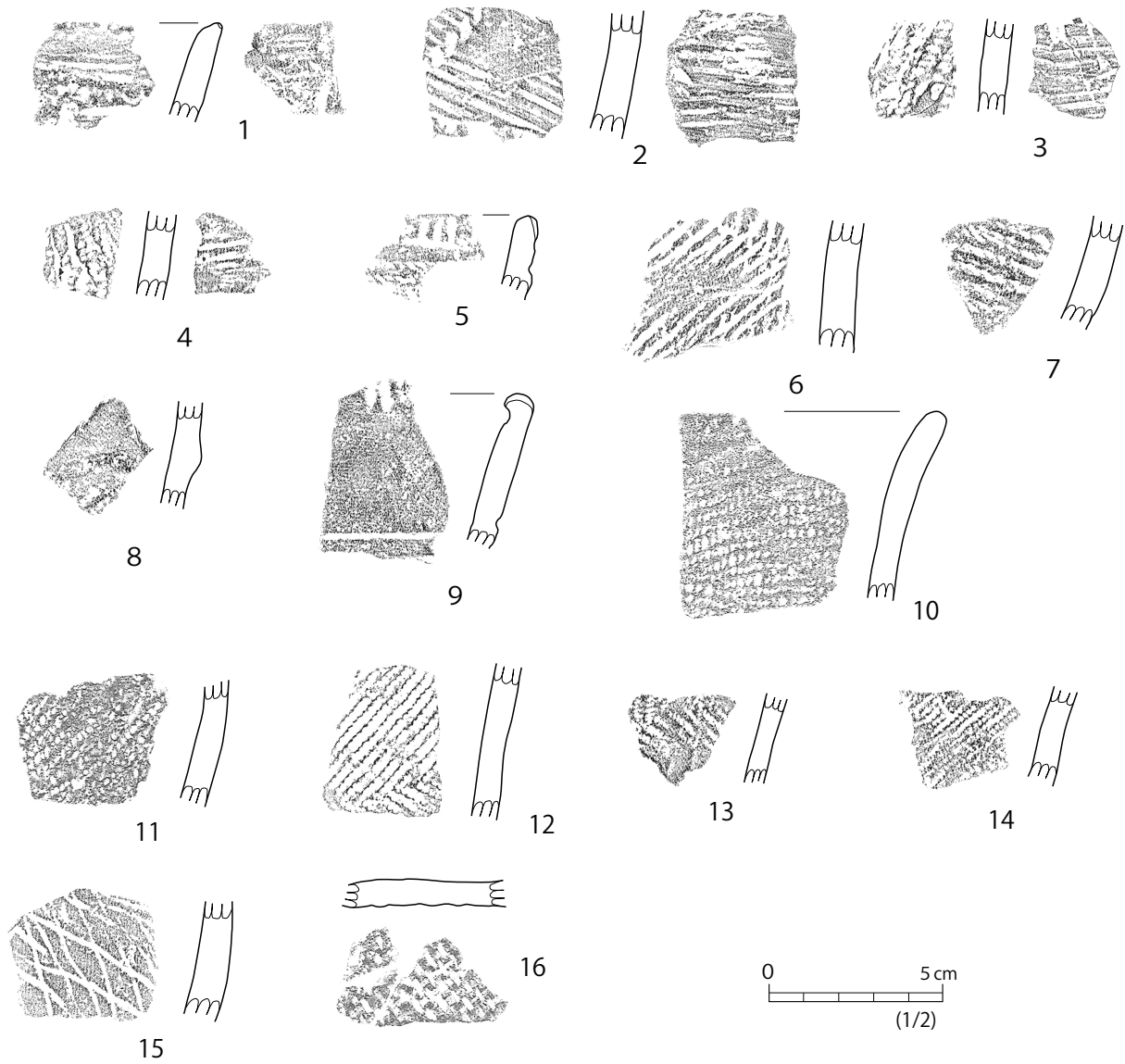
### 3. その他の遺物

(1) 縄文土器(第20図): 図示できたのは16点である。その中の7点(1~7)が胎土に植物繊維を含んでいる。1・2は内外面に貝殻条痕文が施文されるもので、さらに1は外面に円文や刺突文が、2は縄文原体圧痕が確認される。3・4は外面に縄文、内面に貝殻条痕文が施文されている。これら1~4は、早期後葉の条痕文土器群や縄文条痕文土器群の中に位置づけられる。5~7は外面に撚糸文やその圧痕が施されるもので、早期末から前期前葉頃に推定される。

この他の8は中期後葉頃、9は晩期、10~16は中期から晩期にかけてのものとそれぞれ推定される。

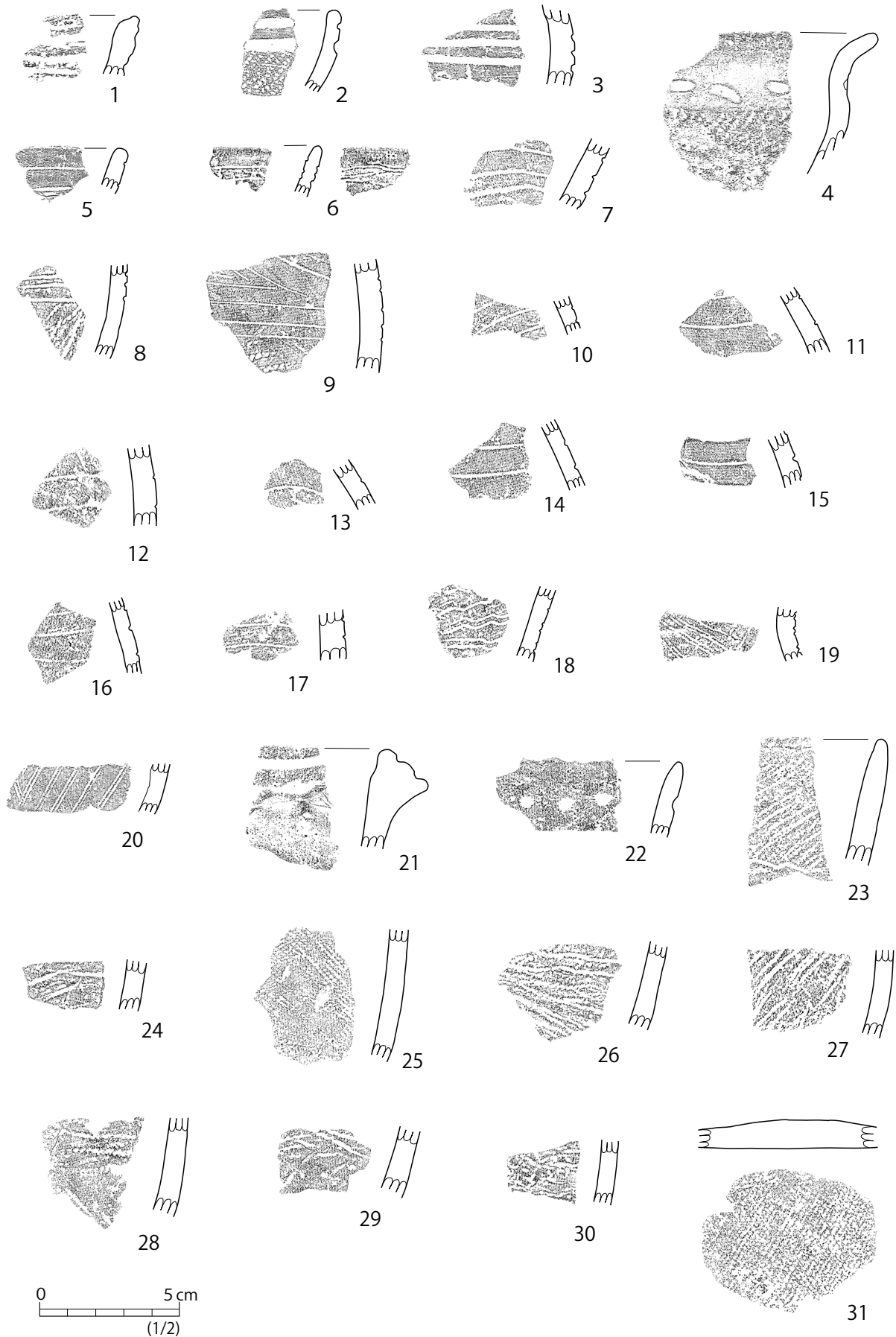
(2) 弥生土器(第21図): 図示できたのは31点である。1~3は太目の施文具で横位の沈線が施文されており、前期末から中期前葉にかけてのものと推定される。4は甕の頸部に列点刺突文が施されるもので、前期末から中期中葉にかけてみられるものである。5~17は細い施文具で横位沈線や円文、渦巻文が描かれており、中期中葉から後葉頃の円田式に相当するものと考えられる。18~20は二本描きの細い施文具で山形文などが描かれており、中期後葉の十三塚式に相当するものと考えられる。21・22は口縁部に交互刺突文や円文が施されているもので、後期中葉から後葉頃のものと推定される。その他の23~30の地文のみの土器は、細かな縄文や撚糸文などから中期後半頃のものと推定される。31は底部に織物の圧痕が確認されるものである。

(3) 石器(第22図): 図示できたのは、石鏃3点、石錐2点、剥片石器2点、楔形石器1点、微細剥離痕をもつ剥片1点、磨製石斧1点、石庖丁1点の計11点である。2・3は石鏃の未製品と考えられる。8は小礫の相対する二側縁に大小の剥離面が残されている。10は全長が7cmほどの小型の定角式磨製石斧である。11は石庖丁の一部とみられ、回転穿孔による孔が1個確認される。

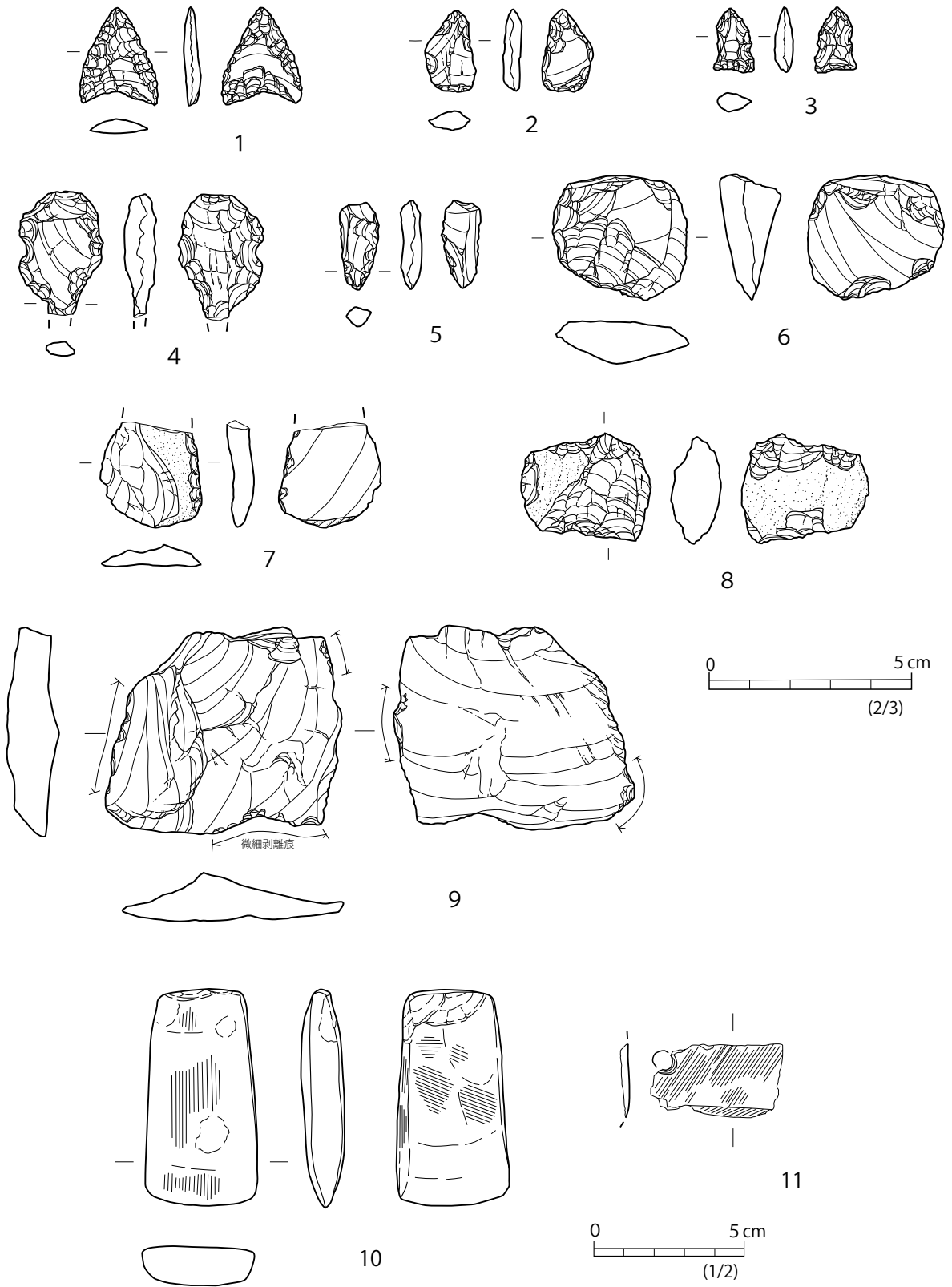


番号	種別	遺構・細部	特徴	残存	登録番号	写真図版
1	縄文土器 深鉢	SI03 堆積土	外面一貝殻条痕文、円文、刺突文 内面一貝殻条痕文 胎土に植物繊維含む。	口縁部破片	A-1	16-1
2	縄文土器 深鉢	SK05 堆積土	外面一貝殻条痕文、縄文原体(RL)圧痕 内面一貝殻条痕文 胎土に植物繊維含む。	体部破片	A-2	16-2
3	縄文土器 深鉢	ピット堆積土	外面一縄文(RL 0段多条) 内面一貝殻条痕文 胎土に植物繊維含む。	体部破片	A-3	16-3
4	縄文土器 深鉢	SI01 堆積土	外面一縄文(RL 0段多条) 内面一貝殻条痕文 胎土に植物繊維含む。	体部破片	A-4	16-4
5	縄文土器 深鉢	SI04 P3 堆積土	外面一縦の刻目 撚糸圧痕(R) 胎土に植物繊維含む。	口縁部破片	A-5	16-5
6	縄文土器 深鉢	SK05 堆積土	外面一撚糸文(R) 胎土に植物繊維含む。	体部破片	A-6	16-6
7	縄文土器 深鉢	SI03 堆積土	外面一撚糸文(R) 胎土に植物繊維含む。	口縁部破片	A-7	16-7
8	縄文土器 深鉢	SI01 堆積土	外面一隆帯、縄文(LR)	体部破片	A-8	16-8
9	縄文土器 鉢(?)	SI03 堆積土	外面一刺突、沈線 内面一沈線	口縁部破片	A-9	16-9
10	縄文土器 深鉢	SI03 堆積土	外面一縄文(LR)	体部破片	A-10	16-10
11	縄文土器 深鉢	SI01 堆積土	外面一縄文(LR)	体部破片	A-11	16-11
12	縄文土器 深鉢	SK01 堆積土	外面一縄文(RL)	体部破片	A-12	16-12
13	縄文土器 ?	SI03 堆積土	外面一縄文(RL)	体部破片	A-13	16-13
14	縄文土器 ?	SK04 堆積土	外面一縄文(LR)	体部破片	A-14	16-14
15	縄文土器 深鉢	SI03 堆積土	外面一撚糸文(R) 方向を変え網目状をなす。	体部破片	A-15	16-15
16	縄文土器 ?	SI03 堆積土	外面一網代痕	底部破片	A-16	16-16

第20図 1次 縄文土器実測図



第21図 1次 弥生土器実測図



第22図 1次 石器・石製品実測図

第IV章 発見された遺構と遺物【1次調査】

番号	種別	遺構・細部	特徴	残存	登録番号	写真図版
2	弥生土器 鉢	SI03 堆積土	外面―太目の沈線、体部には縄文(LR)	口縁部破片	B-2	17-2
3	弥生土器 鉢	SI01 堆積土	外面―太目の沈線	体部破片	B-3	17-3
4	弥生土器 甕	SI03 堆積土	外面―列点刺突文、縄文(LR)は口縁端部と体部	口縁部破片	B-4	17-4
5	弥生土器 鉢	SI03 堆積土	外面―一本描の細沈線	口縁部破片	B-5	17-5
6	弥生土器 鉢(?)	SI03 堆積土	外面―一本描の細沈線、内面―一本描の細沈線	口縁部破片	B-6	17-6
7	弥生土器 鉢(?)	SK08 堆積土	外面―一本描の細沈線	体部破片	B-7	17-7
8	弥生土器 鉢(?)	SI01 堆積土	外面―一本描の細沈線、捺糸文(R)	体部破片	B-8	17-8
9	弥生土器 壺	SI04 堆積土	外面―一本描の細沈線、縄文(LR)	体部破片	B-9	17-9
10	弥生土器 壺	SI04 掘方	外面―一本描の細沈線 渦巻文か	体部破片	B-10	17-10
11	弥生土器 壺	SI02 堆積土	外面―一本描の細沈線	体部破片	B-11	17-11
12	弥生土器 壺	SK07 堆積土	外面―一本描の細沈線	体部破片	B-12	17-12
13	弥生土器 壺	SI03 堆積土	外面―一本描の細沈線	体部破片	B-13	17-13
14	弥生土器 壺	SI03 堆積土	外面―一本描の細沈線	体部破片	B-14	17-14
15	弥生土器 壺	SK01 堆積土	外面―一本描の細沈線	体部破片	B-15	17-15
16	弥生土器 壺	SI01 堆積土	外面―一本描の細沈線	体部破片	B-16	17-16
17	弥生土器 壺	SI03 掘方	外面―一本描の細沈線	体部破片	B-17	17-17
18	弥生土器 鉢(?)	SI03 堆積土	外面―二本描の細沈線、波状文	体部破片	B-18	17-18
19	弥生土器 壺(?)	SI04 堆積土	外面―二本描の細沈線	体部破片	B-19	17-19
20	弥生土器 壺	表土	外面―二本描の細沈線	体部破片	B-20	17-20
21	弥生土器 壺(?)	SI03 堆積土	外面―二条の沈線の下方からの押圧により交互刺突文状をなす。	口縁部破片	B-21	17-21
22	弥生土器 ?	表土	外面―円形の刺突文	口縁部破片	B-22	17-22
23	弥生土器 甕	SI03 堆積土	外面―縄文(LR)、縄文帯の下端には結節縄文	口縁部破片	B-23	17-23
24	弥生土器 ?	ピット堆積土	外面―縄文(LR)	体部破片	B-24	18-1
25	弥生土器 甕(?)	SI03 堆積土	外面―縄文(LR)	体部破片	B-25	18-2
26	弥生土器 甕(?)	SI03 掘方	外面―縄文(LR)に巻き付けた捺糸文(R)	体部破片	B-26	18-3
27	弥生土器 甕	SI02 堆積土	外面―捺糸文(R)	体部破片	B-27	18-4
28	弥生土器 甕	SI02 堆積土	外面―捺糸文(R)	体部破片	B-28	18-5
29	弥生土器 甕	SI03 堆積土	外面―捺糸文(R)	体部破片	B-29	18-6
30	弥生土器 ?	SI03 堆積土	外面―不整捺糸文(R)	体部破片	B-30	18-7
31	弥生土器 ?	ピット堆積土	底部外面―織物痕	底部破片	B-31	18-8

番号	種別	遺構・細部	特徴	残存	法量 (cm, g)				登録番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ	重さ		
1	石鏃	SI03 2区堆積土	無茎 凹基 主要剥離面残す。 珪質頁岩	完存	2.4	1.9	0.3	1.2	Ka-1	18-9
2	石鏃	SI03 4区堆積土	未製品か 全体が非対称 流紋岩(?)	完存	2.0	1.3	0.5	1.0	Ka-2	18-10
3	石鏃	精査	未製品か 玉髄(?)	完存	1.6	1.0	0.5	0.6	Ka-3	18-11
4	石鏃	SI04 堆積土	つまみ部と錐部 流紋岩	錐部欠損	3.2	2.0	0.9	5.0	Ka-4	18-12
5	石鏃	SI03 堆積土	全体が棒状 錐部先端の作出は入念ではない。 流紋岩	錐部欠損	2.2	1.0	0.5	0.9	Ka-5	18-13
6	剥片石器	SI04 堆積土	剥片を折断し、主に片面周縁に二次加工を施す。 玉髄(?)	完存	3.1	3.3	1.5	13.0	Ka-6	18-14
7	剥片石器	SI02 堆積土	剥片の一側縁に二次加工が施されている。	一端欠損	2.6	2.5	0.5	3.7	Ka-7	18-15
8	楔形石器	SI04 堆積土	相対する二側縁に大小の剥離面が認められる。 鉄石英	完存	2.2	3.2	1.2	10.5	Ka-8	18-16
9	微細剥離痕を持つ剥片	SI04 P1堆積土	横長剥片の縁辺、数力所に微細剥離痕が認められる。 鉄石英(?)	完存	5.0	5.9	1.2	35.0	Ka-9	19-1
10	磨製石斧	SI03 堆積土	やや刃部側が幅広いの四角形状をなす。 刃部は片刃ぎみ 砂岩	完存	7.1	3.7	1.2	62.0	Kb-1	19-2



## 【2次調査】

2次調査では遺構として竪穴建物跡7棟、方形竪穴遺構1棟、掘立柱建物跡6棟、柱列2列、性格不明遺構2基、土坑 24 基、溝跡8条、堀跡1条、ピット多数が検出された。また遺物としては土師器、赤焼土器、須恵器、縄文土器、弥生土器、石器、石製品が出土している。ここでは遺構に伴うとみられる遺物は遺構ごと、または遺構種別ごとに掲載し、明らかに時期の異なる遺構出土の遺物、遺構以外や基本層出土の遺物は最後にまとめて掲載している。

### 〈上段調査区〉

#### 1. 竪穴建物跡

##### (1) 1号竪穴建物跡 (SI01)

〔位置・遺存状況・重複〕調査区の西端で、北半部を中心に検出された。南壁は削平により失われているが、掘方の一部が残存しており、ほぼ全体の形状が確認された。北壁での確認面からの深さは約 10cm である。多数のピットと重複しており、その大半に切られている。

〔平面形・規模・方向〕平面形状は略方形で、規模は南北が 3.97 m、東西が 4.21 mを測る。主軸は 16° 西へ傾く。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕残存する北半部の床面はシルト質土を用いた貼床である。北壁中央からカマドが検出された。燃焼部は天井部が失われ、ローム質土で構築された側壁部分が残存しており、その規模は幅が 90cm、奥行きが 60cm 前後である。その奥壁から北に約 1.3 m煙道部が延びているが、その途中は削平により失われている。カマド燃焼部の南寄りで凝灰岩を板状に整形した長さ 60cm、幅 17cm の天井高架材が確認された。貯蔵穴は認められなかった。

〔柱穴・周溝〕床面の対角線上に位置する P1 ～ P4 の4個が柱穴と考えられる。その中の P1 と P2 からは柱痕跡が確認された。周溝は床面が残存する北半部では巡っていることから、本来は全周するものと推測される。断面形状は U 字状をなす。

〔堆積土〕周溝や床面下堆積土、カマド堆積土を除き、自然堆積層が1層確認された。

〔出土遺物〕カマド付近から非ロクロの土師器甕破片がまとめて出土しているが、保存が悪く図示はできなかった(写真図版 20-1)。これは体部の器形がやや球形、外面頸部に段をもつもので、体部外面はヘラナデ・ヘラケズリ、体部内面はヘラナデ調整が施されている。これが本建物跡の使用時期に近い資料と考えられ、特徴からは村田晃一氏による土師器編年(村田 2007)の4段階にほぼ該当し、年代的には7世紀後半頃のものとして推定される。

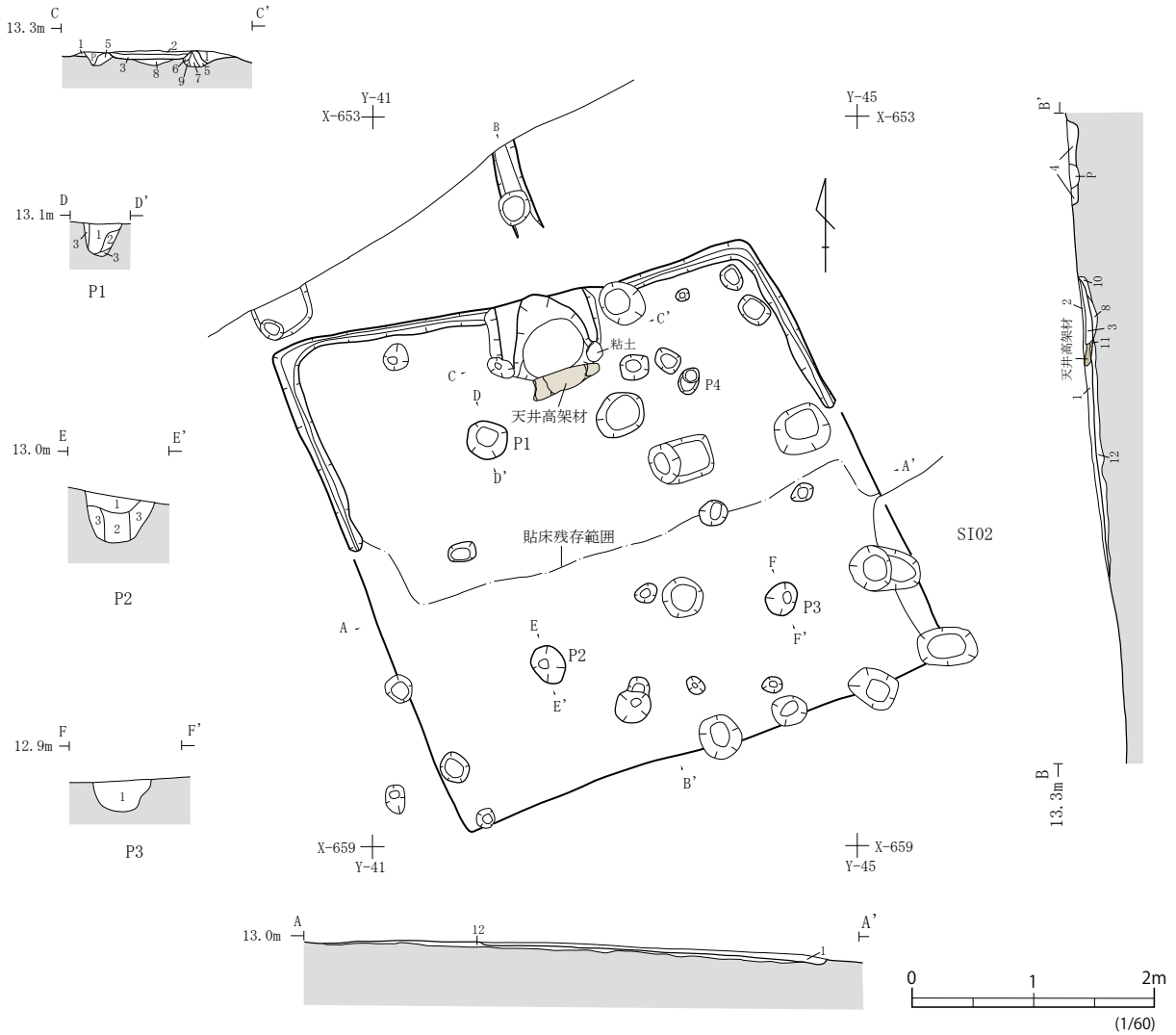
##### (2) 2号竪穴建物跡 (SI02)

〔位置・遺存状況・重複〕調査区の西端で、北半部のみが検出された。壁は北側が約 10cm 残存するが、その他は削平により失われている。SI03 と重複しており、それよりも新しい。また SB02 やピットと重複しており、それらよりも新しい。

〔平面形・規模・方向〕平面形状は略方形で、規模は南北が 2.42 m以上、東西が 3.85 mを測る。主軸は 29° 西へ傾く。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕残存する北半部の床面は粘質土を用いた貼床である。北壁中央からカマドが検出されたが、残存状況が悪く、一部の側壁のみが確認された。その規模は幅が 80cm 以上、奥行きが

第IV章 発見された遺構と遺物【2次調査】



SI01 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒をやや多く含む。カマド周囲は炭化物、焼土粒を少量含む。住居内堆積土
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山粒をやや多く、焼土粒を微量含む。カマド内堆積土
3	暗赤褐色 (5YR3/4)	焼土	炭化物少量、黒褐色土微量含む。カマド内堆積土
4	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	下位ほど焼土粒、炭化物を多く含む。黄褐色土を粒状に微量含む。カマド内堆積土
5	黄褐色 (10YR5/6)	ローム質土	カマド袖の構築材。黒褐色土を少量含む。カマド内は赤変する。カマド構築材
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物主体。焼土粒を多量含む。カマド構築材
7	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	焼土粒、炭化物を微量含む。しまり強い。カマド構築材
8	赤褐色 (10R4/3)	ローム質土	黄褐色粘土質シルトの貼床が被熱する。焼土粒を微量含む。カマド内堆積土
9	黄褐色 (10YR4/6)	ローム質土	焼土粒、炭化物を少量含む。カマド構築材
10	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土ブロック、炭化物を多量含む。カマド内堆積土
11	黒色 (10YR2/1)	炭層	焼土粒を少量含む。カマド内堆積土
12	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	黒褐色土、凝灰岩片、ロームブロックをやや多く含む。貼床

P1 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	ローム質土粒を少量含む。柱痕跡。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ローム質土ブロックを多量含む。
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	黒褐色土を微量含む。しまりやや強い。

P2 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	灰白色、明黄橙色粘土粒子を少量含む。
2	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	灰白色、明黄橙色粘土を小ブロック状に多く含む。
3	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	明黄褐色、黄褐色粘土粒子を少量含む。

P3 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR2/4)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子中量、炭化物を微量含む。

第 23 図 2次 1号竪穴建物跡 (SI01)



第 24 図 2次 上段調査区遺構全体図



80cm 前後である。煙道部は削平により失われている。床面の北東部から径が 50 ～ 60cm、深さが 7cm で略円形の貯蔵穴が確認されている。なお、カマドを挟んで両側と西側の床面から溝状の落ち込みが検出されているが、間仕切りの可能性も考えられる。

〔柱穴・周溝〕 検出範囲からは柱穴は確認されなかった。周溝は東側と南西部で一部確認された。断面形状は U 字状をなす。

〔堆積土〕 周溝や床面下堆積土、カマド堆積土を除き、3層確認されたが、いずれも自然堆積層である。

〔出土遺物〕 (第 28 図) 堆積土から図示した非ロクロの土師器坏と、図示はできなかったがロクロの土師器の破片などが 10 数点出土している。この SI02 は重複関係から SI03 より新しく、後述するように SI03 は平安時代の時期と推定されることから、後者のロクロ土師器が SI02 の時期に近いものと考えられ、SI02 も平安時代頃の建物跡と推定される。したがって前者の土師器坏は特徴から古墳時代中期から後期にかけてのものと考えられることから、混入したものであろう。

### (3) 3号竪穴建物跡 (SI03)

〔位置・遺存状況・重複〕 調査区の西端で、一部が検出された。北西壁は約 20cm 残存しており、比較的残存状況は良好である。SI012 と重複しており、それよりも古い。

〔平面形・規模・方向〕 北西部のみの検出で、全体の平面形状は不明だが、北西コーナーは丸みを帯びている。規模は南北が 0.82 m 以上、東西が 2.44 m 以上を測る。主軸は 10° 西へ傾く。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕 北西部の床面は粘質土を用いて貼床されている。北西壁より内側の床面からは古い周溝やピットが検出されており、この建物跡は後に一回り大きく拡張されたものと推定される。カマドや貯蔵穴は確認されていない。

〔柱穴・周溝〕 検出範囲からは柱穴は確認されなかったが、周溝は全周している。断面形状は U 字状をなす。

〔堆積土〕 周溝や床面下堆積土などを除き、4層確認されたが、いずれも自然堆積層である。

〔出土遺物〕 堆積土から、図示はできなかったがロクロの土師器や須恵器の破片が 10 数点出土している。土師器では内面がヘラミガキ・黒色処理が施された坏が数点あり、その他の土器も平安時代の時期のものとして推定される。SI03 の時期もほぼ平安時代に位置づけられる。

### (4) 4号竪穴建物跡 (SI04)

〔位置・遺存状況・重複〕 調査区の中央やや西寄り検出された。削平が著しくわずかに北壁および西側周溝が残存していた。南半部は SI05 に、その他は SB03 や SB05 の柱穴と重複しており、それらより古い。

〔平面形・規模・方向〕 残存部分から平面形状は方形を呈するものとみられ、規模は南北が 2.26 m 以上、東西が 2.78 m を測る。主軸は 24° 西へ傾く。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕 残存部分は地山を床面としている。カマドや貯蔵穴は確認されていない。

〔柱穴・周溝〕 検出範囲からは柱穴は確認されなかった。周溝は北西隅から西辺にかけて確認され、断面形状は U 字状をなす。

〔堆積土〕 周溝堆積土などを除き、2層確認されたが、いずれも自然堆積層である。

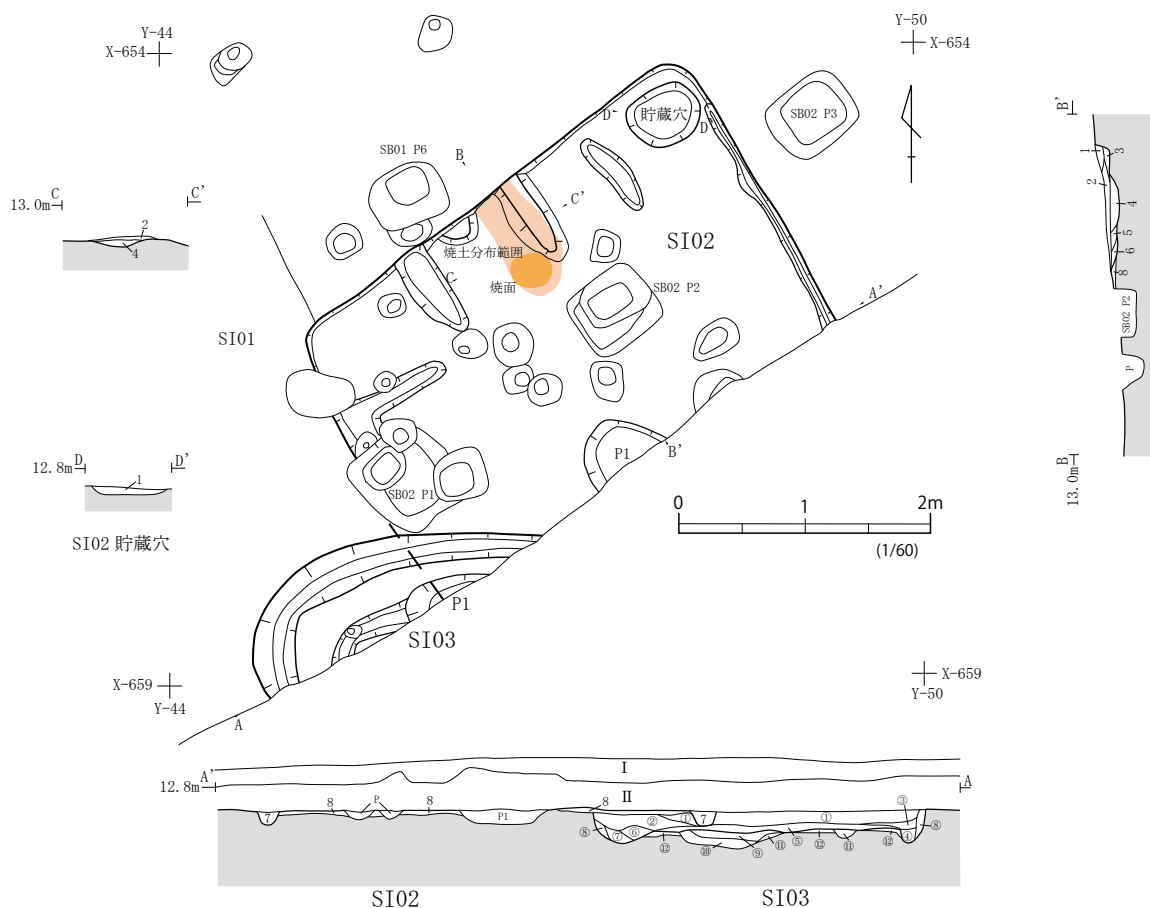
〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

### (5) 5号竪穴建物跡 (SI05)

〔位置・遺存状況・重複〕 調査区の中央やや西寄り検出された。削平が著しく床面は残存せず、わずかに北辺と西辺の周溝の痕跡のみが確認された。北側は SI04 と重複しており、それより新しい。

〔平面形・規模・方向〕 残存する周溝から平面形状は方形を呈するものとみられる。規模は南北が 2.55

第IV章 発見された遺構と遺物【2次調査】



SI02・SI03 土層注記

層No.	土色	土質	備考
I	暗褐色	粘質シルト	表土
II	暗褐色	粘質シルト	旧耕作土
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄橙色、黒褐色粘土粒子少量含む。焼土粒子微量含む。カマド内堆積土
2	暗褐色 (7.5YR3/3)	粘質シルト	黄橙色粘土小ブロックを少量含む。焼土粒子小ブロックをやや多く含む。カマド内堆積土
3	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子、焼土粒子、炭化物微量含む。カマド内堆積土
4	暗褐色 (10YR3/3)	砂質シルト	黄橙色粘土、黒褐色土を粒状に少量含む。カマド内堆積土
5	赤褐色	砂質シルト	焼土層。被熱により硬化する。カマド内堆積土
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物をやや多く含む。カマド内堆積土
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	黄橙色粘土粒を少量含む。周溝堆積土
8	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	砂岩粒、黄橙色粘土粒を少量含む。貼床
P1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子・小ブロック・焼土粒子を微量含む。P1堆積土
①	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子・小・中ブロックを少量含む。焼土粒子、炭化物微量含む。住居内堆積土
②	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子を少量含む。焼土小ブロックを微量含む。住居内堆積土
③	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子・小・中ブロックをやや多く含む。焼土粒子・小ブロックを微量含む。住居内堆積土
④	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	浅黄橙色・黄橙色粘土粒子・小ブロックを少量含む。周溝堆積土
⑤	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子を微量含む。住居内堆積土
⑥	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子・小ブロックをやや多く含む。周溝堆積土
⑦	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	浅黄橙色・黄橙色粘土粒子・小ブロックを少量含む。周溝堆積土
⑧	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	浅黄橙色・灰白粘土粒子・小ブロックを少量含む。周溝堆積土
⑨	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子を微量含む。土師器片含む。P1堆積土
⑩	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子・小ブロックをやや多く含む。土師器片含む。P1堆積土
⑪	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄橙色粘土粒子・小ブロックを少量含む。旧周溝堆積土
⑫	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	黄橙色・暗褐色粘土小ブロックを多く含む。貼床

1～8・P1はSI02、①～⑫はSI03の堆積土

SI02 貯蔵穴土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	上位に焼土ブロック、下位に灰白色粘土小ブロックを多く含む。炭化物、明黄褐色粘土小ブロックを中量含む。

第25図 2次 2・3号竪穴建物跡 (SI02・SI03)

m以上、東西が3.50 m以上を測る。主軸は14° 西へ傾く。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕床面は失われており、貼床の有無は確認できなかった。カマドや貯蔵穴は確認されていない。

〔柱穴・周溝〕床面範囲の西側から2個のピットが確認されたが、位置などから柱穴の可能性が考えられる。周溝の断面形状は皿状をなす。

〔堆積土〕周溝堆積土以外、残存していない。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

#### (6) 6号竪穴建物跡 (SI06)

〔位置・遺存状況・重複〕調査区のほぼ中央で検出された。削平が著しく床面は残存せず、周溝の痕跡の一部が確認された。

〔平面形・規模・方向〕残存する周溝の痕跡から平面形状は方形をなす可能性が高い。規模は南北が2.68 m以上、東西が2.04 m以上を測る。主軸は19° 西へ傾く。

〔床面・カマド・貯蔵穴〕床面は失われており、貼床の有無は確認できなかった。カマドや貯蔵穴は確認されていない。

〔柱穴・周溝〕柱穴は確認されなかった。周溝の痕跡は北辺から西辺にかけて確認され、断面形状は皿状をなす。

〔堆積土〕周溝堆積土以外、残存していない。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

#### (7) 7号竪穴建物跡 (SI07)

〔位置・遺存状況・重複〕調査区南東部で、一部遺構の南東部は調査区外に延びているが、ほぼ全体が検出された。北壁での確認面からの深さは20～30cmあるが、南方に行くに従い削平され、南壁は失われている。多数のピットと重複しており、その多くに切られている。

〔平面形・規模・方向〕平面形状はやや変形した長方形を示すものと考えられ、規模は南北が2.90 m前後、東西が4.15 mを測る。主軸は30° 西へ傾く。

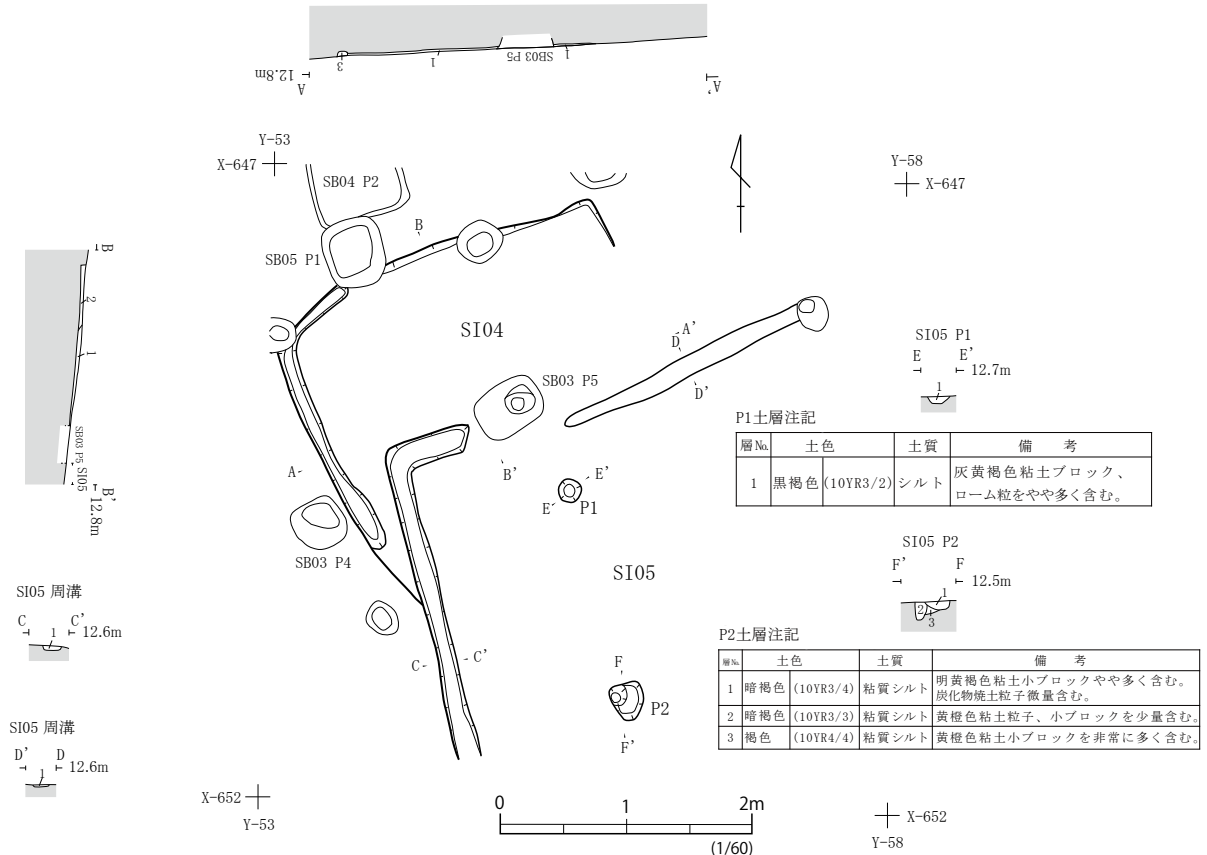
〔床面・カマド・貯蔵穴〕残存する床面は粘質土を用いた貼床である。北壁中央からやや東寄りの位置でカマドが検出された。燃焼部は天井部が失われ、粘土質土で構築された側壁部分が残存しており、その規模は幅が約1m、奥行きが80cm前後である。燃焼部はわずかに凹んでいる。煙道部は削平により失われていた。カマドを挟んで東西の壁際から土坑が2基確認された (SI07 SK01・SK02)。SK01は長軸90cm、短軸70cm、深さ約20cmの楕円形状をしており、堆積土は全て自然堆積層である。SK02は長軸80cm、短軸37cm、深さ約10cmの隅丸長方形形状をしており、堆積土は自然堆積層である。これら2基の土坑は位置などから貯蔵穴の可能性が考えられる。

〔柱穴・周溝〕柱穴と考えられるピットおよび壁際の周溝は確認されなかった。

〔堆積土〕カマド堆積土とも自然堆積層である。

〔出土遺物〕(第28図)堆積土や貯蔵穴の可能性があると前述した土坑などから、土師器、須恵器多数とわずかの赤焼土器、合わせて150点に及ぶ土器破片が出土している。その中で図示できたのは土師器5点と須恵器1点である。土師器には坏と甕があり、坏は全てロクロで製作されたもので、内面はヘラミガキ・黒色処理のものである。外面底部は全面手持ちヘラケズリ再調整のもの、回転糸切りにより切り離された後に周辺のみ手持ちヘラケズリ再調整のものなどがみられる。甕にはロクロ製作のものと非ロクロ製作のものが

第IV章 発見された遺構と遺物【2次調査】



P1土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	灰黄褐色粘土ブロック、ローム粒をやや多く含む。

P2土層注記

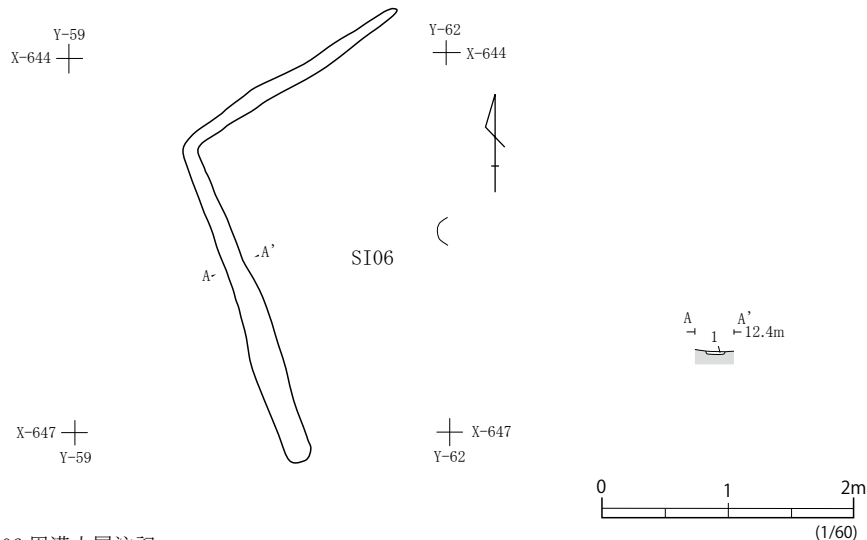
層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	明黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。炭化物焼土粒子微量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子、小ブロックを少量含む。
3	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロックを非常に多く含む。

SI04 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	明黄褐色粘土を小ブロック状に多く含む。焼土粒子少量含む。住居内堆積土
2	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	明黄褐色粘土を小ブロック状に極めて多く含む。焼土を小ブロック状に多く含む。住居内堆積土
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	黄褐色粘土を小ブロック状に多く含む。周溝堆積土か。

SI05 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	明黄褐色粘土小ブロックを多く含む。周溝堆積土

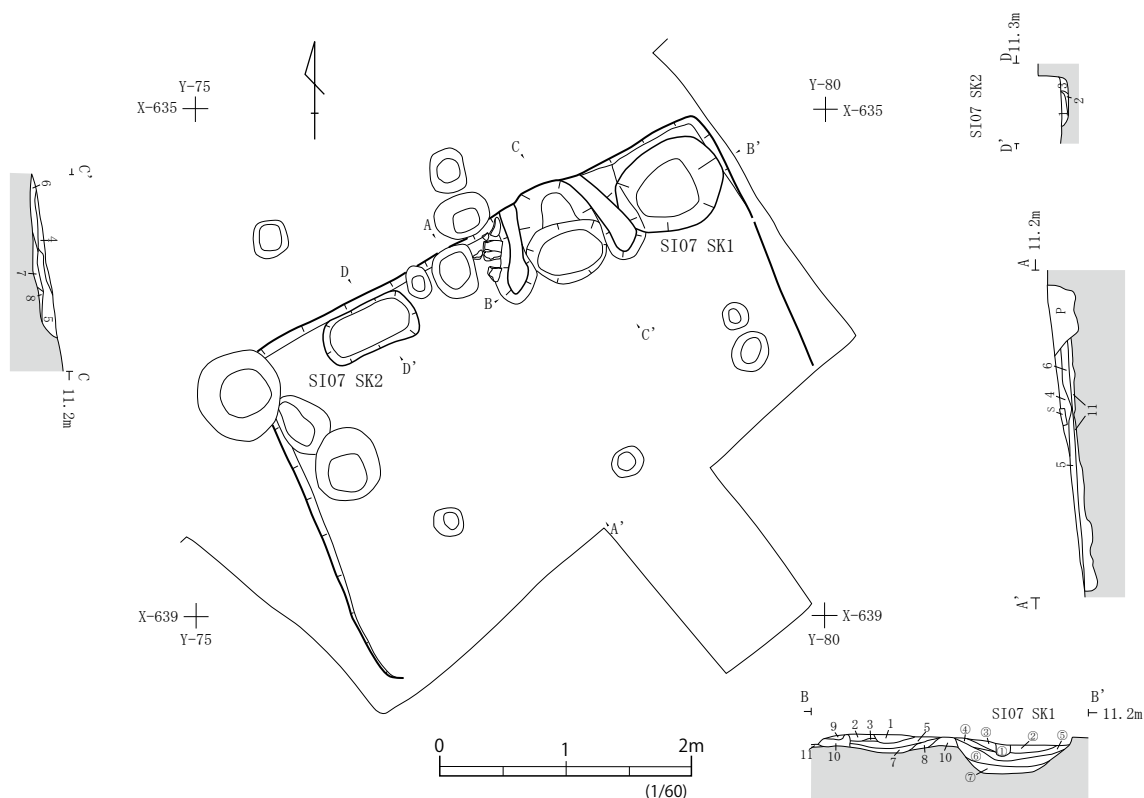


SI06 周溝土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	浅黄褐色、黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。

第 26 図 2次 4～6号竪穴建物跡 (SI04～SI06)





SI07 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒を微量含む。カマド内堆積土
2	暗褐色 (5YR3/6)	焼土	焼土粒を多量、凝灰岩粒を微量含む。カマド内堆積土
3	暗褐色 (5YR4/3)	シルト	焼土ブロックを少量含む。カマド内堆積土
4	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子少量含む。焼土粒子微量含む。
5	赤褐色 (5YR4/6)	焼土	焼土粒を多量含む。カマド内堆積土
6	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロック、焼土小ブロックを多く含む。
7	黒褐色 (10YR3/1)	粘質シルト	上面は被熱によって硬化する。焼土粒をやや多く含む。カマド内堆積土
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	黄褐色粘土粒、焼土粒を少量含む。カマド内堆積土
9	赤褐色 (5YR4/6)	焼土	焼土粒を極めて多量含む。
10	黄褐色 (10YR6/4)	粘質シルト	焼土粒を微量含む。凝灰岩小片をやや多く含む。カマド袖構築材
11	褐色 (10YR4/4)	粘土シルト	灰白色、浅黄褐色粘土小・中ブロック多く含む。焼土、炭化物小ブロックを少量含む。堀方埋土

SI07 SK1 土層注記

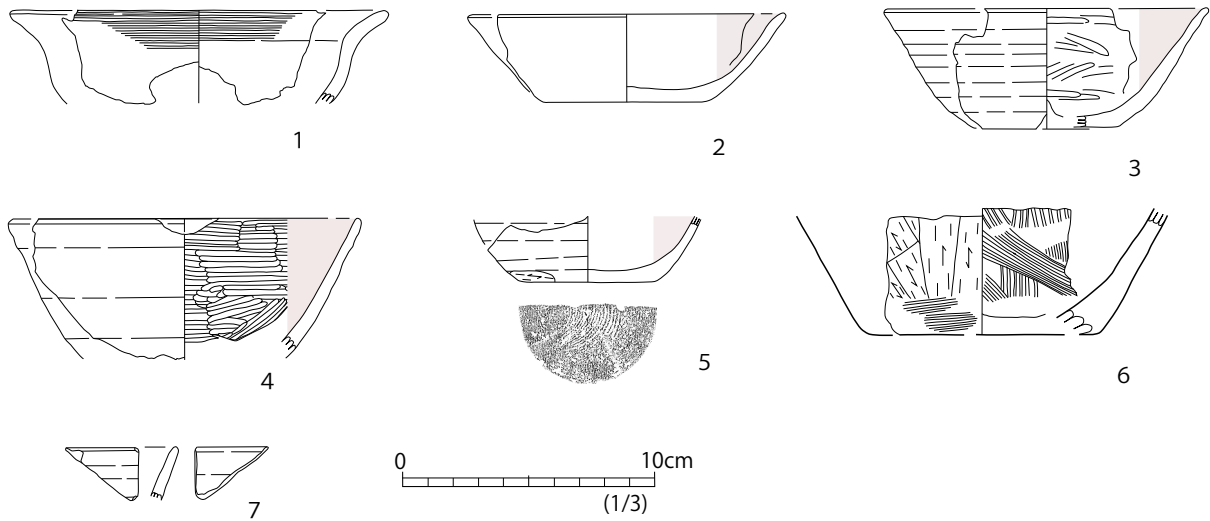
層No.	土色	土質	備考
①	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土粒を微量含む。
②	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	黄褐色粘土ブロック、凝灰岩粒を少量含む。焼土粒を微量含む。
③	赤褐色 (5YR4/6)	焼土	暗褐色土を少量含む。
④	にぶい黄褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	カマド構築材の流入土。凝灰岩粒をやや多く含む。
⑤	暗赤褐色 (5YR3/6)	焼土	炭化物をやや多く、土器片を混入する。
⑥	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	凝灰岩片をやや多く含む。
⑦	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	凝灰岩片を少量含む。

SI07 SK2 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロックを微量含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロック、炭化物を少量含む。

第27図 2次 7号竪穴建物跡 (SI07)

第IV章 発見された遺構と遺物【2次調査】



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 坏	SI02 A区 堆積土	ヨコナデーヨコナデ	口縁部破片	(15.0)	-	-	C-1	20-2
2	土師器 坏	SI07 堆積土	ロクロナデーヘラミガキ・黒色処理、底部全面手持ちヘラケズリ	口縁部～体部1/5	(12.6)	6.6	3.5	C-2	20-3
3	土師器 坏	SI07 堆積土	ロクロナデ・底部切り離し不明～ヘラミガキ・黒色処理	全体の1/10	(12.8)	(5.8)	4.7	C-3	20-4
4	土師器 坏	SI07 SK01 堆積土	ロクロナデーヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/6	(14.0)	-	-	C-4	20-5
5	土師器 坏	SI07 西区 堆積土	ロクロナデ・ヘラケズリ・底部回転糸切り後、手持ちヘラケズリ～ヘラミガキ	体部下半～底部1/2	-	5.5	-	C-5	20-6
6	土師器 甕	SI07 堆積土	ロクロ製作か。ヘラケズリ・ナデーハケメ・ヘラナデ	体部下半～底部破片	-	(9.4)	-	C-6	20-7
7	須恵器 坏	SI07 堆積土	ロクロナデーロクロナデ	口縁部破片	-	-	-	E-1	20-8

第 28 図 2次 竪穴建物跡 (SI02・SI07) 出土遺物

みられた。須恵器には坏と甕がある。これらの土器は特徴から村田晃一氏による土器編年 (村田 1994) の 2～4群土器に該当し、年代的には9世紀代のものと推定される。これらが本建物跡の使用時期に近い資料と考えられることから、建物跡の時期は平安時代前半の頃と考えられる。

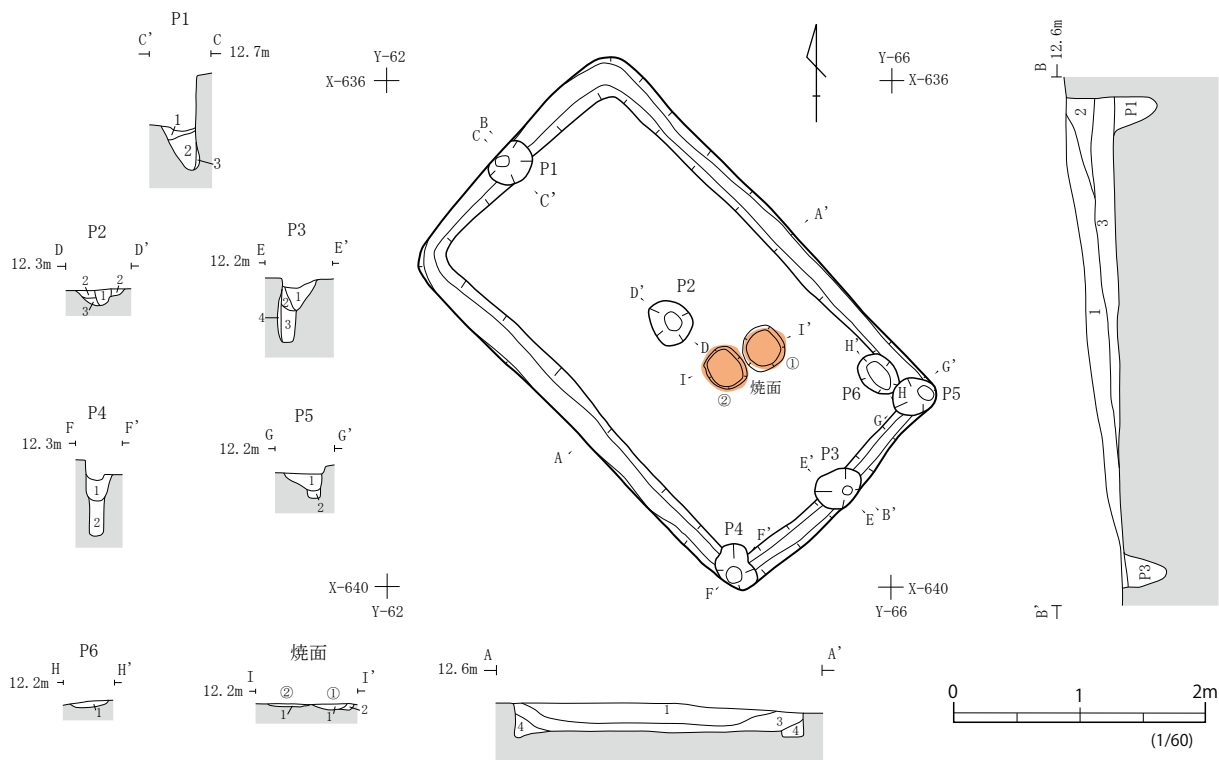
第4表 第2次調査竪穴建物跡属性表

遺構名	平面形	規模 (m) 東西×南北	軸方位	床	カマド	カマド構築材	煙道部	炉	柱穴	周溝	出土遺物	時期	備考
SI01	略方形	4.21 × 3.97	N-16° -W	貼床 (シルト)	北壁中央	ローム質土	長煙道	-	P1～P4	カマドを除く四辺か?	非ロクロ土師器・甕	7世紀後半	焚口天井高架材に凝灰岩
SI02	略方形	3.85 × 2.42 以上	N-29° -W	貼床 (粘質土)	北壁中央	ローム質土	不明	-	未確認	東壁・西壁の一部	ロクロ土師器	9世紀代?	SI02より新
SI03	隅丸方形?	2.44 以上 × 0.82 以上	N-10° -W	貼床 (粘質土)	-	-	-	-	未確認	北壁・西壁?	ロクロ土師器、須恵器	9世紀代?	SI02より旧
SI04	方形?	2.78 × 2.26 以上	N-24° -W	地山	-	-	-	-	未確認	西壁・北壁?	なし	不明	SI05、SB03・05より旧
SI05	方形?	3.50 以上 × 2.55 以上	N-14° -W	-	-	-	-	-	P1・P2	北壁・西壁?	なし	不明	SI04より新
SI06	方形?	2.04 以上 × 2.68 以上	N-19° -W	-	-	-	-	-	未確認	西壁・北壁?	なし	不明	
SI07	長方形?	4.15 × 2.90	N-30° -W	貼床 (粘質土)	北壁東寄り	粘質土	不明	-	未確認	なし	ロクロ土師器、須恵器、赤埴土器	9世紀代	

2. 1号方形竪穴遺構

〔位置・遺存状況・重複〕 調査区のほぼ中央で全体が検出された。確認面からの床面の深さは北壁で40cm、南壁で2cmとなっており、南側が大きく削平を受けている。他の遺構との重複関係はみられない。

〔平面形・規模・方向〕 平面形状は長方形で、規模は南北が3.90m、東西が2.32mを測る。主軸は45°西へ傾く。



方形竪穴遺構土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	明黄褐色粘土小・中ブロックを中量含む。植物遺体多く含む。焼土、炭化物微量含む。遺構内堆積土
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄橙色、明黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。植物遺体多く含む。遺構内堆積土
3	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄橙色、明黄褐色粘土中・大ブロックを多く含む。植物遺体少量含む。焼土、炭化物少量含む。遺構内堆積土
4	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄橙色粘土小ブロックを少量含む。植物遺体を少量含む。周溝堆積土

P1 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄橙色、明黄褐色粘土粒子、小ブロックを多く含む。抜取穴埋土
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色粘土小ブロックを中量含む。柱痕跡埋土
3	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質シルト	灰白色粘土小・中ブロックを多く含む。柱掘方埋土

P2 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	浅黄橙色粘土粒子・小ブロックを少量含む。柱痕跡埋土
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄橙色粘土粒子・小ブロックを少量含む。柱掘方埋土
3	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	黄橙色粘土小・中ブロックを多く含む。柱掘方埋土

P3 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄橙色粘土小ブロックを微量含む。抜取穴埋土
2	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄橙色、明黄褐色粘土粒子、小ブロックを多く含む。抜取穴埋土
3	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色粘土小ブロックを中量含む。柱痕跡埋土
4	明黄褐色 (10YR6/6)	粘質シルト	灰白色粘土小・中ブロックを多く含む。柱掘方埋土

P4 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄橙色、明黄褐色粘土粒子、小ブロックを多く含む。抜取穴埋土
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色粘土小ブロックを中量含む。柱痕跡埋土

P5 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄橙色、明黄褐色粘土粒子、小ブロックを多く含む。抜取穴埋土
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色粘土小ブロックを中量含む。柱痕跡埋土

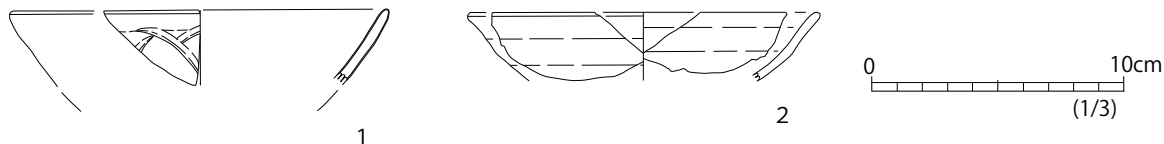
P6 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄橙色粘土小・中ブロックを少量含む。植物遺体少量含む。

焼面土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗赤褐色 (10YR3/5)	粘質シルト	しまり非常に強い。上面に一部硬化面を有する。
2	褐色 (7.5YR4/6)	粘質シルト	黄橙色粘土小・中ブロック、焼土ブロックをやや多く含む。硬質の火山噴出物を少量含む。

第 29 図 2次 1号方形竪穴遺構



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	青磁 碗	A区 床面付近	内外面、透明な灰緑色の釉。外面に鎬連弁文。	口縁部1/10	(15.0)	-	-	J-1	20-9
2	赤焼土器 坏	D区 堆積土	ロクロナデ-ロクロナデ	口縁部~体部破片	-	-	-	D-1	20-10

第30図 2次 方形竪穴遺構出土遺物

〔床面・カマド・貯蔵穴〕地山を直接床面としており、床面は比較的平坦である。床面中央部南寄りから炉跡と考えられる焼土を多量に含む焼面が接して2箇所確認された。いずれも径が30cm程度の大きさの円形の焼面で、上面は一部硬化している。貯蔵穴は認められなかった。

〔柱穴・周溝〕柱穴は北辺の中央(P1)、床面のほぼ中央(P2)、南辺の両隅と中央(P3～P5)の、合計5個が確認された。いずれからも柱痕跡が確認され、掘方平面形状は規模が30～40cmの略円形をしている。中央のP2が他と比較して浅かった。

〔堆積土〕周溝を除き、3層確認されたが、いずれも自然堆積層である。

〔出土遺物〕(第30図)床面付近から青磁、堆積土中から弥生土器や土師器、赤焼土器、須恵器が出土している。この中で青磁がこの遺構の使用時期を示すものと考えられる。これは青磁の碗の口縁部破片で、内外面に透明な灰緑色の釉が掛かり、外面には鎬連弁文が施されている。特徴から中国の龍泉窯系の製品で、年代的には13世紀後半頃に位置づけられるものと考えられる。

第5表 第2次調査方形竪穴遺構属性表

遺構名	平面形	規模 (m) 東西×南北	軸方位	床	炉	柱穴	周溝	出土遺物	時期	備考
1号方形竪穴遺構	長方形	2.32 × 3.90	N-45° -W	地山	中央南寄り	P1～P5	四辺	青磁・碗	13世紀後半	

### 3. 掘立柱建物跡

調査区の南東部を中心に多数のピットが検出された。これらの多くは掘立柱建物跡などを構成する柱穴に関わるものと推定される。しかしながら現地調査中および室内整理中において組み合わせピットの検討を行ったものの、位置関係やピットの特徴などから建物跡と認定できたのは6棟のみであった。

#### (1) 1号掘立柱建物跡 (SB01)

調査区西端で全体が検出された。東西が2.68m(2間)、南北が2.30m(2間)のやや東西が長い方形の建物で、主軸は西側柱列で14°西へ傾く。掘方は径が30～50cmの円形か隅丸方形で、5個の柱穴から柱痕跡が確認された。遺物は図示はできなかったが、P5から須恵器破片が出土しており、おおよそ平安時代の建物跡の可能性が考えられる。

#### (2) 2号掘立柱建物跡 (SB02)

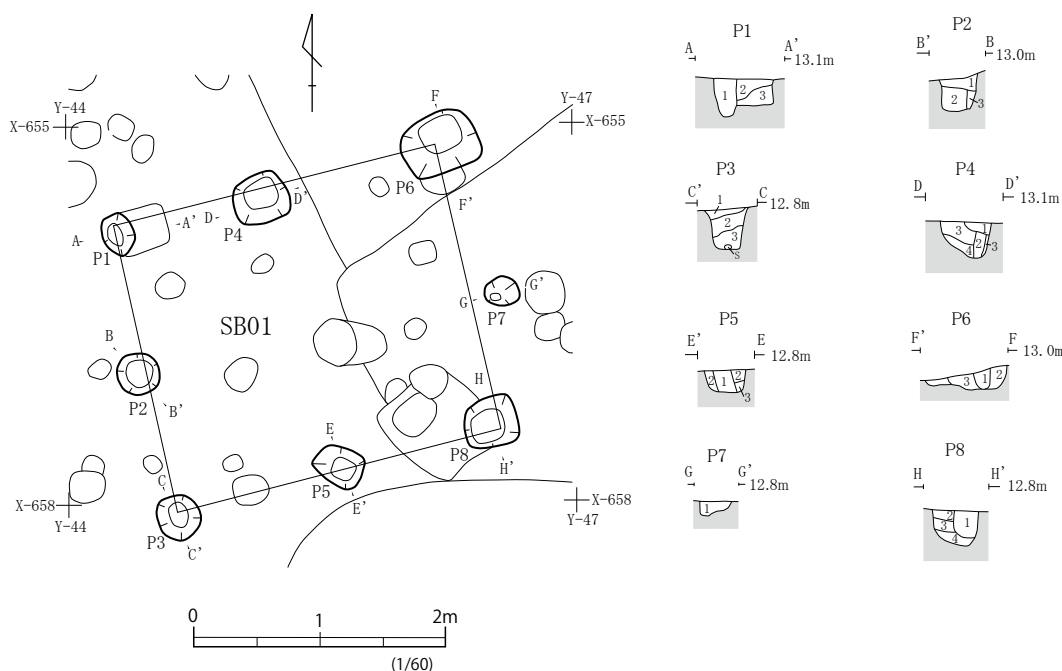
調査区西半で建物の北側が検出され、南側はさらに調査区外に延びる。東西が6.80m(3間)、南北が1.60m以上の建物で、主軸は北側柱列で51°東へ傾く。掘方は一辺が60～70cmの方形で、1個の柱穴から柱痕跡が確認された。遺物は図示はできなかったが、土師器破片が出土している。しかし時期は不明である。

(3) 3号掘立柱建物跡 (SB03)

調査区西半で建物の北西側が検出され、南東側はさらに調査区外に伸びる。東西が 5.94 m (3間) かそれ以上、南北が 2.14 m (1間) 以上の建物で、主軸は北側柱列で 54° 東へ傾く。掘方は一辺が 50cm 前後の略方形で、1個の柱穴から柱痕跡が確認された。遺物は図示はできなかったが、P1 からロクロで製作され、内面へラミガキ・黒色処理の土師器破片が出土しており、おおよそ平安時代の建物跡の可能性が考えられる。

(4) 4号掘立柱建物跡 (SB04)

調査区西半で建物の南側が検出され、北側はさらに調査区外に伸びる。東西が 6.82 m (3間) かそれ以上、南北が 2m 以上の建物で、主軸は南側柱列で 64° 東へ傾く。掘方は一辺が 50 ~ 80cm の略方形で、柱痕跡は確認されなかった。遺物は図示はできなかったが、P4 からロクロで製作され、内面へラミガキ・黒色処理の土師器破片が出土しており、おおよそ平安時代の建物跡の可能性が考えられる。



第 31 図 2次 1号掘立柱建物跡 (SB01)

SB01 柱穴土層注記

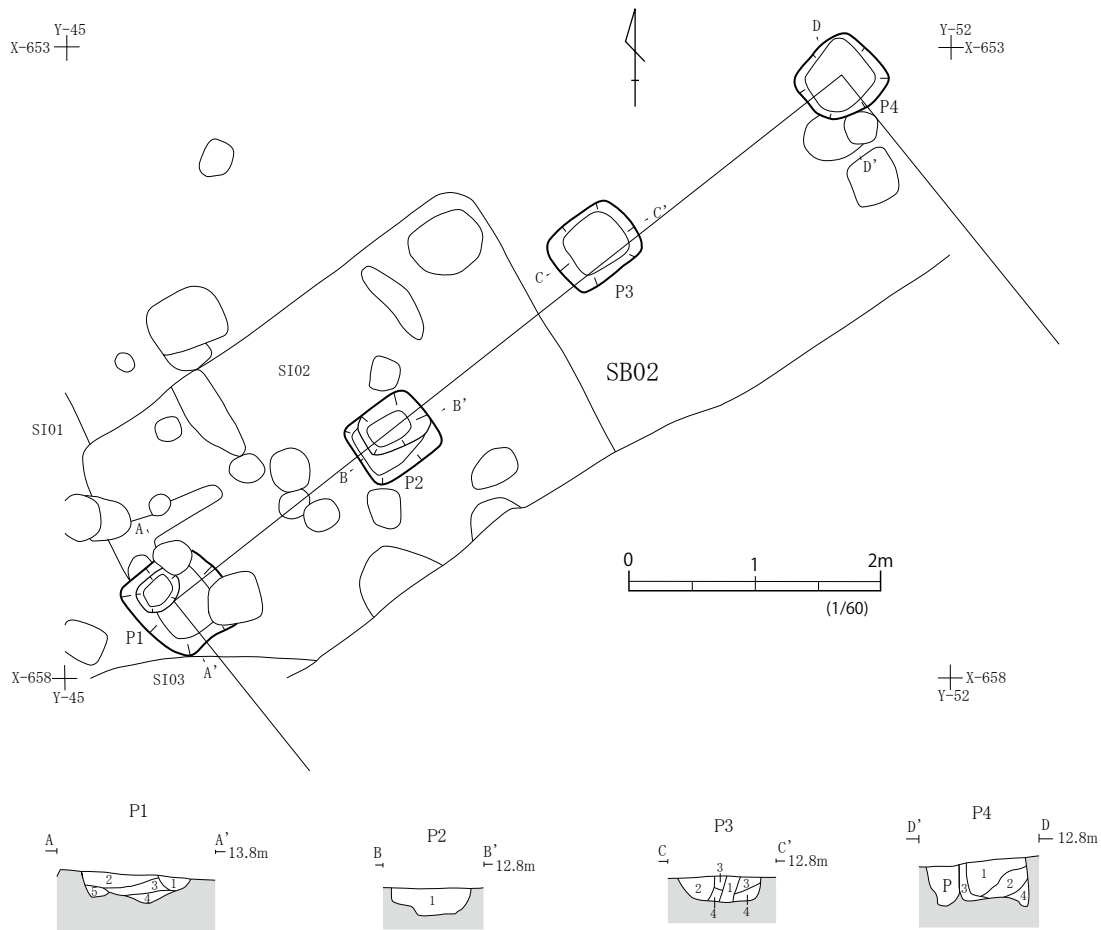
P1				P5			
層No.	土色	土質	備考	層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック少量、白色バミス微量含む。柱痕跡埋土	1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	上位に明黄褐色粘土小ブロックを少量含む。柱痕跡埋土
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	ローム粒少量、凝灰岩片微量含む。掘方埋土	2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	明黄褐色粘土粒子、小ブロックを中量含む。
3	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	ロームブロックをやや多く含む。掘方埋土	3	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	明黄褐色粘土粒子を少量含む。
P2				P6			
層No.	土色	土質	備考	層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック少量、白色バミス微量含む。	1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土を小ブロック状に少量含む。炭化物を微量含む。柱痕跡埋土
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	焼土粒、白色バミス粒微量含む。柱痕跡埋土	2	暗褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土小・中ブロックを極めて多く含む。
3	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	ローム質土粒を少量含む。掘方埋土	3	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土小・中ブロックを極めて多く含む。
P3				P7			
層No.	土色	土質	備考	層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	明黄褐色粘土粒子を少量含む。	1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色、黄褐色粘土を小ブロック状に極めて多く含む。焼土粒少量含む。
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	明黄褐色粘土を小ブロック状に中量含む。				
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	明黄褐色粘土をブロック状に少量含む。炭化物を少量含む。	P8			
P4				層No.	土色	土質	備考
層No.	土色	土質	備考	1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子、焼土粒子、炭化物を微量含む。
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子を少量含む。	2	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子、小ブロック、焼土粒子、炭化物を微量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子を少量含む。柱痕跡埋土	3	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子、小・中ブロックを少量含む。
3	黄褐色 (10YR5/6)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土を小ブロック状に多量含む。	4	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子、焼土粒子、炭化物を微量含む。
4	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	明黄褐色粘土を小ブロック状に少量含む。				

(5) 5号掘立柱建物跡 (SB05)

調査区西半で建物の南側が検出され、北側はさらに調査区外に延びる。東西が4.30m(2間)以上、南北が2.18m(1間)以上の建物で、主軸は南側柱列で70°東へ傾く。掘方は一辺が50cm前後の略方形で、1個の柱穴から柱痕跡は確認された。遺物はP3からロクロで製作され、内面へラミガキ・黒色処理の土師器破片(第35図1)が出土しており、おおよそ平安時代の建物跡の可能性が考えられる。

(6) 6号掘立柱建物跡 (SB06)

調査区東半で建物の北側が検出され、南側はさらに調査区外に延びる。東西が12.88m(6間)、南北



第32図 2次 2号掘立柱建物跡 (SB02)

SB02 柱穴土層注記

P1

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	灰白色砂岩粒を微量含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	焼土粒を微量、ロームブロック、灰白色砂岩粒を少量含む。
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	灰白色砂岩粒、ローム粒を極めて多量含む。
4	黒褐色 (10YR2/1)	粘質シルト	ローム粒をやや多く含む。
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒を少量含む。

P2

層No.	土色	土質	備考
1	黒色 (10YR2/1)	粘質シルト	上位に黄褐色、明黄褐色粘土小ブロック、下位に黄褐色、明黄褐色粘土中ブロックを多く含む。

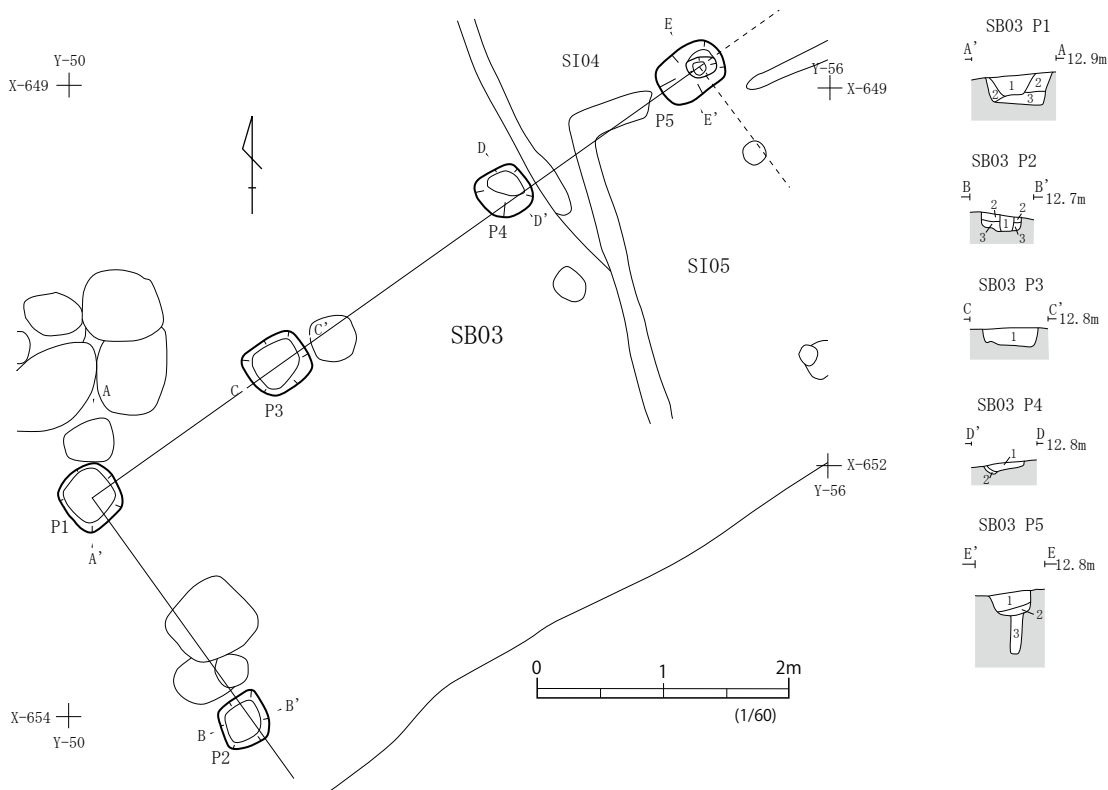
P3

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	焼土粒子少量含む。柱痕跡埋土
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	焼土微粒子を微量含む。
3	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	焼土微粒子、灰白色粘土粒子を微量含む。
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	黄褐色粘土ブロックを少量含む。

P4

層No.	土色	土質	備考
1	黒色 (10YR1.7/1)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子、焼土粒子を微量含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
3	黒色 (10YR2/1)	粘質シルト	黄褐色粘土を小ブロック状に中量含む。
4	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	黄褐色粘土を小ブロック状に少量含む。

が2.32 m (1間)以上の建物で、主軸は北側柱列で38° 東へ傾く。掘方は径が30cm 前後の略円形で、1個の柱穴から柱痕跡は確認された。遺物は図示はできなかったが、土師器破片が出土している。しかし詳細な時期は不明である。



SB03 柱穴土層注記

P1

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土粒、ロームブロック微量含む。
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒少量、ローム粒や多く含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロックをやや多く含む。

P4

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	明黄褐色粘土を小ブロック状に少量含む。
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	明黄褐色粘土を中ブロック状に少量含む。

P2

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	明黄褐色粘土を粒子、ブロック状に少量含む。柱痕跡埋土
2	暗褐色 (10YR2/4)	粘質シルト	黄褐色粘土を粒子、ブロック状に少量含む。
3	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土	褐色粘土を小ブロック状に少量含む。

P5

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒、灰黄褐色粘土ブロック微量含む。
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒、灰黄褐色粘土ブロック少量含む。
3	黒色 (10YR2/1)	シルト	ロームブロック微量含む。

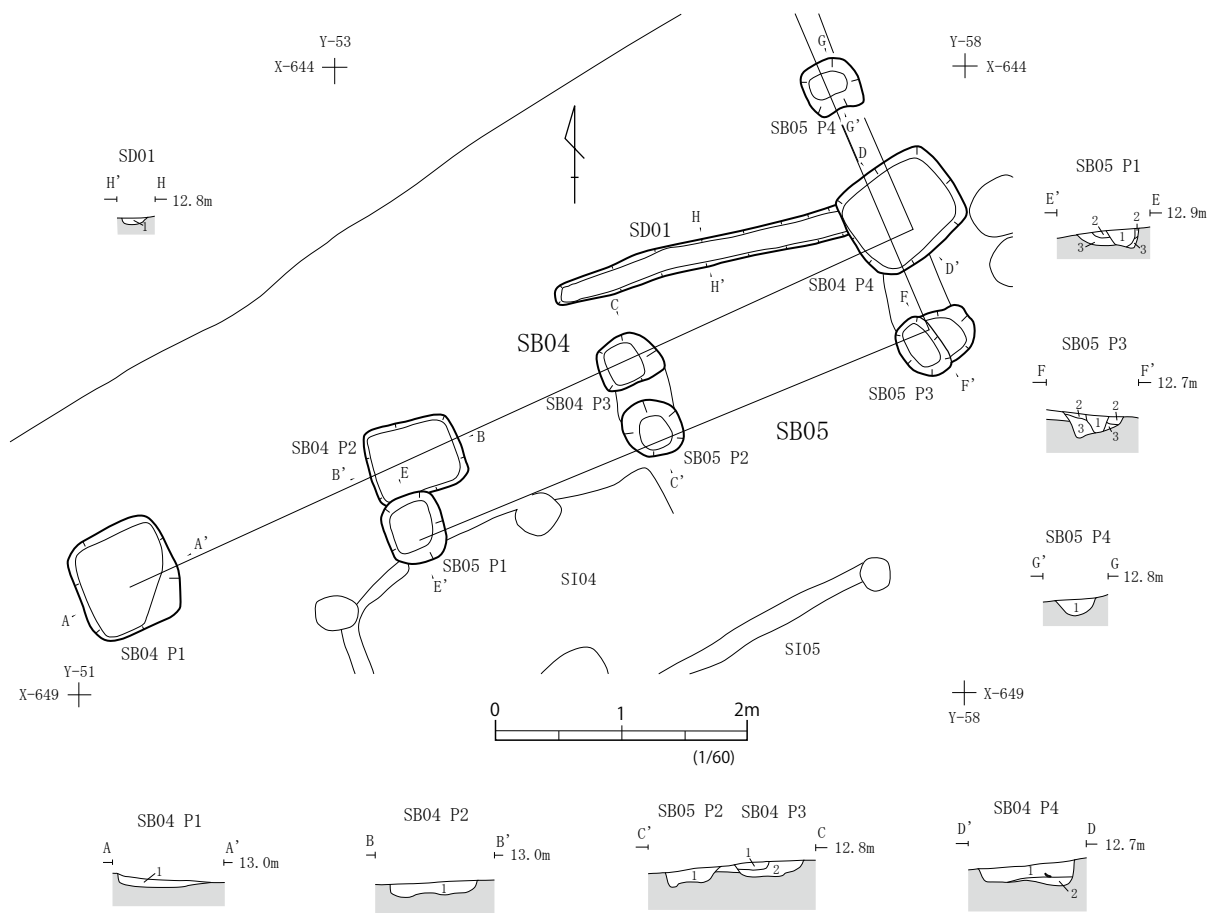
P3

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土を小ブロック状に中量含む。

第33図 2次 3号掘立柱建物跡 (SB03)

第6表 第2次調査掘立柱建物跡属性表

建物名	間数	棟方向	桁行総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定柱列	梁行総長 (m)	柱間寸法 (m)	測定柱列	方向	柱痕跡径 (cm)	柱穴規模 (cm)	平面形	備考
SB01	2×2	東西	2.68	1.38、1.30	南列	2.30	1.12、1.18	西列	N-14° -W	10	30~50	円形、隅丸方形	P5から須恵器
SB02	1以上×3	東西?	6.80	2.20、2.20、2.40	北列	—	—	—	N-51° -E	10	60~70	方形	
SB03	1以上×3	東西?	5.94	1.80、2.32、1.82	北列	2.14以上	2.14	西列	N-54° -E	12	50	略方形	P1からロクロ土師器
SB04	1以上×3	東西?	6.82	2.44、2.40、2.48	南列	—	—	—	N-64° -E	10	50~80	略方形	P4からロクロ土師器
SB05	1以上×2以上	東西?	4.30	2.04、2.26	南列	2.18以上	2.18	東列	N-70° -E	10	50	略方形	P3からロクロ土師器
SB06	1以上×6	東西	12.88	2.08、2.46、2.40、1.98、1.96、2.00	北列	2.32以上	2.32	東列	N-38° -E	12	30	略円形	



SB04 柱穴土層注記

P1

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土を小ブロック状に多く含む。

P2

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	明黄褐色粘土を小・中ブロック状に極めて多く含む。

P3

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄褐色粘土大ブロック主体、黄褐色粘土中ブロック多く含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色、橙色粘土中ブロックを多く含む。

P4

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒をやや多く、灰白色粘土ブロックを微量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック、黄褐色粘土ブロックを多量含む。

SB05 柱穴土層注記

P1

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	明黄褐色粘土粒子・小ブロックを少量含む。柱痕跡埋土
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	明黄褐色、浅黄褐色粘土小ブロックを少量含む。
3	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	明黄褐色、浅黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。

P2

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	粘質シルト	灰白色、黄褐色、橙色粘土小・中ブロックを多く含む。

P3

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ローム粒、灰白色粘土粒を少量、炭化物を微量含む。
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ローム粒をやや多く含む。
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒を多量、灰白色粘土ブロックを少量含む。

P4

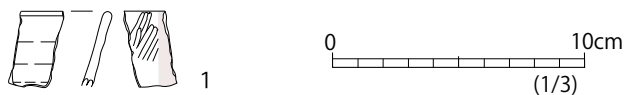
層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子・小ブロック微量含む。

SD01 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	黄褐色、橙色粘土小ブロックを多く含む。

第 34 図 2次 4・5号掘立柱建物跡 (SB04・SB05)





番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 坏	SB05 P3 堆積土	ロクロナデヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	-	-	-	C-7	20-11

第 35 図 2次 掘立柱建物跡 (SB05) 出土遺物

#### 4. 柱穴列

ピットの中で比較的規模が小さく、列状に組み合うものを柱穴列とした。

##### (1) 1号柱穴列 (SA01)

調査区のほぼ中央で検出された。4個の柱穴が 5.32 m (3間) に渡って東西に並列する。主軸は 41° 東へ傾く。掘方は径が 30cm 前後の略円形で、2個の柱穴から柱痕跡は確認された。遺物は図示はできなかったが、土師器破片が出土している。しかし詳細な時期は不明である。

##### (2) 2号柱穴列 (SA02)

調査区のほぼ中央で検出された。6個の柱穴が 9.88 m (5間) に渡って東西に並列する。主軸は 41° 東へ傾く。掘方は径が 30cm 前後の略円形で、2個の柱穴から柱痕跡は確認された。遺物は図示はできなかったが、P5 からロクロで製作された土師器甕破片が出土している。しかし詳細な時期は不明である。

#### 5. 性格不明遺構

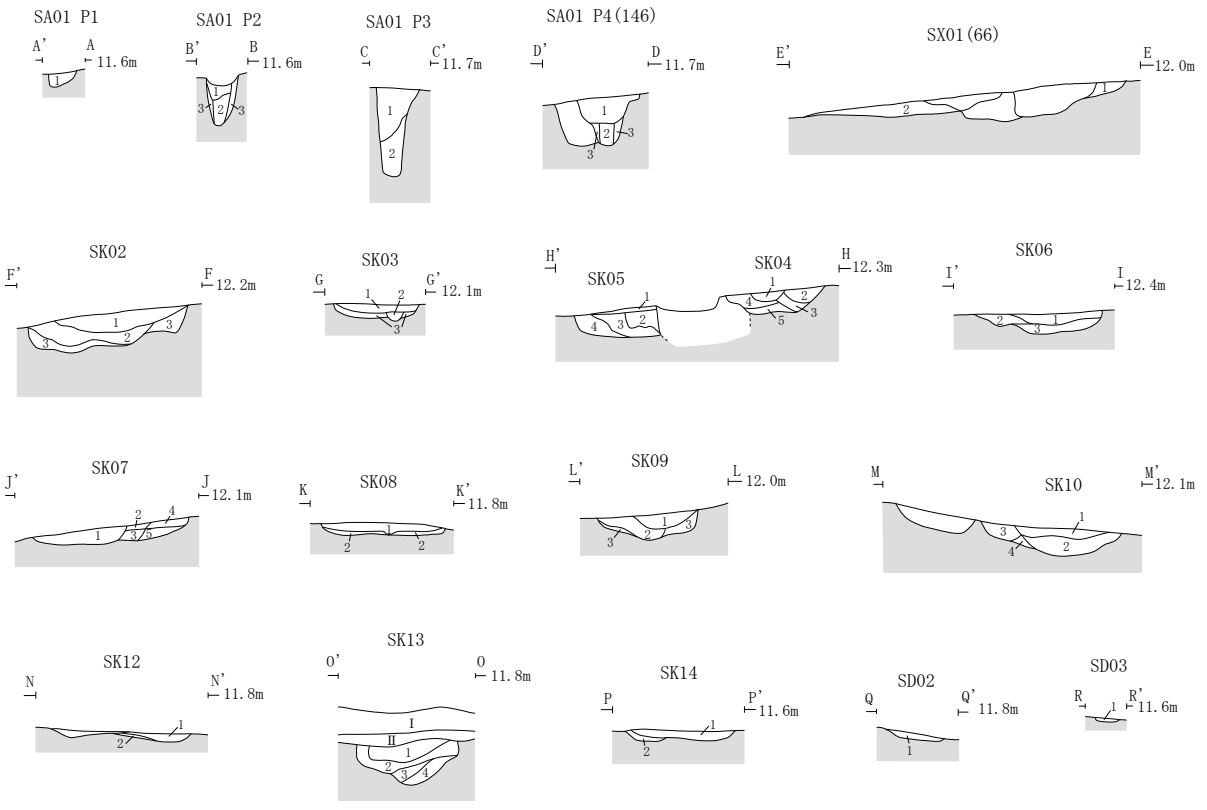
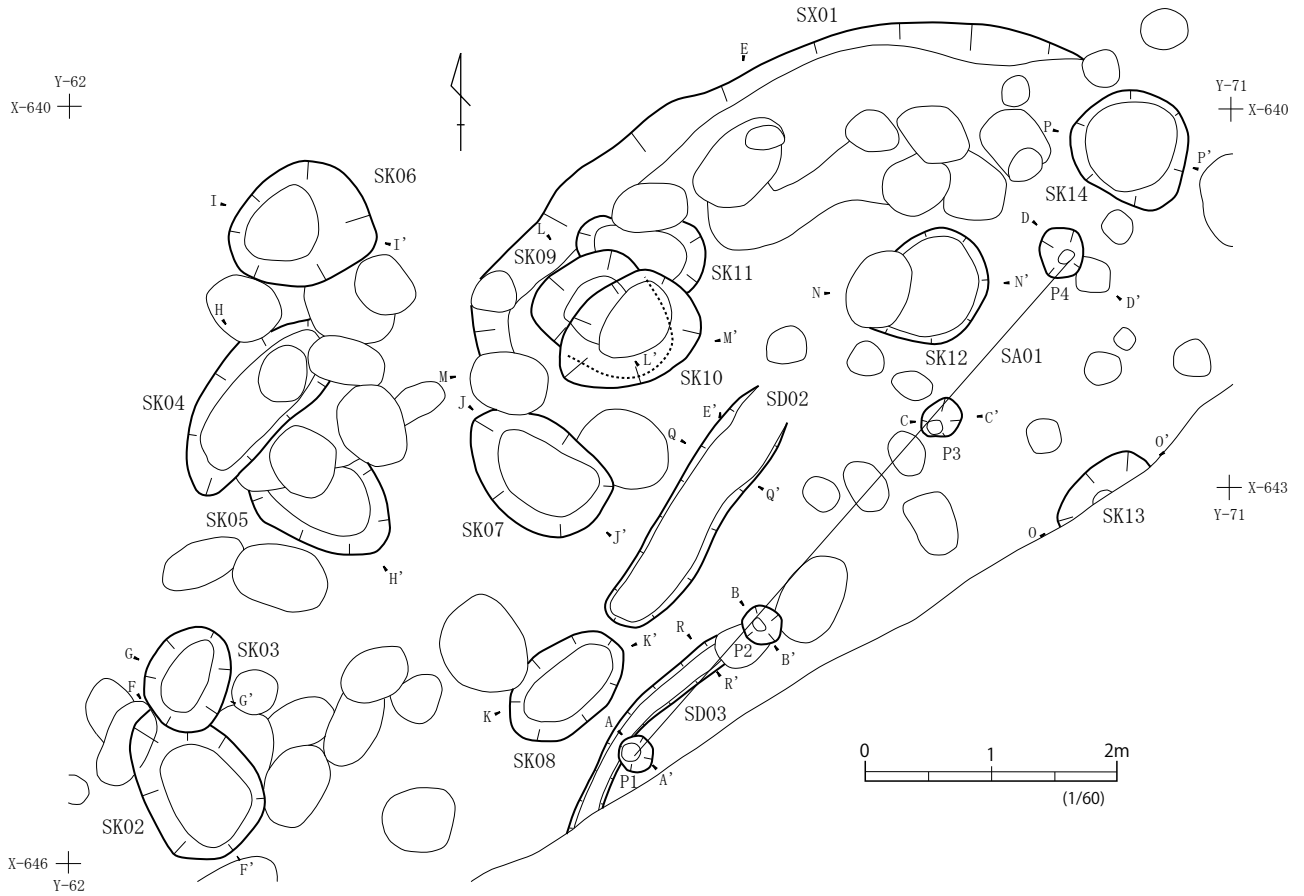
規模の大きい遺構の中で一部のみが検出され、全体の形状が不明確なものを性格不明遺構とした。2基確認された。

##### (1) 1号性格不明遺構 (SX01)

調査区のほぼ中央で傾斜の高い方の北壁のみが確認された。その南側には多数の土坑やピット分布しているが、それらとの前後関係については明確にはできなかった。また全体の形状は不明であるが残存する北壁はやや円みを帯びており、その長さは 5.28 m ほどで、主軸は 48° 東へ傾く。北壁の高さは 15cm ほどで、壁の立ち上がりは緩やかである。また底面にはやや凹凸が見られる。堆積土は2層確認され、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から須恵器の蓋 (第 38 図1) が出土している。これは内面にカエリをもたず端部が下方に折れ曲がるタイプで、8世紀代から9世紀前葉の頃のものと考えられる。

##### (2) 2号性格不明遺構 (SX02)

調査区の東側で傾斜の高い方の北壁のみが確認された。北壁の南東側には多数の土坑や掘立柱建物跡の柱穴、ピットが密に分布しているが、これらの大半は本遺構の堆積土を除いたのちに確認したものである。残存する北壁は直線的であり、確認された長さは 11.15 m ほどで、主軸は 40° 東へ傾く。北壁の高さは 10cm 前後で、壁の立ち上がりはやや直立ぎみである。また底面にはやや凹凸が見られる。堆積土は4層確認され、いずれも自然堆積層である。遺物は出土していない。



第 36 図 2次 1号柱穴列(SA01)・1号性格不明遺構(SX01)・土坑(SK02～SK14)・溝跡(SD02・SD03)

第IV章 発見された遺構と遺物【2次調査】

SA01 土層注記

P1

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土小ブロック、焼土を少量含む。

P2

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄褐色粘土小・中ブロックを少量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	浅黄褐色粘土粒子、小ブロックを微量含む。
3	黄褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	暗褐色、黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。

SX01 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロックをやや多く、白色粘土を少量含む。
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒、焼土粒を微量含む。

SK 土層注記

SK02

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土、小・中ブロックを少量含む。
2	黒褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土、小ブロックを多く含む。炭化物を少量含む。
3	浅黄褐色 (10YR8/4)	粘質シルト	灰白色、黄褐色粘土、中・大ブロックを多く含む。

SK03

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	明黄褐色粘土の小ブロックを微量含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	灰白色、黄褐色粘土粒子を少量含む。
3	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	下に黄褐色粘土小ブロックを少量含む。

SK04

層No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘質シルト	浅黄褐色粘土粒子・小ブロック、石英等の火山噴出物を多く含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロックを少量含む。焼土、炭化物多量含む。
3	明黄褐色 (10YR6/8)	粘質シルト	暗褐色、黄褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。石英等の火山噴出物を微量含む。
4	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄褐色粘土小ブロックを微量含む。炭化物を微量含む。
5	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	暗褐色、浅黄褐色粘土小ブロックを多く含む。石英等の火山噴出物を少量含む。

SK05

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子を少量含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子、小ブロックを多く含む。
3	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小・中・大ブロックを多く含む。
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。

SK06

層No.	土色	土質	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土粒子を少量含む。
2	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土中ブロックを中量含む。
3	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土小ブロックを多く含む。

SK07

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。下に灰白色粘土の小・中ブロックをやや多く含む。
2	黄褐色 (10YR5/8)	粘質シルト	褐色粘土小ブロックを少量含む。
3	黄褐色 (10YR5/8)	粘質シルト	浅黄褐色粘土小ブロック、酸化鉄(黒色)を小ブロック状にやや多く含む。
4	黄褐色 (10YR5/6)	粘質シルト	褐色粘土小ブロックを多く含む。
5	黄褐色 (10YR5/6)	粘質シルト	灰白色、浅黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。

SD 土層注記

SD02

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒をやや多く含む。

P3

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒、凝灰岩粒を多量含む。
2	黒褐色 (10YR2/1)	粘質シルト	ローム粒を微量含む。

P4

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ローム粒を少量、炭化物・焼土粒を微量含む。拳大の凝灰岩あり。
2	黒色 (10YR2/1)	粘質シルト	ローム粒を少量含む。
3	灰黄褐色 (10YR2/4)	シルト	凝灰岩片をやや多く含む。

SK08

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色、黄褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。焼土、炭化物を少量含む。
2	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘質シルト	暗褐色、黄褐色粘土中ブロックを多く含む。

SK09

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	黄褐色粘土小・中ブロックを少量含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色、黄褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘質シルト	灰白色、黄褐色粘土中・大ブロックを多く含む。

SK10

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子、小ブロックをやや多く含む。焼土、炭化物を少量含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	灰白色、黄褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。
3	黄褐色 (10YR5/6)	粘質シルト	明黄褐色粘土主体。灰白色粘土小ブロックを下位に少量含む。
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	灰白色、明黄褐色粘土小・中をやや多く含む。

SK12

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土粒を微量含む。
2	灰黄褐色 (10YR2/4)	ローム質土	凝灰岩粒をやや多く、黒褐色土を微量含む。

SK13

層No.	土色	土質	備考
I	表土		
II	旧耕作土		
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄褐色、黄褐色粘土粒子、小・大ブロックをやや多く含む。
2	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	浅黄褐色、黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
3	黄褐色 (10YR5/8)	粘質シルト	暗褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。
4	明黄褐色 (10YR6/8)	粘質シルト	浅黄褐色、暗褐色粘土小・中ブロックを極めて多く含む。

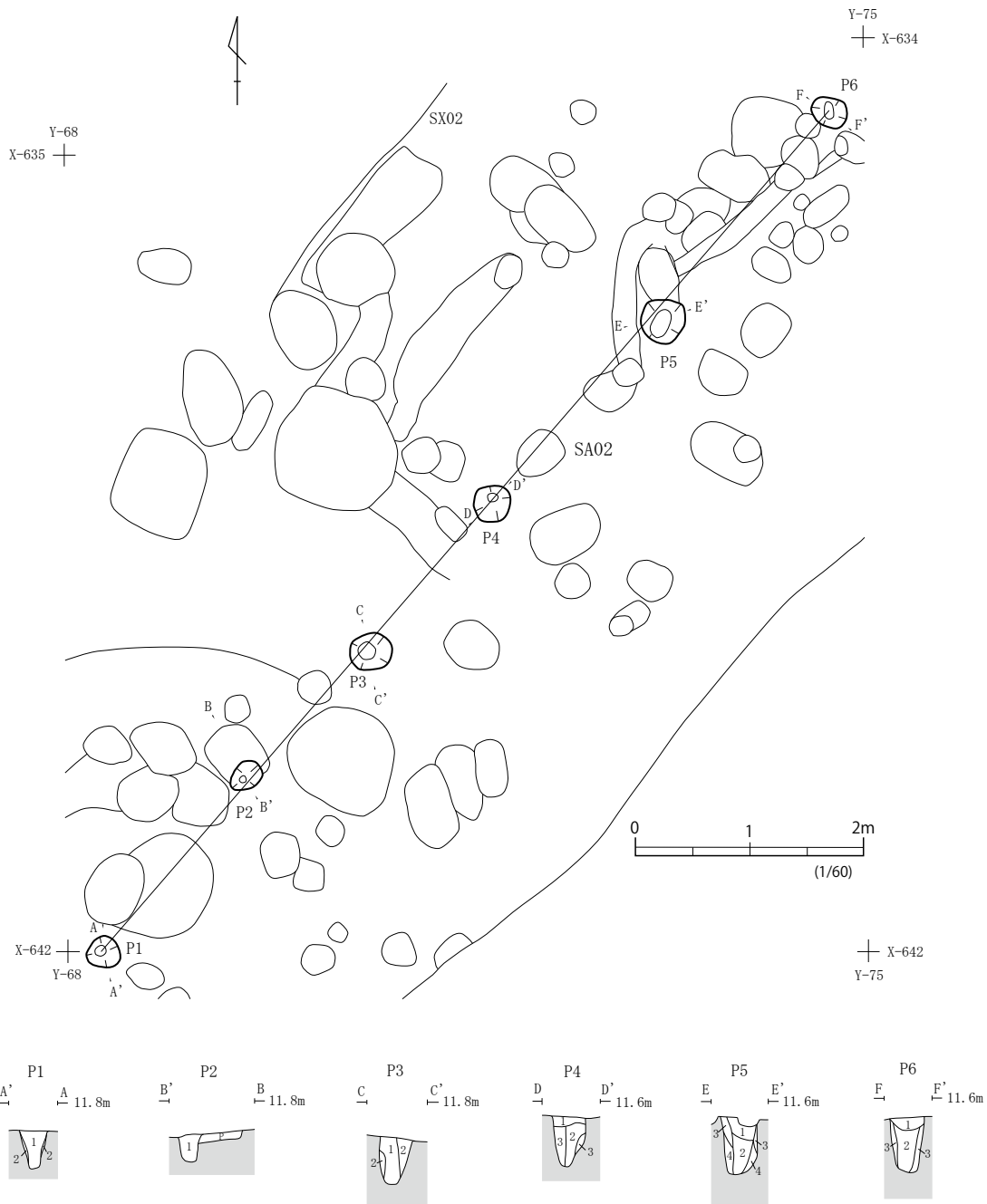
SK14

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	植物遺体少量含む。
2	明褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。

SD03

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄褐色粘土粒子、小ブロックを多く含む。

第IV章 発見された遺構と遺物【2次調査】



SA02 土層注記

P1

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒、凝灰岩粒を少量含む。
2	灰黄褐色 (10YR4/2)	ローム質土	凝灰岩粒をやや多く、黒色土を微量含む。

P2

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	石英、ローム粒を少量、凝灰岩粒を微量含む。

P3

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	明黄褐色粘土小ブロック、焼土粒子、植物遺体を少量含む。
2	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色、明黄褐色粘土小・中ブロックを極めて多く含む。植物遺体少量含む。

P4

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土、焼土粒子、炭化物を微量含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄褐色、黄褐色粘土小ブロックを少量含む。柱痕跡埋土
3	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。掘方埋土

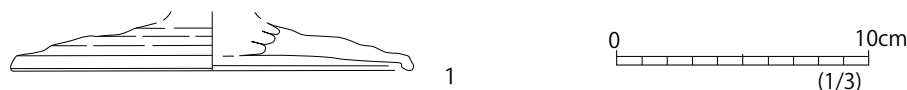
P5

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロック、焼土粒子、炭化物を少量含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。柱痕跡埋土
3	褐色 (10YR4/6)	粘質土	浅黄褐色、黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。掘方埋土
4	褐色 (10YR4/4)	粘質土	浅黄褐色粘土中・大ブロックをやや多く含む。掘方埋土

P6

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	下位に黄褐色粘土中ブロックをやや多く含む。
2	暗褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロックを少量含む。柱痕跡埋土
3	褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	黄褐色粘土小・中ブロックを非常に多く含む。掘方埋土

第 37 図 2次 2号柱穴列 (SA02)



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	須恵器 蓋	SX01 堆積土	ロクロナデーロクロナデ	身部1/8	(16.0)	—	—	E-3	20-16

第 38 図 2次 1号性格不明遺構 (SX01) 出土遺物

## 6. 土坑

検出された多数のピットの中で、原則として長軸が1m程度の規模をもつものを土坑としている。

### (1) 1号土坑 (SK01)

調査区の西側で検出された。ピットと重複しており、それより新しい。平面形状は長楕円形で、規模は長軸が 1.09 m、短軸が 0.58 m、確認面からの深さは 15cm 前後を測る。断面形状は皿形である。堆積土は 3層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

### (2) 2号土坑 (SK02)

調査区の中央で検出された。SK03と重複しており、それより古い。平面形状は略楕円形で、規模は長軸が 1.26 m、短軸が 0.86 m、確認面からの深さは 30cm を測る。断面形状は逆台形に近い。底面にはやや凹凸が見られる。堆積土は3層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土からロクロ製作の土師器坏・甕、赤焼土器、須恵器壺の破片が出土している。図示できた土師器坏(第 40 図1)は内面ヘラミガキ・黒色処理のもので、これらから平安時代前半頃の遺構と考えられる。

### (3) 3号土坑 (SK03)

調査区の中央で検出された。SK02と重複しており、それより新しい。平面形状は略楕円形で、規模は長軸が 0.85 m、短軸が 0.65 m、確認面からの深さは 15 ~ 23cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は 3層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から内面黒色処理の土師器坏および須恵器甕の破片が出土おり、おおむね古代の時期とみられるが詳細は不明である。

### (4) 4号土坑 (SK04)

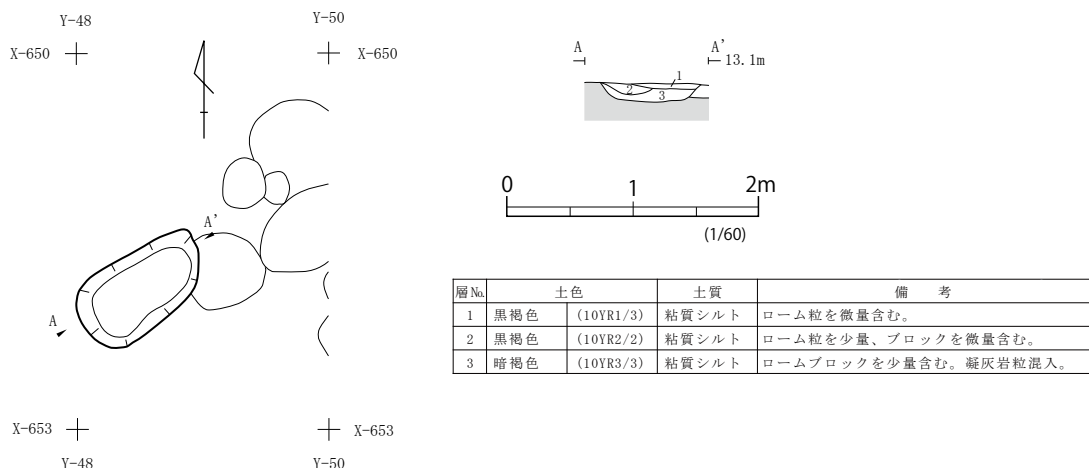
調査区の中央で検出された。いくつかのピットと重複している。平面形状は略楕円形で、規模は長軸が 1.69 m以上、短軸 0.73 m、確認面からの深さは 10 ~ 40cm を測る。断面形状は緩やかなU字形である。堆積土は5層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から須恵器壺・甕類の破片が出土おり、おおむね古代の時期とみられるが詳細は不明である。

### (5) 5号土坑 (SK05)

調査区の中央で検出された。いくつかのピットと重複している。平面形状は略楕円形であり、規模は長軸が 1.15 m以上、短軸が 0.82 m以上、確認面からの深さは 30cm を測る。断面形状は緩やかな逆台形である。堆積土は4層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は出土していない。

### (6) 6号土坑 (SK06)

調査区の中央で検出された。ピットと重複している。平面形状は略円形であり、規模は長軸が 1.15 m、短軸が 0.8 m、確認面からの深さは 20cm 前後を測る。断面形状は皿形である。堆積土は3層あり、いずれ



第 39 図 2次 1号土坑 (SK01)

も自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

(7) 7号土坑 (SK07)

調査区の中央で検出された。ピットと重複している。平面形状は略楕円形であり、規模は長軸が 1.25 m、短軸が 0.80 m、確認面からの深さは 20cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は5層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は出土していない。

(8) 8号土坑 (SK08)

調査区の中央で検出された。ピットと重複している。平面形状は楕円形であり、規模は長軸が 1.05 m、短軸が 0.68 m、確認面からの深さは 13cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は2層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

(9) 9号土坑 (SK09)

調査区の中央で検出された。SK10と重複しており、それより古い。平面形状は略楕円形であり、規模は長軸が 1.10 m、短軸が 0.88 m、確認面からの深さは 40cm 前後を測る。断面形状は緩やかなU字形である。堆積土は3層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から器種不明の土師器、および須恵器甕破片、石製品として砥石 (第 40 図3) が1点出土している。おおむね古代の時期とみられるが、詳細は不明である。

(10) 10号土坑 (SK10)

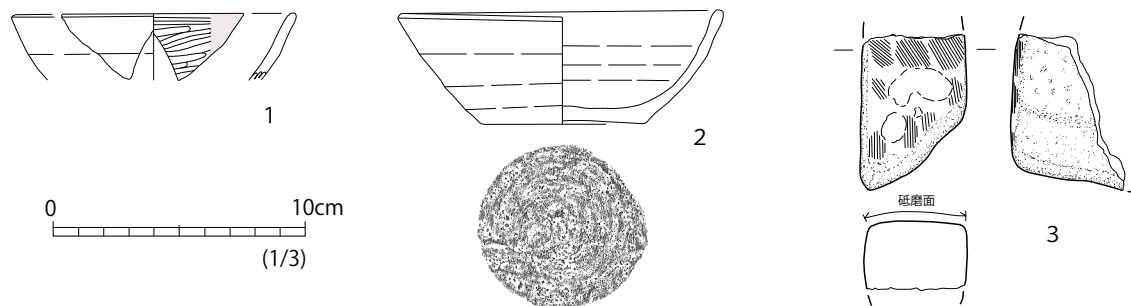
調査区の中央で検出された。SK09と重複しており、それより新しい。平面形状は略楕円形であり、規模は長軸が 1.15 m、短軸が 0.85 m、確認面からの深さは 27cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は4層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

(11) 11号土坑 (SK11)

調査区の中央で検出された。SK09・SK10と重複しており、それらより古い。平面形状は略楕円形であり、規模は長軸が 1.02 m、短軸が 0.55 m以上、確認面からの深さは 26cm を測る。断面形状は皿形である。遺物は出土していない。

(12) 12号土坑 (SK12)

調査区の中央で検出された。ピットと重複している。平面形状は略楕円形であり、規模は長軸が 1.05 m以上、短軸が 0.82 m、確認面からの深さは8cm を測る。断面形状は皿状である。堆積土は2層あり、い



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 坏	SK02 堆積土	ロクロナデーヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	(11.2)	—	—	C-8	20-12
2	赤焼土器 坏	SK18 堆積土	ロクロナデ・底部回転糸切り後、再調整なしーロクロナデ	全体の2/3	12.9	6.6	4.5	D-2	20-13

番号	種別	遺構・細部	特徴	残存	法量 (cm, g)				登録番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ	重さ		
3	砥石	SK09 堆積土	扁平な礫の一面を砥面になっている。石材は安山岩で、荒砥か中砥とみられる。	半欠	(6.1)	4.2	(2.7)	(151.0)	Kc-1	20-14

第 40 図 2次 土坑 (SK02・SK09・SK18) 出土遺物

れも自然堆積層である。遺物は出土していない。

(13) 13号土坑 (SK13)

調査区の中央で一部が検出された。南側はさらに調査区外に延びる。平面形状は略楕円形であり、規模は長軸が 0.85 m 以上、短軸が 0.25 m 以上、確認面からの深さは 38cm 以上を測る。断面形状は略台形である。堆積土は4層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は出土していない。

(14) 14号土坑 (SK14)

調査区の中央で検出された。平面形状は略円形であり、規模は長軸が 0.95 m、短軸が 0.93 m、確認面からの深さは 22cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は2層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

(15) 15号土坑 (SK15)

調査区の中央で検出された。SD04・SD05 と重複しており、それらより新しい。平面形状は略円形であり、規模は長軸が 1.08 m、短軸が 1.06 m、確認面からの深さは 50cm を測る。断面形状はU字形である。堆積土は6層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

(16) 16号土坑 (SK16)

調査区の東側で検出された。いくつかのピットと重複している。平面形状は略円形であり、規模は長軸が 1.25 m、短軸が 0.98 m 以上、確認面からの深さは 8～17cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は2層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から内面黒色処理の土師器と須恵器破片が出土おり、おおむね古代の時期とみられるが詳細は不明である。

(17) 17号土坑 (SK17)

調査区の東側で検出された。ピットと重複している。平面形状は略楕円形であり、規模は長軸が 0.92 m、短軸が 0.70 m、確認面からの深さは 14cm を測る。底面は凸凹している。堆積土は4層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から内面黒色処理の土師器が出土おり、おおむね古代の時期とみられるが詳

細は不明である。

**(18) 18号土坑 (SK18)**

調査区の東側で検出された。ピットと重複している。平面形状は略円形であり、規模は長軸が 0.77 m、短軸が 0.75 m、確認面からの深さは 40cm を測る。断面形状は逆台形である。堆積土は7層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器、赤焼土器、須恵器が出土している。土師器にはロクロで製作された坏と非ロクロの甕が、須恵器には高台付坏や甕がある。唯一図示できた赤焼土器坏（第 40 図2）は底部が回転糸切り後の再調整がないもので、10 世紀前半前後のもので推定される。このことから SK18 は平安時代前半頃の遺構と考えられる。

**(19) 19号土坑 (SK19)**

調査区の東側で検出された。SB06 の柱穴やその他のピットと重複しており、それらより古い。平面形状は長方形であり、規模は長軸が 1.95 m、短軸が 0.98 m、確認面からの深さは 10cm 前後を測る。断面形状は皿形である。底面は凸凹している。堆積土は1層で、自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

**(20) 20号土坑 (SK20)**

調査区の東側で検出された。ピットと重複している。平面形状は不整円形であり、規模は長軸が 1.17 m、短軸が 1.05 m、確認面からの深さは 30cm を測る。底面には段やピット状の落ち込みがみられる。堆積土は4層あり、いずれも自然堆積層である。堆積土には人頭大の礫が数個混入していた。遺物は出土していない。

**(21) 21号土坑 (SK21)**

調査区の東側で検出された。ピットと重複している。平面形状は不整楕円形であり、規模は長軸が 1.25 m、短軸が 0.85 m、確認面からの深さは 10cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は 1 層で、自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

**(22) 22号土坑 (SK22)**

調査区の東端で検出された。遺構の一部は調査区外に延びている。SK23 と重複しており、それより新しい。平面形状は円形を呈するものと考えられ、規模は長軸が 1.25 m、短軸が 0.58 m 以上、確認面からの深さは 60cm を測る。断面形状は逆台形である。堆積土は9層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器坏と甕、須恵器壺の破片が出土している。土師器坏はロクロで製作された底部回転糸切り、内面黒色処理のもので、平安時代前半頃の時期の遺構と考えられる。

**(23) 23号土坑 (SK23)**

調査区の東端で検出された。遺構の一部は調査区外に延びている。SK22 と重複しており、それより古い。平面形状は略楕円形を呈するものと考えられ、規模は長軸が 1.54 m 以上、短軸が 1.44 m 以上、確認面からの深さは 40cm を測る。断面形状はU字形である。堆積土は 10 層あり、いずれも自然堆積層である。遺物は堆積土からロクロで製作された土師器甕、須恵器壺・甕類の破片が出土しており、遺構はおおむね平安時代のものと考えられる。

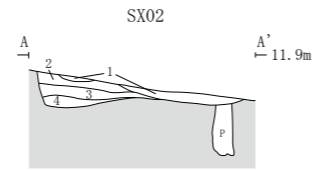
**(24) 24号土坑 (SK24)**

調査区の東側で検出された。いくつかのピットと重複している。平面形状は略円形であり、規模は長軸が 0.91 m、短軸が 0.74 m、確認面からの深さは 10cm を測る。断面形状は皿形である。堆積土は1層で、自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。



SX02 土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	明黄褐色・黄褐色粘土小・中ブロックをまばらに含む。
2	灰白色 (10YR8/2)	火山噴出物	白色パミス
3	黄褐色 (10YR8/6)	火山噴出物	黄褐色パミスと鉄分沈着が互層状に堆積。
4	明褐色 (7.5YR5/8)	粘土	3層との境に鉄分沈着が硬化し、0.5~1.5cm程度の層状に堆積。



SD 土層注記

SD04

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ローム粒をやや多く含む。礫をやや多く混入する。

SD05

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	灰白色粘土を微量含む。

SD06

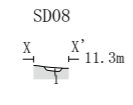
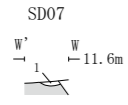
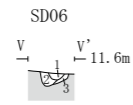
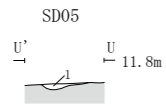
層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	浅黄褐色粘土粒子を極めて微量含む。
2	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子小ブロック・施土粒子を少量含む。
3	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	粘質シルト	浅黄褐色・暗褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。

SD07

層No.	土色	土質	備考
1	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	浅黄褐色少・中ブロックをやや多く含む。

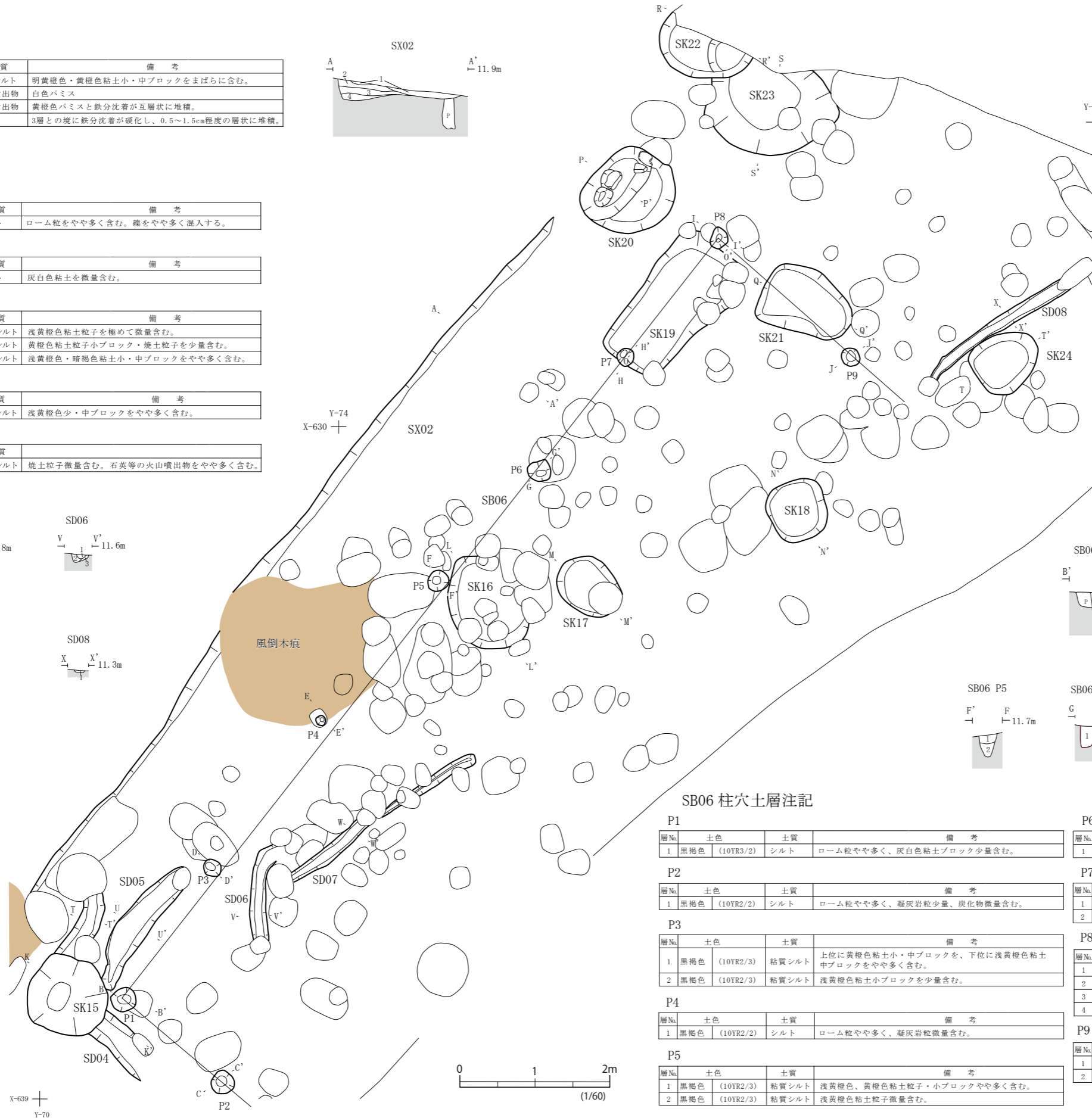
SD08

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	焼土粒子微量含む。石英等の火山噴出物をやや多く含む。



風倒木跡

風倒木痕



SB06 柱穴土層注記

P1

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒をやや多く、灰白色粘土ブロック少量含む。

P2

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒をやや多く、凝灰岩粒少量、炭化物微量含む。

P3

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	上位に黄褐色粘土小・中ブロックを、下位に浅黄褐色粘土中ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	浅黄褐色粘土小ブロックを少量含む。

P4

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒をやや多く、凝灰岩粒微量含む。

P5

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	浅黄褐色、黄褐色粘土粒子・小ブロックをやや多く含む。
2	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	浅黄褐色粘土粒子微量含む。

P6

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒微量含む。下位にはロームブロックが少量集積する。

P7

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒少量、焼土粒、炭化物を極めて微量含む。
2	褐色 (10YR4/1)	シルト	灰白色粘土ブロックをやや多く含む。

P8

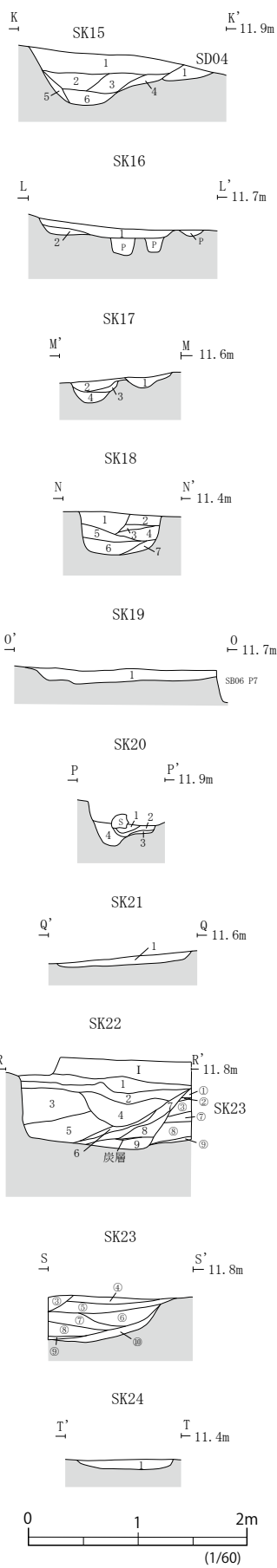
層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	浅黄褐色粘土粒子を微量含む。柱痕跡埋土
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	黄褐色粘土小・中ブロックをやや多く含む。
3	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	浅黄褐色粘土粒子・小ブロック少量含む。
4	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	浅黄褐色粘土粒子・小ブロックをやや多く含む。

P9

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	粘質シルト	浅黄褐色粘土粒子・炭化物・焼土粒子少量含む。
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黄褐色粘土小ブロックをやや多く含む。

第 41 図 2次 6号掘立柱建物跡(SB06)・2号性格不明遺構(SX02)・土坑(SK15~24)・溝跡(SD04~08)





SK 土層注記

層No.	土色	土質	備考
SK15			
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒をやや多く、炭化物をごく少量含む。拳大の礫混入。
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム粒を少量含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ローム粒を微量含む。灰白色粘土塊を混入。
4	灰白色	粘土	ローム粒、黒褐色土を少量含む。
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ローム粒を極めて微量含む。
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ローム粒、黒褐色土を少量含む。凝灰岩片を微量含む。
SK16			
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロックを少量、焼土粒を微量含む。
2	にぶい黄褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	白色のパミスをやや多く含む。ロームブロック微量含む。
SK17			
1	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	焼土粒・炭化物を少量含む。
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	灰白色粘土粒、凝灰岩粒を微量含む。
3	にぶい黄褐色 (10YR4/6)	粘質シルト	ローム粒、黒褐色土を少量含む。
4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒、灰白色粘土ブロックをやや多く含む。
SK18			
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒・炭化物少量含む。
2	黄褐色 (10YR4/6)	シルト	黒褐色土を多量含む。
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。
4	黄褐色 (10YR4/6)	シルト	黒褐色土を少量、ローム粒をやや多く含む。
5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒・炭化物微量含む。
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	焼土粒・凝灰岩粒を微量含む。
7	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒を微量含む。
SK19			
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒少量、焼土粒・炭化物を極めて微量含む。
SK20			
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	黄褐色粘土粒子をやや多く含む。炭化物微量含む。
2	褐色 (10YR4/4)	粘質シルト	黄褐色・暗褐色粘土小ブロックをやや多く含む。石英等の火山噴出物をやや多く含む。
3	黄褐色 (10YR5/8)	粘土	褐色粘土粒子・小ブロック多く含む。石英等の火山噴出物を少量含む。
4	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	浅黄褐色・黄褐色粘土粒子・小ブロック少量含む。
SK21			
1	褐色 (10YR4/4)	シルト	浅黄褐色粘土粒子・小ブロックやや多く含む。炭化物少量含む。石英等の火山噴出物少量含む。
SK22			
I			耕作土
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	ロームブロック・凝灰岩片をやや多く含む。
2	褐色 (10YR4/6)	ローム質土	黒褐色土を少量含む。
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒・炭化物・焼土粒を少量含む。
4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	拳大のローム塊を多量含む。
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	ローム塊を少量、焼土ブロックを微量含む。
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物、焼土粒、ローム粒を少量含む。
7	炭層 (10YR2/1)	炭	焼土粒を少量含む。
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	ロームブロック・凝灰岩片少量、焼土粒微量を含む。
9	黄褐色 (10YR6/4)	砂質シルト	山砂主体。白色パミスと暗褐色土をやや多く含む。
SK23			
①	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	白色パミス、ローム粒を少量含む。
②	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	黒褐色土を少量含む。
③	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒を多量、焼土粒を微量含む。
④	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	山砂、白色パミスを微量含む。
⑤	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	黒褐色土、白色パミスをやや多く含む。
⑥	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	ローム粒をやや多く、白色パミスを微量含む。
⑦	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	黒褐色土を粒状に少量含む。
⑧	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	黒褐色土、白色パミスをやや多く含む。
⑨	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	炭化物を多量、焼土粒を微量含む。
⑩	黄褐色 (10YR5/6)	砂質シルト	ロームブロックをやや多く、黒褐色土を少量含む。
SK24			
1	暗褐色 (10YR3/4)	粘質シルト	明黄褐色粘土小・中ブロックを多く含む。

第 42 図 2次 土坑 (SK02 ~ SK24)

第7表 第2次調査土坑属性表

遺構名	平面形	断面形	規模 (m)		深さ (m)	堆積土の状況	遺物	備考	平面図	断面図
			長軸	短軸						
SK01	楕円形	皿形	1.09	0.58	0.15	自然堆積	土師器片		39	39
SK02	楕円形	逆台形	1.26	0.86	30	自然堆積	ロクロ土師器坏・甕、赤焼土器・坏、須恵器・甕	SK03 より旧	36	36
SK03	略楕円形	皿形	0.85	0.65	0.15 ~ 0.23	自然堆積	土師器・坏、須恵器・甕	SK02 より新	36	36
SK04	略楕円形	U字形	1.69	0.73	0.10 ~ 0.40	自然堆積	須恵器・壺・甕		36	36
SK05	略楕円形	逆台形	1.15 以上	0.82 以上	0.30	自然堆積	なし		36	36
SK06	略円形	皿形	1.15	0.80	0.20	自然堆積	土師器片		36	36
SK07	略楕円形	皿形	1.25	0.80	0.20	自然堆積	なし		36	36
SK08	楕円形	皿形	1.05	0.68	0.13	自然堆積	土師器片		36	36
SK09	略楕円形	U字形	1.10	0.88	0.40	自然堆積	土師器片、須恵器・甕、石製品・砥石	SK10 より旧	36	36
SK10	略楕円形	皿形	1.15	0.85	0.27	自然堆積	土師器片	SK09 より新	36	36
SK11	略楕円形	皿形	1.02	0.55 以上	0.26	自然堆積	なし	SK09・10 より旧	36	—
SK12	略楕円形	皿形	1.05 以上	0.82	0.08	自然堆積	なし		36	36
SK13	略楕円形	略台形	0.85 以上	0.25 以上	0.38	自然堆積	なし		36	36
SK14	略円形	皿形	0.95	0.93	0.22	自然堆積	土師器片		36	36
SK15	略円形	U字形	1.08	1.06	0.50	自然堆積	土師器片	SD04・05 より新	41	42
SK16	略円形	皿形	1.25	0.98 以上	0.08 ~ 0.17	自然堆積	土師器片、須恵器片		41	42
SK17	略楕円形	不定形	0.92	0.70	0.14	自然堆積	土師器・坏		41	42
SK18	略円形	逆台形	0.77	0.75	0.40	自然堆積	ロクロ土師器・坏、非ロクロ土師器・甕、須恵器・高台坏・甕、赤焼土器・坏		41	42
SK19	長方形	皿形	1.95	0.98	0.10	自然堆積	土師器片	SB06 より旧	41	42
SK20	不整楕円形	不定形	1.17	1.05	0.30	自然堆積	なし		41	42
SK21	不整楕円形	皿形	1.25	0.85	0.10	自然堆積	土師器片		41	42
SK22	円形?	逆台形	1.25	0.58 以上	0.60	自然堆積	ロクロ土師器・坏・甕、須恵器・壺	SK23 より新	41	42
SK23	略楕円形?	U字形	1.54 以上	1.44 以上	0.40	自然堆積	ロクロ土師器・甕、須恵器・壺・甕	SK22 より旧	41	42
SK24	略円形	皿形	0.91	0.74	0.10	自然堆積	土師器片		41	42

## 7. 溝跡

### (1) 1号溝跡 (SD01)

調査区のほぼ中央で検出された。SB04 の P4 と重複しており、それより古い。検出された長さは 2.35 m で、主軸は 75° 東へ傾く。上幅は 0.55 m 前後で、深さは 7cm 前後、断面形状は U 字形である。堆積土は 1 層で、自然堆積層である。遺物は出土していない。

### (2) 2号溝跡 (SD02)

調査区の中央で検出された。検出された長さは 2.17 m で、その東は途切れている。主軸は 35° 東へ傾く。上幅は 0.46 m 前後で、深さは 10cm 前後、断面形状は皿形である。堆積土は 1 層で、自然堆積層である。遺物は出土していない。

### (3) 3号溝跡 (SD03)

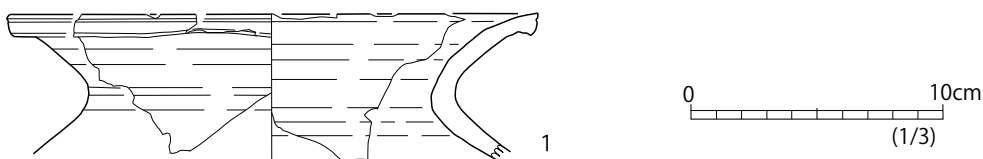
調査区の中央で検出された。いくつかのピットと重複している。検出された長さは 1.66 m で、その南は調査区外に延びる。やや弓なりに走行するが、主軸は 41° 東へ傾く。上幅は約 0.24 m で、深さは 5cm 前後、断面形状は皿形である。堆積土は 1 層で、自然堆積層である。遺物は出土していない。

### (4) 4号溝跡 (SD04)

調査区の中央で検出された。SK15、およびピットと重複しており、それらより古い。検出された長さは 0.96 m で、南は途切れている。主軸は 55° 西へ傾く。上幅は 0.46 m で、深さは 10cm 前後、断面形は皿形である。堆積土は 1 層で、自然堆積層である。遺物は堆積土から土師器破片と図示した須恵器甕 (第 43 図 1) が出土している。須恵器甕は、口縁端部が幅の狭い縁帯をなすもので、頸部が強く屈曲している。8 世紀代から 9 世紀前半の頃のものと思われる。

### (5) 5号溝跡 (SD05)

調査区の中央で検出された。SK15、およびピットと重複しており、それらより古い。検出された長さは 1.86 m で、やや弓なりに走行するが、主軸は 36° 東へ傾く。上幅は 0.4 ~ 0.5 m で、深さは 6cm、断面形は皿形である。堆積土は 1 層で、自然堆積層である。遺物は出土していない。



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	須恵器 甕	SD04 堆積土	ロクロナデーロクロナデ	口縁部～体部上方1/10	(21.0)	-	-	E-2	20-15

第 43 図 2次 溝跡 (SD04) 出土遺物

(6) 6号溝跡 (SD06)

調査区のとやや東側で検出された。いくつかのピットと重複している。検出された長さは 1.42 m で北側は東に屈曲する。主軸はほぼ真北である。上幅は 0.15 m で、深さは 10cm 前後、断面形は逆三角形である。堆積土は 1層で、自然堆積層である。遺物は出土していない。

(7) 7号溝跡 (SD07)

調査区のとやや東側で検出された。いくつかのピットと重複している。検出された長さは約 2.92 m で、主軸は 57° 東へ傾く。上幅は約 0.15 m で、深さは 3cm 前後、断面形は皿形である。堆積土は 1層で、自然堆積層である。遺物は堆積土から須恵器壺破片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

(8) 8号溝跡 (SD08)

調査区の東側で検出された。いくつかのピットと重複している。検出された長さは 2.58 m で、主軸は 58° 東へ傾く。上幅は 0.18 m で、深さは 5cm 前後、断面形は皿形である。堆積土は 1層で、自然堆積層である。遺物は出土していない。

第8表 第2次調査溝跡属性表

遺構名	検出長 (m)	断面形	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (m)	方向	堆積土	出土遺物	備考	平面図	断面図
SD01	2.35	U字	0.55	0.15 ~ 0.18	0.07	N-75° -E	自然堆積		SB04 より旧	34	34
SD02	2.17	皿形	0.46	0.35 ~ 0.42	0.10	N-35° -E	自然堆積			36	36
SD03	1.66	皿形	0.24	0.15	0.05	N-41° -E	自然堆積			36	36
SD04	0.95	皿形	0.46	0.24	0.10	N-55° -W	自然堆積	須恵器・甕	SK15 より旧	41	41
SD05	1.86	皿形	0.50	0.24	0.06	N-36° -E	自然堆積		SK15 より旧	41	41
SD06	1.42	V字	0.15	0.10	0.10	真北	自然堆積			41	41
SD07	2.92	皿形	0.15	0.05 ~ 0.10	0.03	N-57° -E	自然堆積	須恵器・壺		41	41
SD08	2.58	皿形	0.18	0.14	0.05	N-58° -E	自然堆積			41	41

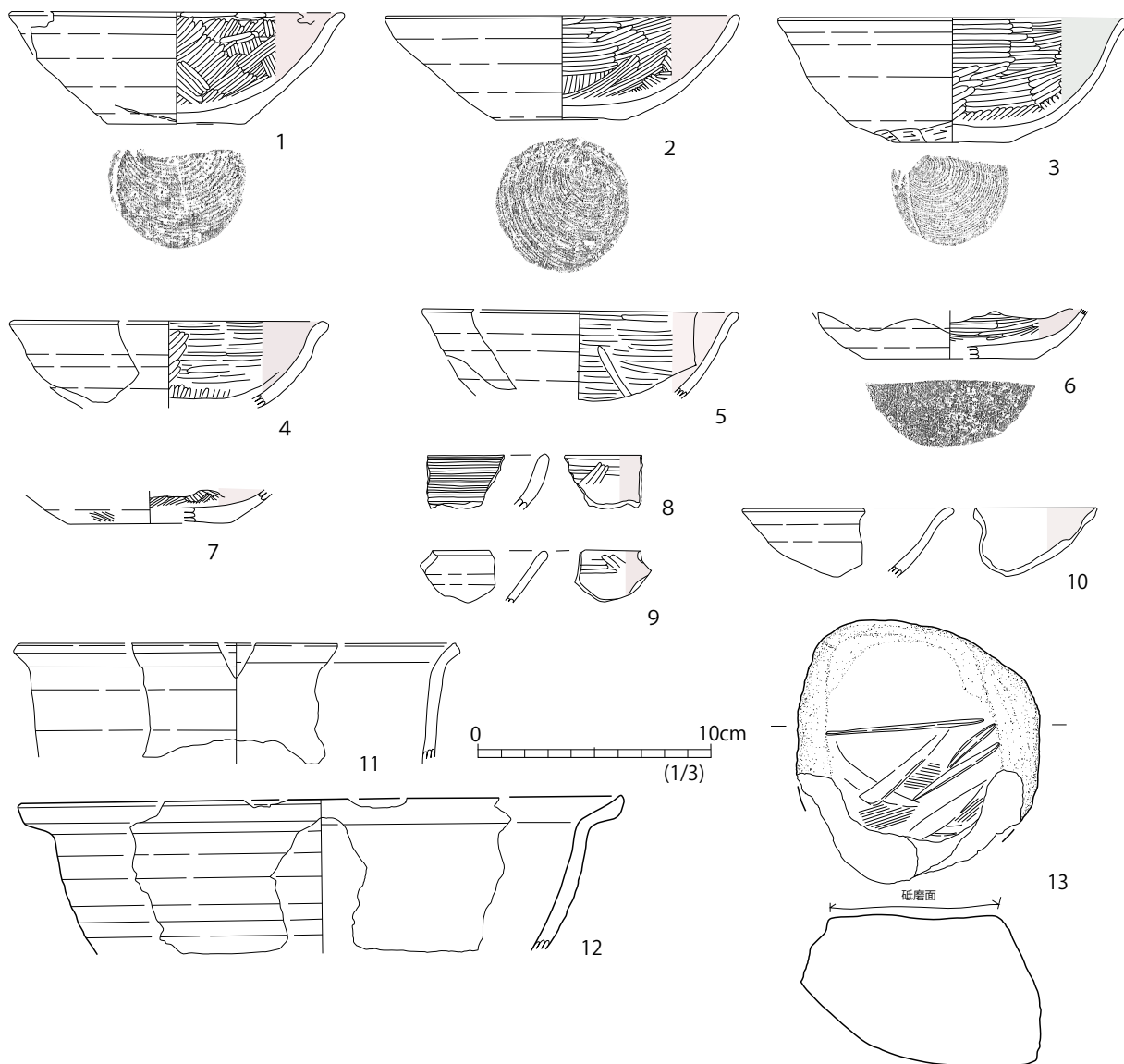
8. 古代の遺物

前述の遺構以外のピットや包含層からも古代の土師器や砥石が出土している (第 44 図)。土師器のほとんどがロクロで製作されたものであり、中でも坏は内面がヘラミガキ・黒色処理で、底部が回転糸切りで切り離された後に再調整が施されないものである。器形を含めた特徴から 9世紀後半から 10 世紀前半頃のものと思われる。詳述しなかったこれらのピットなども多くは平安時代前半以降のものと考えられる。

9. その他の遺物 (第 45 図)

(1) 縄文土器：図示できたのは 3点である。1は口縁部外面に縦位、斜位の刺突や沈線が施文されているもので、胎土の植物繊維の有無は確認できなかったが、類例は川崎町西林山遺跡 (手塚・相原ほか 1987) などにあり、前期初頭の上川名 II 式に相当するものと考えられる。2は口縁部に B突起が施されており、晩期前葉の時期と考えられる。

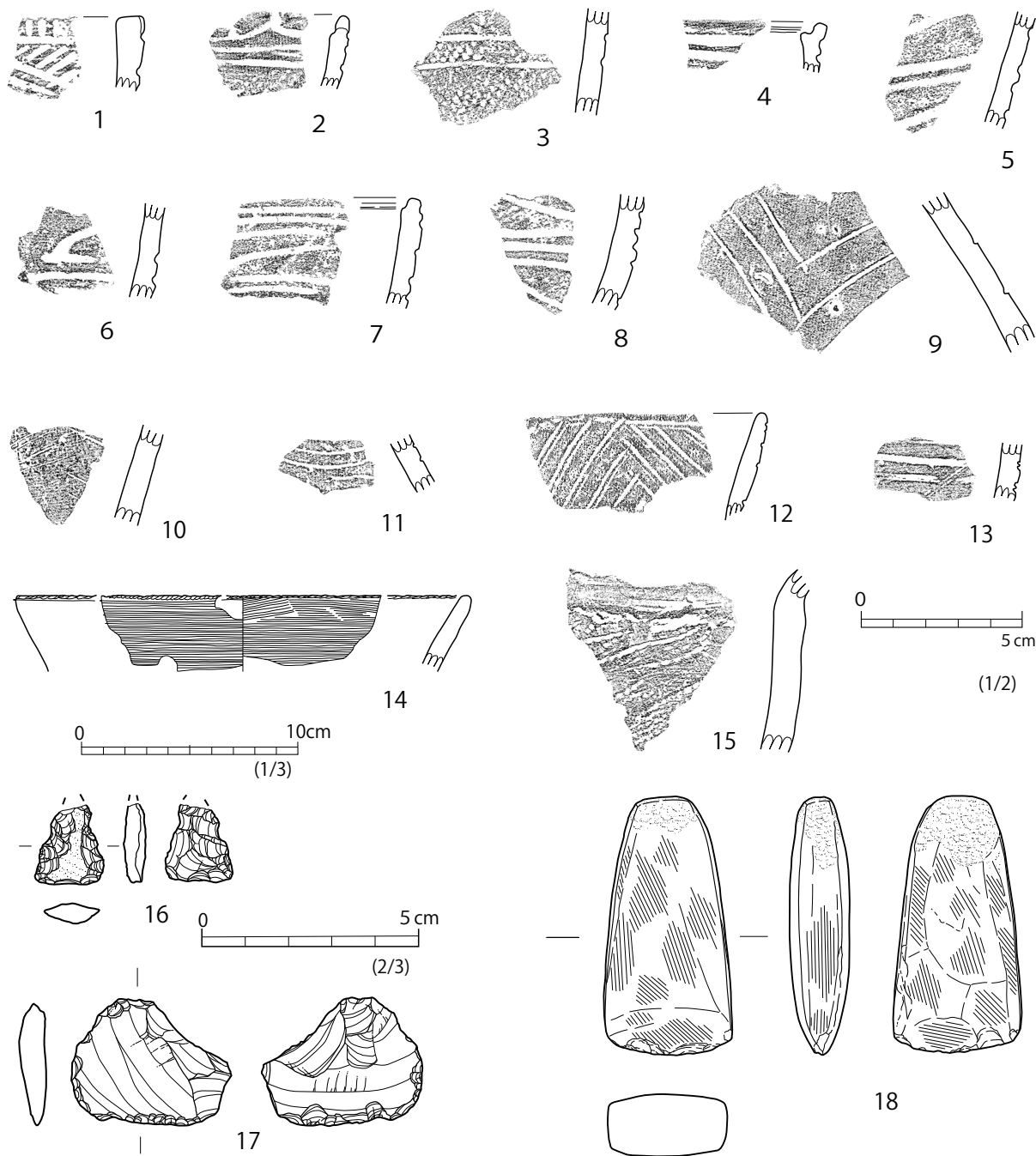
第IV章 発見された遺構と遺物【2次調査】



番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 杯	包含層	ロクロナデ・底部回転糸切り、再調整なしヘラミガキ・黒色処理	全体の1/3	14.4	6.0	4.8	C-9	21-1
2	土師器 杯	ビット	ロクロナデ・底部回転糸切り、再調整なしヘラミガキ・黒色処理	口縁部1/2、他は1/1	15.2	5.7	4.5	C-10	21-2
3	土師器 杯	ビット	ロクロナデ・軽いケズリ・底部回転糸切り、再調整なしヘラミガキ・黒色処理	全体の1/3	15.0	5.0	5.4	C-11	21-3
4	土師器 杯	ビット	ロクロナデーヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/5	(13.6)	—	—	C-12	21-4
5	土師器 杯	ビット	ロクロナデーヘラミガキ・黒色処理	口縁部～体部1/7	(13.6)	—	—	C-13	21-5
6	土師器 杯	ビット	ロクロナデ・底部回転糸切り後、周囲ナデーヘラミガキ・黒色処理	体部下半～底部1/3	—	7.3	—	C-14	21-6
7	土師器 杯	ビット	ロクロナデ・底部回転糸切り、再調整なしヘラミガキ・黒色処理	底部1/3	—	7.0	—	C-15	21-7
8	土師器 杯	ビット	ヨコナデーヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	—	—	—	C-16	21-8
9	土師器 杯	ビット	ロクロナデーヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	—	—	—	C-17	21-9
10	土師器 杯	ビット	ロクロナデーヘラミガキ・黒色処理	口縁部破片	—	—	—	C-18	21-10
11	土師器 甕	ビット	ロクロナデーロクロナデ	口縁部破片	(18.6)	—	—	C-19	21-11
12	土師器 鉢	包含層	ロクロナデーロクロナデ	口縁部破片	(26.0)	—	—	C-20	21-12

番号	種別	遺構・細部	特徴	残存	法量 (cm, g)				登録番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ	重さ		
13	砥石	ビット	礫の一面を砥面している。砥面には線条痕や擦痕が認められる。石材は不明だが、粒子の荒い石材で荒砥用の砥石とみられる。	一部欠損	(11.3)	10.4	6.4	(1030.0)	Kc-2	21-13

第44図 2次 その他の古代の遺物



番号	種別	遺構・細部	特徴	残存	登録番号	写真図版
1	縄文土器 深鉢	SK09 堆積土	外面-縦位、斜位の刺突や沈線 内面-ナデ	口縁部破片	A-1	22-1
2	縄文土器 鉢	SK18 堆積土	外面-B突起 沈線 LR縄文	口縁部破片	A-2	22-2
3	縄文土器 深鉢	SI02 堆積土	外面-沈線 LR縄文 内面-ミガキ 弥生土器の可能性もあり	体部破片	A-3	22-3
4	弥生土器 鉢	1号方形堅穴遺構	外面-太目の沈線 内面-ミガキ	口縁部破片	B-1	22-4
5	弥生土器 鉢	SI07 堆積土	外面-太目の沈線 内面-ミガキ	体部破片	B-2	22-5
6	弥生土器 鉢	SK09 堆積土	外面-太目の沈線で変形工字文風の文様 内面-ミガキ	体部破片	B-3	22-6
7	弥生土器 鉢	SX01 堆積土	外面-沈線で変形工字文 内面-ミガキ	口縁部破片	B-4	22-7
8	弥生土器 鉢	SK22 堆積土	外面-磨消縄文(LR縄文) 内面-ミガキ	体部破片	B-5	22-8
9	弥生土器 壺	SK18 堆積土	外面-一本描の細沈線、同心円文か 粗痕らしき圧痕あり	体部破片	B-6	22-9
10	弥生土器 鉢	SB03 P3 堆積土	外面-一本描の細沈線 内面-ミガキ	体部破片	B-7	22-10
11	弥生土器 壺	1号方形堅穴遺構	外面-二本描の細沈線	体部破片	B-8	22-11
12	弥生土器 鉢	1号方形堅穴遺構	外面-二本描の細沈線による山形文 内面-ナデ、一部ミガキ	体部破片	B-9	22-12
13	弥生土器 鉢	SK18 堆積土	外面-二本描の細沈線	体部破片	B-10	22-13
14	弥生土器 甕	ビット	外面-ヨコナデ、口縁端部にLR縄文 内面-ヨコナデ、ナデ	口縁部破片	B-11	22-14
15	弥生土器 甕	SD07 堆積土	外面-ヨコナデ、結節縄文LRに付加条R 内面-ミガキ	体部破片	B-12	22-15

第45図 2次 縄文土器・弥生土器・石器実測図

第IV章 発見された遺構と遺物【2次調査】

番号	種別	遺構・細部	特徴	残存	法量 (cm, g)				登録番号	写真図版
					長さ	幅	厚さ	重さ		
1	石鏃	SI07 堆積土	無茎 平基 自然面残す 未製品か 黒曜石	一端欠損	(1.8)	1.6	0.5	(1.2)	Ka-1	22-16
2	不定形石器	SI02 堆積土	横長剥片の一边を折断 その他の縁辺に二次加工 頁岩	完存	2.8	3.7	0.6	6.3	Ka-2	22-17
3	磨製石斧	SK15 堆積土	定角式石斧 製作時の痕跡として敲打痕や擦痕が認められる。	完存	7.9	4.0	1.9	105.0	Kb-1	22-18

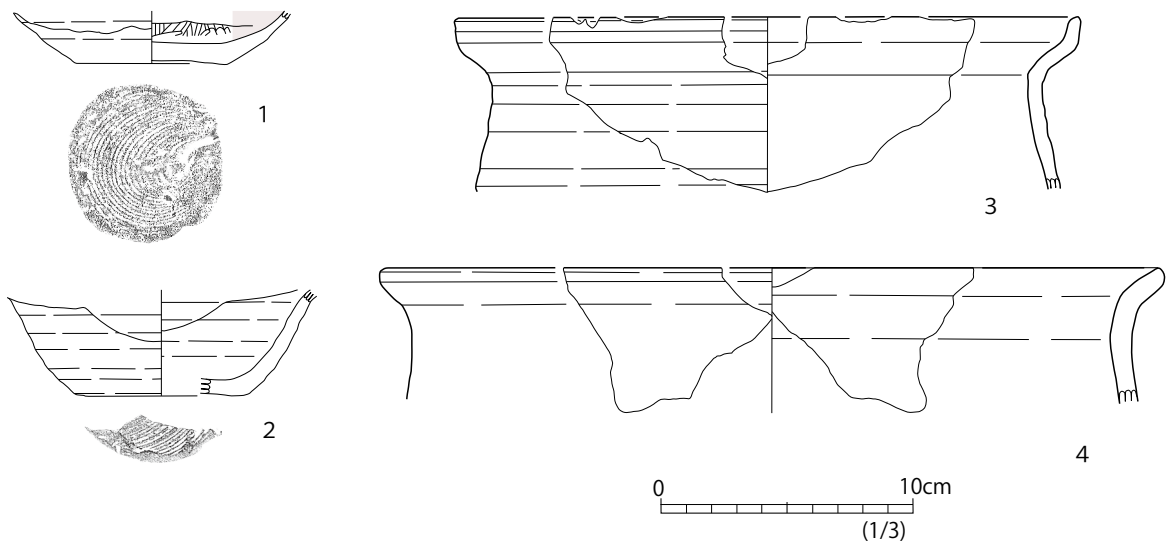
(2) 弥生土器：図示できたのは12点である。4～8は太目の施文具で横位の沈線や変形工字文が施文されており、前期末から中期前葉にかけてのものと推定される。9～10は細い施文具で円文か渦巻文が描かれており、中期中葉から後葉頃の円田式に相当するものと考えられる。9の外面には靱か靱殻らしい圧痕が確認される。11～13は二本描きの細い施文具で連弧文や山形文が描かれており、中期後葉の十三塚式に相当するものと考えられる。14・15は中期後半の円田式か十三塚式に伴う可能性が考えられる。

(3) 石器：図示できたのは石鏃1点、不定形石器1点、磨製石斧1点である。石鏃は黒曜石を素材としており、形状から未製品か欠損品と推定される。磨製石斧は完存品で、定角式石斧である。表面には敲打痕や擦痕などの製作時の痕跡が確認される。

〈下段調査区〉

1. 堀跡(1号堀跡)

下段調査区では、地層断面、および平面的な精査で1条の堀跡の存在を確認した。しかしながら堀跡の丘陵側の上端のラインは検出できたものの、対する南側の上端については平面的に検出できなかった。そのため下端も含めて断面図から復元している。堀跡は丘陵の傾斜に直交して構築されており、おおよそ上端幅は約3.8m、下端幅は約2.0m、深さは0.9mの規模をもつ。北側は堆積土と地山を掘削し、南側は低地部の堆積土を掘り込んでいる。全体のプランは不明であるが、丘陵の裾部を巡るものと推定される。堀跡に伴う遺物については明確ではないが、堀跡が切っている下段調査区の基本層からは後述の通り土師器や須恵器などが出土しており、堀跡の時期は平安時代前半以降と考えられる。



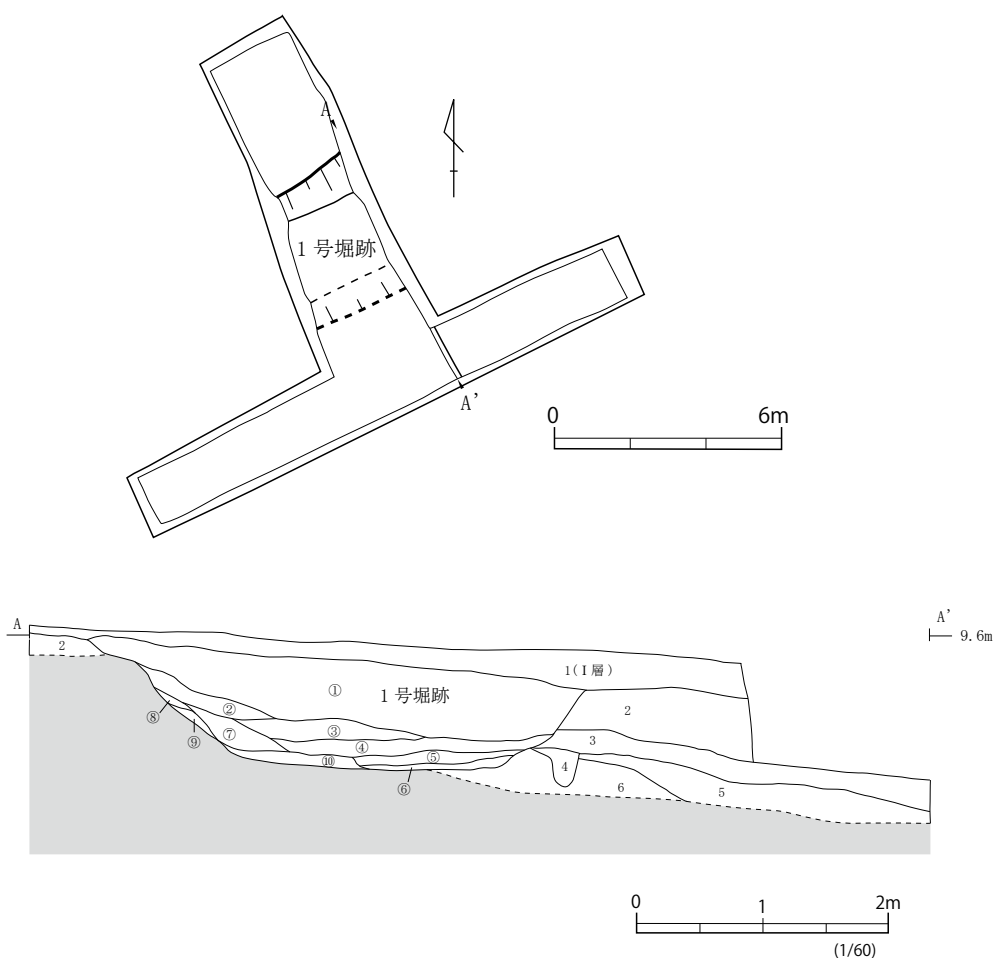
番号	種別	遺構・細部	外面・内面調整など	残存	法量 (cm)			登録番号	写真図版
					口径	底径	器高		
1	土師器 坏	1 T 黒色土直上	ロクロナデ・底部回転糸切り、再調整なしヘラミガキ・黒色処理	底部1/1	—	6.1	—	C-21	21-14
2	須恵器 坏	下段 T 表土	ロクロナデ・底部回転糸切り、周囲手持ちヘラケズリ-ロクロナデ	体部～底部1/4	—	6.5	—	E-4	21-17
3	土師器 甕	1 T 黒色土直上	ロクロナデ-ロクロナデ	口縁部～体部上方破片	(24.8)	—	—	C-22	21-15
4	土師器 甕	1 T 黒色土直上	ロクロナデ-ロクロナデ	口縁部～体部上方破片	(30.6)	—	—	C-23	21-16

第46図 2次 下段調査区出土遺物



## 2. 下段調査区出土遺物

基本層から土師器・赤焼土器・須恵器が出土しており、その中の土師器3点と須恵器1点が図示できた（第46図）。土師器の坏は内面がヘラミガキ・黒色処理で、底部は回転糸切り・無調整のものである。須恵器は底部が回転糸切りで、周囲が手持ちヘラケズリの再調整が施されている。これらはおおよそ平安時代前半の時期のものと考えられる。



1号堀跡土層注記

層No.	土色	土質	備考
①	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	凝灰岩小塊を多量、黄褐色粘土粒、炭化物を微量含む。
②	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	しまりやや強い。
③	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	凝灰岩小粒、焼土粒、炭化物を少量含む。しまりやや強い。
④	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	凝灰岩小塊をやや多く、焼土粒、炭化物を微量含む。しまりやや強い。
⑤	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	黒褐色砂を少量、褐色粘土粒を微量含む。
⑥	黒褐色 (10YR3/1)	砂	厚さ2mm程度の暗褐色粘土層との互層。砂は細～微粒砂
⑦	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	褐色粘土ブロックをやや多く含む。
⑧	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	褐色粘土粒、焼土粒、炭化物を微量含む。
⑨	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	灰白色粘土粒を少量含む。褐色粘土粒を微量含む。
⑩	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	褐色粘土粒をごく微量含む。

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	I層 耕作土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	橙色粘土小粒、炭化物を少量含む。
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	土師器片を混入。凝灰岩小粒を微量含む。
4	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	黄褐色粘土粒を微量含む。
5	黒褐色 (10YR2/2)	粘質シルト	橙色粘土粒、炭化物を微量含む。土器片少量混入。
6	暗褐色 (10YR3/3)	粘質シルト	凝灰岩小粒を極めて微量含む。

第47図 2次 1号堀跡

## 第V章 総括

### 1. 出土遺物について

1次・2次調査合わせて、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などの土器と中世の青磁、石器・石製品が出土しているが、量的にはテンバコにすると10箱にも満たない量である。以下、これらの中の特筆される点に絞って詳述したい。

#### (1) 縄文土器

早期後葉から前期初頭にかけての土器破片が8点出土している。これらは、①内外面に貝殻条痕文が施文されるもの(第20図1・2)、②外面に縄文、内面に貝殻条痕文が施文されるもの(第20図3・4)、③外面に撚糸文やその圧痕が施されるもの(第20図5~7)、④口縁部外面に刺突や沈線が施文されるもの(第42図1)に分かれる。①は早期後葉前半段階に位置づけられるセキ浜町吉田浜貝塚の下層土器、岩沼市鶴ヶ崎城跡Ⅱ群土器に類例があり、後者では沈線による円文や三角文が配されるなどの特徴から鶴ヶ島台式に比定されている。②は早期後葉の後半段階に位置づけられる石巻市梨木畑貝塚出土土器、岩沼市鶴ヶ崎城跡Ⅲ群土器に類例があり、梨木畑式に比定される。③は吉田浜貝塚上層土器に類例があり、おおむね早期末頃に比定される。④は川崎町西林山遺跡(手塚・相原ほか 1987)から出土した深鉢の口縁部文様に近似し、前期初頭の上川名Ⅱ式に比定される(相原 1990)。

岩沼市域では早期後葉の土器が鶴ヶ崎城跡の包含層からまとまって出土しており、現在のところ、岩沼市では最古の縄文土器となっている(川又 2005)。熊野遺跡でも発見されたことにより、今後の発見例が増加するものと考えられる。

#### (2) 弥生土器

土器破片が43点出土している。これらには、①太目の施文具で横位沈線、変形工字文が施文されるもの(第21図1~3)、②細い施文具で横位沈線や円文・渦巻文などが描かれるもの(第21図5~17)、③二本描きの細い施文具で山形文波状文などが描かれるもの(第21図18~21)などの特徴がみられる。①は名取市の十三塚遺跡(恵美 1979)や原遺跡(大友・福山 1997、大友・鶴崎 2000)などに類例があり、前期末葉から中期前葉に相当する時期のものともみられる。②は細い一本施文具による文様を特徴とする一群で、蔵王町の西裏遺跡出土の円田式土器とほぼ共通する(伊東 1957)。こうした特徴の土器については分布範囲や前後型式との関係など不明な点が多く、一型式として独立させられるかはまだ確定していない。中期中葉から後葉にかけての時期に位置づけられる。③は細い二本施文具による文様を特徴とする一群で、名取市十三塚遺跡出土土器を標識に設定された十三塚式と共通する(伊東 1957)。沈線間の幅には広狭が認められ、時期差を示すことも推定される。十三塚式期の遺構は名取市泉遺跡で竪穴建物跡、土壇墓が発見されており(鶴崎・大友ほか 2010)、また岩沼市鶴ヶ崎城跡からもこの時期の可能性のある竪穴建物跡が1軒確認されている。一部のみの検出だが、平面形は円形とみられ、大きさは3.5m以上であり、床面からは地床炉が検出されている(川又 2005)。

#### (3) 1次 3号竪穴建物跡(SI03)出土の古墳時代の土器(第13図・第48図)

この建物跡からは14点の土師器が出土しているが、うち1点は明らかに時期の異なる後出の土器であり、それを除くと全て古墳時代前期の塩釜式に位置づけられるものである。その特徴としては、①器種には坏、

高坏、器台、台付鉢、壺、甕などがある、②坏には多様な器形がみられ、小型で平底の坏と凹底の小型丸底坏がある。また前者には口縁部が外傾するものと無頸のものがあり(第13図3・5)、後者では大きさに明らかな差異がみられる(第13図1・4)。③器台は受け部が直線的に、脚部が「八」の字状にわずかに開くもので、脚部には4個の円窓を持っている(第13図7)。④壺は直口壺で、口縁部が直線的に外傾し、口縁部よりも体部の器高が大きいものである(第13図9)。⑤甕は口縁部が「く」の字に屈曲し、体部が球形をなす(第13図13)、などがあげられ、このほかに台付鉢が伴うこと(第13図8)、整形にハケメ調整が多用されることなどを加えることができる。こうした特徴は塩釜式でも比較的古い段階のものにみられ、類例として岩沼市北原遺跡19号住居跡(小村田ほか 1993)、名取市野田山遺跡10号住居跡(須田・吾妻ほか 1992)、同じく野田山遺跡第5号住居跡(窪田 2002)などがあり、丹羽編年(丹羽 1985)の第I～第IIA段階、青山編年(青山 2010)の塩釜1～2(古)式に該当するものと考えられる。

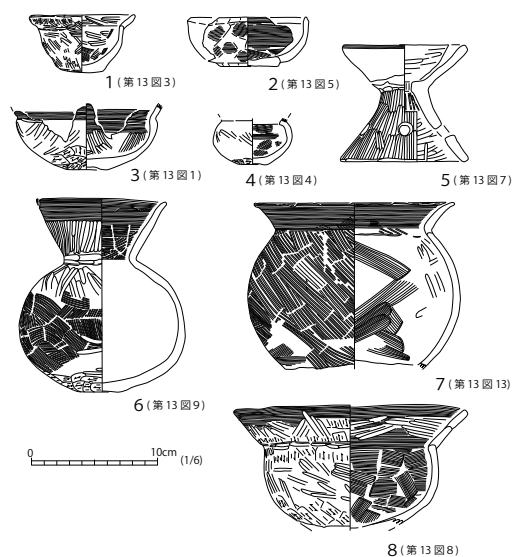
塩釜式のこれらの段階の遺跡には岩沼市域では北原遺跡、孫兵衛谷地遺跡があり、周辺では名取市の十三塚遺跡、野田山遺跡、亘理町の宮前遺跡などがある。

#### (4) 1次 1号竖穴建物跡(SI01)出土の飛鳥時代の土器(第9図)

この建物跡からは7点の土師器が出土しており、これらは以下の理由から7世紀の後半頃の時期のものと考えられる。坏と甕があり、坏は2点とも有段丸底で体部下方か下位に段を持つものである。内面はヘラミガキ・黒色処理されており、内面の屈曲はわずかか、またはみられない。甕は外面頸部に段を持つものと持たないものがあり、持つものはハケメ調整、持たないものはヘラナデ調整が施されている。前者の底部には木葉痕が確認される。

東北地方の土師器編年では、7世紀を中心とする時期を栗罎式と呼称している。形式の特徴として坏では7世紀前半には前段階より底部の丸みが弱くなり、器高も低くなることが示されている。特に7世紀後半になると口縁部が短くなって底平となり、皿形化が進行し、それに伴い内外面の段や稜が弱くなり、段の位置も下位に移行する。こうした傾向は8世紀へと続くが、この変化は成形技法や調整の変化に伴うものとされている。また甕では頸部の段が7世紀代には特徴的に認められる。これも体部上端に口縁部の粘土紐を積み上げる際の成形の接合技法と関わっている。しかしこの頸部の段も8世紀以降にはほとんど認められなくなるという(村田 2007)。

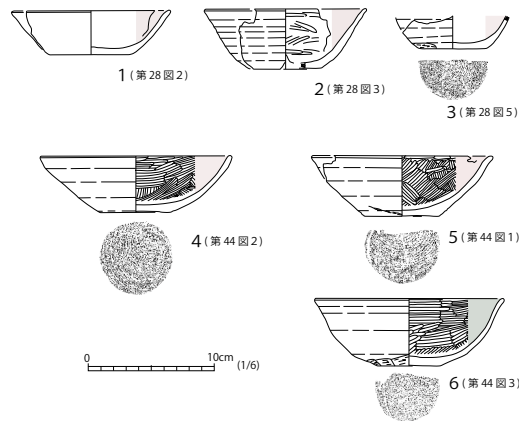
以上の坏や甕の変遷からみると、本資料は村田編年の4段階、7世紀後半頃にほぼ位置づけられる。類例には蔵王町塩沢北遺跡第1・2号住居跡出土土器(小川 1980b)が挙げられる。このような7世紀後半頃の土師器は、岩沼市域では古代の玉前駅家・剱に関連するとして注目されている原遺跡から確認され、また本遺跡の南方、南西方に所在する長谷寺横穴墓群や丸山横穴墓群、二木横穴墓群、土ヶ崎各横穴墓群からも出土している。



第48図 古墳時代の土師器

(5) 平安時代の土師器 (第28図・第44図・第49図)

主に2次調査で出土した土師器・赤焼土器・須恵器がある。土師器には坏と甕があり、製作にロクロが用いられており、東北地方における土師器編年の表杉ノ入式に比定される(氏家 1957)。坏は器形や製作技法などから①底部から口縁部にかけて直線的に開くもので、底部は回転糸切りなどで切り離され、その後に手持ちへラケズリの再調整が施されるもの(第28図2・3・5)、②底部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、底部は回転糸切り後に無調整のもの(第44図1~3)、の2者に大別できる。これらを口径と底径の割合からみると、①は小さく、②が大きくなる。なお、②の口縁部は、そのまま開くものと口縁端部が外反するものがある。



第49図 平安時代の土師器

①の類例には白石市青木遺跡第21号住居跡出土土器(小川 1980)など数多くある。村田氏土器編年の2群土器にはほぼ該当し、ロクロ土師器が一般集落に広く普及する9世紀前半頃の土師器と考えられる。②の類例には蔵王町東山遺跡土器溜(真山 1981 a)、白石市家老内遺跡第1・2号住居跡出土土器(真山 1981 b)などがあり、9世紀後半頃の村田氏土器編年(村田 1994)の3・4群土器にはほぼ該当する。この時期になると底部から内弯気味に立ち上がり、口縁端部が外反する碗形坏のタイプが出現し次第に主体となる。こうした特徴は灰釉陶器などの施釉陶器の形の模倣によるとの指摘がなされている(村田 1994)。

なお、数は少ないが赤焼土器が出土している。図示した第38図2も器形は前述の②に類似しており、ほぼ同時期のものと推定される。

2. 遺構について

(1) 竪穴建物跡

竪穴建物跡は1・2次調査合わせて12棟検出された。しかしその多くは削平により遺存状況が悪く、建物跡の一部のみが検出されたにすぎない。時期が確認できた建物跡は、古墳時代前期-1次 SI03、古墳時代前期~中期-1次 SI04、飛鳥時代後半(7世紀後半頃)-1次 SI01、2次 SI01、平安時代前半(9世紀代)-1次 SI02、2次 SI02、SI03、SI07 である。

古墳時代前期の1次 SI03 は平面形が隅丸方形、規模が一辺5m強で、南半部から検出された柱穴から対角線上に4個の支柱穴が存在していたものと推定される。炉跡は確認されなかったが、貯蔵穴が床面南東部から検出された。当該時期の竪穴建物跡は、北東約0.7kmに所在する北原遺跡から36棟が検出されている。それらの特徴は、①丘陵の頂部からやや下がった斜面にかけて立地する。②平面が方形基調で、規模は一辺が4~6mが平均値である。③支柱穴は対角線上に4個持つものと柱穴が持たないものがあり、持つものは規模が平均以上のものに多い。④貯蔵穴は8割近い建物跡から確認され、その位置は南東部が大半である。南側が入口に想定される可能性が高いことから、入口側に造られていたことになる。

1次 SI03 はこれら北原遺跡の例と共通する点が多く、この地域の当該期における竪穴建物の主要なタイプと考えることができる。

飛鳥時代後半の1次 SI01 は平面形が方形、規模が一辺3.5m前後で、北壁中央にカマドが設けられてい

る。柱穴は確認されなかった。2次 SI01 は平面形が歪んだ方形を呈し、規模が一辺4mほどで、北壁中央にカマドが設られている。柱穴は対角線上で4本の支柱穴が確認された。この建物跡のカマドでは凝灰岩を板状に加工した高架材が確認された。類例には岩沼市原遺跡3次調査の3号竪穴建物跡がある(川又・永井ほか 2019)。原遺跡の建物跡では凝灰岩とみられる石材を扁平な角状に整形した高架材が、2次 SI01 と同様にカマド両側壁を繋ぐ状態で検出されている。この建物跡の時期は6世紀後半頃であるが、7世紀にかけてこのようなカマド構築方法が散見される。

平安時代前半(9世紀代)の1次 SI02 は平面形が方形、規模が一辺 4m 弱で、北壁中央にカマドが設られており、貯蔵穴が確認されている。2次 SI02、SI07 は平面形が方形、規模が一辺 4m 前後で、北壁中央にカマドが設られており、ともにカマド周辺で貯蔵穴が確認されている。

## (2) 方形竪穴遺構

方形竪穴遺構は2次調査で1棟検出されている。平面形は長方形、規模は南北 3.90 m、東西 2.32 m で、柱穴は5個確認された。柱穴は深さなどから、北辺1個、南辺3個は支柱、中央は補助的な柱と推定される。床面は地山を床としている。壁際には周溝が巡り、床面中央の南寄りからは2個の焼面が確認された。時期は鎌倉時代後半の 13 世紀後半頃である。

方形竪穴遺構は中世集落を構成する一つの建物型式で、特に鎌倉をはじめとした東日本の中世遺跡で数多く発見され、「住居」「倉庫」「工房」などの性格が考えられているものである(小野ほか 2001)。宮城県内ではこれまで 10 遺跡近くから中世頃の類似する遺構が確認されている。これらは主に方形か長方形のプランを持ち、規模は一辺が3~4mのものが多い。しかしながら各遺構には柱穴の有無、出入口の有無、床面の焼面の有無など、種々の点で相違もみられる。性格の推定では、栗原市観音沢遺跡の平面形が方形を基調とする例は出入口のあるものもないもの、柱穴のあるものもないものも含めて、貯蔵の機能を有する半地下式の土倉跡ではないかと考えられている(加藤・阿部 1980)。これと同じく貯蔵施設の可能性が推定されている例に仙台市の富沢遺跡第 77 次(五十嵐 1992)と山口遺跡第 10 次(中富 1991)がある。ただし、これらの例では柱穴は確認されていない。また大和町下草古城跡(天野 1996)では羽口や鉄滓などが出土することから、鍛冶に関連した遺構の可能性が考えられている。また仙台市王ノ壇遺跡(小川・高橋 2000)では、柱穴を持つ竪穴建物跡とされている遺構の中に長軸が 7.7 m、短軸が 3.1 m の規模の大きい例があり、床面から還元面をもつ焼面が確認され、羽口や鑄鉄半製品などが出土していることから、鑄鉄鑄物の工房での可能性が考えられている。川崎町本屋敷遺跡(古川ほか 1986・1987)で検出された遺構は、掘立柱建物群付近に点在しており、中には焼面を伴う例もいくつかみられる。これらは掘立柱建物に付属する施設とされている。このようにこれまでの県内の発見例では主に貯蔵施設、工房、建物の付属施設などが遺構の性格として推定されている。

こうした類例の中で本例は柱穴があり、床面に焼面を持つことが大きな特徴である。柱を有する点では上屋構造を持つ建物であること、焼面という火処を有する点では生活や活動に関わる遺構と考えられ、「住居」や「工房」に関わる性格が推定される。「住居」に関わるものとしては居住の場、厨などの付属施設があるが、後述するようにこの遺構の南東側からは掘立柱建物跡の他に多数の土坑やピットが検出されている。これらの遺構に伴うとすれば、居住の場よりも付属施設の可能性が高くなる。また「工房」については鍛冶や鑄造などに関わる遺物は出土していないことから、それ以外の工房や作業屋としての利用が想定できる。

## (3) 掘立柱建物跡・柱穴列・性格不明遺構・土坑・溝跡・堀跡

2次調査の全域から6棟の掘立柱建物跡が、調査区南東部を中心に2列の柱穴列、2基の性格不明遺構、

24基の土坑、8条の溝跡、多数のピットが、下段調査区から1条の堀跡がそれぞれ検出された。南西部から検出されたSB01～SB05は平安時代の竪穴建物跡と方向性が近く、柱掘方は一辺50cm以上の略方形をなしており、遺物からも平安時代前半頃の遺構と考えられる。これに対し南東部の遺構では、土坑のいくつかは堆積土出土の遺物から平安時代前半頃の時期と考えられるが、それ以外は遺物では遺構検出作業中、およびいくつかの遺構堆積土から平安時代の土師器、須恵器などが出土しているものの、時期的には平安時代かそれ以降と考えられる。そして近世以降の遺構や遺物が皆無であることなどからその下限は中世頃と推定される。南東部の遺構のSB06、SA01・02、SX01・02や付近のピットについて検討すると、①平安時代前半頃の竪穴建物跡よりも中世の方形竪穴遺構と方向性がほぼ一致していること、②南東部の掘立柱建物跡や柱穴列の柱穴の掘方および多数のピットの平面形が円形で、大きさが南西部の掘立柱建物跡の柱穴に比較して極めて小さいこと、③平安時代前半のSI07を切っているピットが多数みられること、などから方形竪穴遺構に伴う中世の遺構群の可能性も考えられる。これらを判断材料とすると掘立柱建物跡周辺は居住の場、方形竪穴遺構はそれに付属する施設か工房の可能性も考えられる。なお、SX02とSB06は位置関係や共通する方向性から同一遺構の可能性があり、SX02は傾斜の高い北側を削って平坦にし、その後SB06を構築したものと推測される。類似する例に名取市賽ノ窪古墳群の中世に相当する遺構群がある(北條 2016)。ここでは傾斜の高い西側に壁や溝を巡らし、その東側に掘立柱建物を数棟構築している。

下段調査区で確認された1号堀跡は平安時代の基本層を掘り込んでおり、平安時代前半以降の遺構と考えられる。上幅が4m近いこと、深さ1m以上推定されること、丘陵裾部を巡る可能性が考えられるなどから、岩沼市域で発見されている下野郷館跡の中世の大溝跡(川又・永井ほか 2018)のように、中世段階の遺構の可能性も考えられる。

### 3. 各時期の集落

1・2次調査区域は面積的に遺跡全体のごく一部に過ぎない。また西側の頂部および東側の平坦面については未調査であり、その実態は不明である。このことを踏まえた上で各時期の集落の概要について述べたい(第48図)。

#### (1) 古墳時代

東側の緩斜面から前期、および前期から中期にかけての竪穴建物跡がそれぞれ1棟ずつ検出された。遺跡全体の状況は不明だが、南側の緩斜面からは発見されていないことから大規模な集落を形成していたとは考えにくい。前述したように、北東約0.7kmに所在する北原遺跡からは、古墳時代前期の竪穴建物跡が36棟検出されている。さらにその東側にも同時期の遺構が広がることが確認されており、長岡丘陵に広範囲にわたる規模の大きい集落跡が存在したことが明らかとなっている(岩沼市 2018)。これに対し、熊野遺跡の前期集落は小規模な集落が想定され、北原遺跡のような大集落の周辺に散在する小集落の姿を示しているものと考えられる。

#### (2) 飛鳥時代

東側と南側緩斜面から1棟ずつの飛鳥時代後半頃の竪穴建物跡が確認された。この時期の遺跡には、古代東山道に関わる玉前駅家および玉前割ではないかと注目を集めている原遺跡がある。遺跡は熊野遺跡の南方約4kmに所在し、これまで3次にわたる調査により多数の掘立柱建物跡や竪穴建物跡のほかに、材木堀、大溝などが発見されている。第3次調査で発見された遺構は大きく3期に分けられ、8世紀前半以前のI期は真北から西に大きく傾く材木堀や大溝など、II期はほぼ真北方向の大型の掘立柱建物跡など、III

期は8世紀末以降の竪穴建物跡などで、それぞれ構成されている。その中心的な時期がⅡ期であり、真北を強く意識した大型の建物群は古代国家が設置した官衙施設の可能性を高めている。Ⅰ期の中でも6～7世紀はⅡ期の遺構群へと移行する上で、先行する重要な段階、時期と考えられる。この段階にすでに太平洋や阿武隈川の水上交通や物流を支配し、渡河を管理するような豪族の集落がこの地に存在していたのではないかとの指摘（白鳥 2018b）もある。

また同じく7世紀を中心とした時期に、岩沼市域の二木・朝日丘陵斜面には数多くの横穴墓群が造営されている。その中で調査されている64基の横穴墓から、形状では玄室内の造り付け石棺などの付帯施設が多くみられること、副葬品では横穴墓により種類の多様性と偏りなどがみられ、須恵器では袋物が多くその中には東海地方産のものが多く含まれること、などが特徴として挙げられている。これら横穴墓の造営者や被葬者については前述の原遺跡の調査により、官衙成立に関わった在地首長層や官衙施設に関わった人々の関与が想定できるようになってきた（川又 2018）。

熊野遺跡で発見された飛鳥時代後半の竪穴建物跡はこうした岩沼市域での政治的な動向と少なからず関わりを持った集落と考えられる。

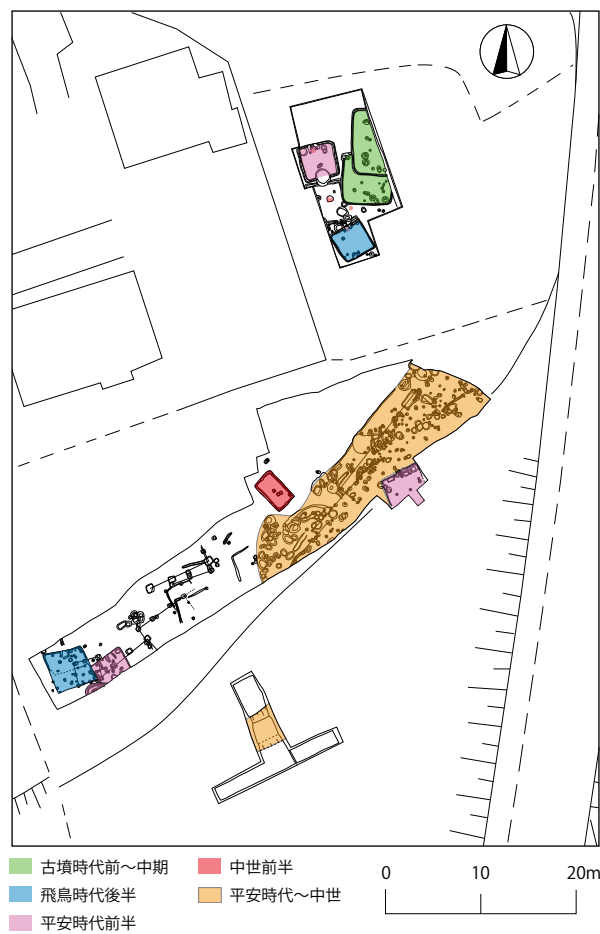
### (3) 平安時代

東側の緩斜面から1棟、南側の緩斜面から3棟の平安時代前半頃の竪穴建物跡が確認された。また2次調査区の南西部から発見された規模の大きい柱掘方をもつ掘立柱建物跡や1次・2次の土坑の多くもこの時期の可能性が考えられる。岩沼市内の平安時代の遺跡には前述の原遺跡、北原遺跡などがあり、竪穴建物跡が発見されている。特に原遺跡では竪穴建物跡が溝に区画されて数多く検出されており、官衙施設に関わる一区域の可能性が考えられる。北原遺跡では1棟の竪穴建物跡が確認されている。熊野遺跡は、原遺跡のような官衙に関わる区域ではなく、北原遺跡と同じように一般的な集落跡と考えられる。

熊野遺跡や北原遺跡のある岩沼市三色吉地区から長岡地区は、10世紀後半の『和名類聚抄』に記載されている古代名取郡を構成する7つの郷の中の、指賀郷に比定される範囲に含まれる（永田 2018）。両遺跡で発見された竪穴建物跡などはこの指賀郷を構成する人々の居住の場と考えられる。

### (4) 中世

中世の遺構には1号方形建物遺構と、可能性のある遺構として2次調査区南東部の遺構群がある。また下段調査区の堀跡も中世の可能性が考えられる。上段では南東部の掘立柱建物跡が居住の場、方形竪穴遺構はそれに付属する施設か工房とも推定されるが、方形竪穴遺構に伴う遺構群全体が明らかではないことか



第 50 図 時期別遺構分布

ら、用途、性格については断定を避けたい。

熊野遺跡周辺の中世関係の遺跡としては北西約 200 mの中ノ原遺跡がある。ここには基壇状の高まりの上には2基の板碑が存在し、その一つの板碑下部からは火葬骨が埋納された在地産の中世陶器壺が出土している。このほかにも火葬骨を伴う陶器片が発見されており、蔵骨器が埋納された上にその墓標として板碑が建立されたことが明らかになっている（川又・熊谷 2009）。この中ノ原遺跡の時期は方形竪穴遺構と同じく鎌倉時代後半であり、両者は密接に関係し、この時期の居住域であった熊野遺跡の墓所や信仰関係の場であったものと推測される。

#### 4. まとめ

- ① 熊野遺跡は岩沼市三色吉字熊野、水神、雷神、梅に所在し、岩沼西部丘陵から東に派生する低丘陵の頂部から裾部にかけて立地している。調査地点はその緩斜面にあたり、標高は 10 ～ 13 mである。
- ② 2次にわたる調査で、竪穴建物跡が 12 棟（古墳時代前期1棟・前期～中期1棟、飛鳥時代 後半2棟、平安時代前半4棟など）、方形竪穴遺構が1棟（鎌倉時代後半）、掘立柱建物跡が6棟（平安時代～中世）、柱穴列が2列（中世？）、性格不明遺構が2基（中世？）、土坑が 34 基（主に平安時代）、溝跡が8条（平安時代～中世）、堀跡（中世？）が1条検出された。
- ③ 遺物としては縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、青磁、石器、石製品などがあり、この遺跡が縄文時代早期後葉から中世までの長期間の中で、主に居住の場としてたびたび利用されていたことがわかった。
- ④ 縄文時代では早期後葉、前期前葉、中期、晩期、弥生時代では前期末～中期前葉、中期中葉～後葉、中期後葉、後期の遺物が確認された。
- ⑤ 古墳時代前期塩釜式期の竪穴建物跡からは、前期でも古い段階の土師器（坏、高坏、器台、台付鉢、壺、甕）が比較的まとまって出土した。
- ⑥ 飛鳥時代後半および平安時代前半の竪穴建物跡などが確認されており、官衙施設の存在が明らかになりつつある原遺跡との関連が注目される。
- ⑦ 鎌倉時代後半の方形竪穴遺構は、柱穴と焼面を有しており、宮城県内における当該遺構の性格・用途を検討する上で貴重な1例となった。



## 【引用・参考文献】

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年—仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に—」『考古学雑誌』第76巻 第1号
- 青山博樹 2010 「古墳時代前期の土器編年—仙台平野とその周辺—」『北杜—辻秀人先生還暦記念論集』辻秀人先生還暦記念論集刊行会
- 天野順陽 1996 「下草古城跡」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書 第169集
- 五十嵐康洋 1992 「第2章 第7節 富沢遺跡第77次調査」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(4) —富沢遺跡第70～75・77・79次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書 第163集
- 伊東信雄 1957 「弥生式文化時代」『宮城県史』1
- 岩沼市 2015 『岩沼市史 第4巻 資料編I 考古』岩沼市史編纂委員会
- 岩沼市 2018 『岩沼市史 第1巻 通史編I 原始・古代・中世』岩沼市史編纂委員会
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 恵美昌之 1979 『十三塚遺跡 昭和53年度遺構確認調査報告』名取市文化財調査報告書 第6集
- 大友 透・鶴崎哲也 2000 『原遺跡【カインズホーム名取店建設関係発掘調査報告書】』名取市文化財調査報告書 第38集
- 大友 透・福山宗志 1997 『原遺跡【県道名取村田線改良工事関係発掘調査報告書】』名取市文化財調査報告書 第38集
- 小川淳一 1980a 「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書 第69集
- 1980b 「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書 第71集
- 小川淳一・高橋綾子 2000 『仙台市王ノ壇遺跡—都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡—発掘町報告書Ⅰ』仙台市文化財調査報告書 第249集
- 小野正敏ほか 2001 『図解・日本の中世遺跡』(財)東京大学出版会
- 小山正忠・竹原秀雄 2015 『新版 標準土色帖』
- 加藤道男・阿部博志 1980 「3. 観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書—Ⅳ—』宮城県文化財調査報告書 第72集
- 川又隆央 2005 『鶴ヶ崎城跡—第4次発掘調査報告書』岩沼市文化財調査報告書 第6集
- 2018 「第五章第三節 横穴墓の築造と分布」『岩沼市史 第1巻 通史編I 原始・古代・中世』岩沼市
- 川又隆央・熊谷篤 2009 「岩沼市中ノ原遺跡所在の板碑と出土物について」『宮城考古学』第11号 宮城県考古学会
- 川又隆央・永井三郎ほか 2018 『下野郷館跡—五間堀川河川改修事業に伴う発掘調査報告書』岩沼市文化財調査報告書 第20集
- 川又隆央・永井三郎ほか 2019 『原遺跡第3次調査概要報告書』岩沼市文化財調査報告書 第21集
- 窪田 忍 2002 『宮城県名取市野田山遺跡 宮城県がんセンター緩和ケア病棟建設関係発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書 第47集
- 小村田達也ほか 1993 『北原遺跡』宮城県文化財調査報告書 第159集
- 白鳥良一 2018a 「第八章第一節一 名取郡・岩沼市域の郷・里と集落」『岩沼市史 第1巻 通史編I 原始・古代・中世』岩沼市
- 2018b 「第八章第一節四 東山道・東海道駅路と岩沼」『岩沼市史 第1巻 通史編I 原始・古代・中世』岩沼市
- 須田良平・吾妻俊典ほか 1992 『野田山遺跡』宮城県文化財調査報告書 第145集
- 仙台市 2000 「古代中世」『仙台市史』通史編2
- 手塚 均・相原淳一ほか 1987 「西林山遺跡」『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他—東北横断自動車関係遺跡調査報告書Ⅱ—』宮城県文化財調査報告書第121集
- 鶴崎哲也・大友 透 2010 『泉・前野田東・北台遺跡他 愛島東部第二土地区画整理関係発掘調査報告書(第1分冊 泉遺跡)』名取市文化財調査報告書 第59集
- 中富 洋 1991 『山口遺跡第9次・10次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書 第151集
- 丹羽 茂 1985 「今熊野遺跡」『今熊野遺跡 一本杉遺跡 馬越石塚』宮城県文化財調査報告書 第104集
- 古川一明ほか 1986 「1. 本屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』宮城県文化財調査報告書 第120集
- 古川一明ほか 1987 「中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書 第121集
- 古川一郎ほか 1993 「山の神古墳」『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書 第154集
- 北條由佳 2016 『賽ノ窪古墳群 東北電力施設建設事業関連発掘調査報告書』名取市文化財調査報告書 第66集
- 真山 悟 1981a 「東山遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書 第81集
- 1981b 「家老内遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書 第81集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984
- 村田晃一 1994 「土器からみた官衙の終末—東北地方の場合—」『第3回 東日本埋蔵文化財研究会「古代官衙の終末をめぐる諸問題」』
- 村田晃一 2007 「Ⅴ. 宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』東北学院大学文学部





1次調査 調査前の現状（北東から）



1次調査風景

写真図版 2



1次調査 遺構検出全景（南東から）



1次調査 完掘全景（南東から）



1次調査 SI01 床面検出状況(南東から)



1次調査 SI01 土師器出土状況



1次調査 SI01 完掘状況(南東から)



1次調査 SI01 カマド完掘状況(南東から)



1次調査 SI02 床面状況(南東から)



1次調査 SI02 土師器出土状況



1次調査 SI02 完掘状況(南東から)



1次調査 SI02 カマド(南東から)

写真図版 4



1次調査 SI03・SI04 検出状況(北から)



1次調査 SI03・SI04 完掘状況(南から)



1次調査 SI03 貯蔵穴内土師器出土状況



1次調査 SI03 貯蔵穴完掘状況



1次調査 SI03 土師器出土状況(第10図)



1次調査 SI03 石製品出土状況(第3図)



1次調査 SI04 P1 完掘状況(南から)



1次調査 SI04 P3 南北断面(東から)



1次調査 SI04 P2 東西断面(南から)



1次調査 SI04 P2 完掘状況(南から)



1次調査 SI05 P1 東西断面(南から)



1次調査 SI05 P1 完掘状況(南から)



1次調査 SI05 焼面(南部)検出状況(南から)



1次調査 SI05 焼面(南東部)検出状況(南から)



1次調査 SK01 東西断面(北から)



1次調査 SK01 完掘状況(北から)

写真図版 6



2次調査 調査前の現状（南西から）



2次調査風景（上段調査区）





2次調査 上段調査区遺構検出全景（東から）



2次調査 上段調査区完掘全景（東から）

写真図版 8



2次調査 SI01 床面検出状況(南から)



2次調査 SI01 完掘状況(南から)



2次調査 SI01 カマドと煙道(東から)



2次調査 SI01 土師器出土状況



2次調査 SI02 床面検出状況(南から)



2次調査 SI02 完掘状況(南から)



2次調査 SI02 カマド(南東から)



2次調査 SI02 貯蔵穴東西断面(南から)



2次調査 SI03 床面検出状況(北西から)



2次調査 SI03 完掘状況(西から)



2次調査 SI04・SI05 検出状況(南から)



2次調査 SI04・SI05 完掘状況(南から)



2次調査 SI07 床面検出状況(南から)



2次調査 SI07 完掘状況(南東から)



2次調査 SI07 カマド(南から)



2次調査 SI07 SK1 東西断面(南から)

写真図版 10



2次調査 方形竪穴遺構 床面検出状況(南東から)



2次調査 方形竪穴遺構 完掘状況(南東から)



2次調査 方形竪穴遺構 焼面断面(南東から)



2次調査 方形竪穴遺構 青磁出土状況



2次調査 SB01 P1 半裁状況(南から)



2次調査 SB06 P4 半裁状況(東から)



2次調査 SA02 P1 半裁状況(東から)



2次調査 SA02 P4 半裁状況(南から)



2次調査 SX02 南北断面(南西から)



2次調査 SK09 南北断面(東から)



2次調査 SK18 土師器出土状況(東から)



2次調査 SK18 完掘状況(南から)



2次調査 SK21 半裁状況(東から)



2次調査 SK23 東西断面(北から)



2次調査 SD04 須恵器出土状況



2次調査 SD04 南北断面(東から)

写真図版 12



2次調査 下段調査区調査前の現状（南西から）



2次調査 1号掘跡（南西から）



1 SI01 (第9图1)



2 SI01 (第9图2)



3 SI01 (第9图3)



6 SI01 (第9图6)



4 SI01 (第9图4)



5 SI01 (第9图5)



7 SI01 (第9图7)



8 SI02 (第11图1)



9 SI02 (第11图2)

写真图版 14



1 SI03 (第 13 图 1)



2 SI03 (第 13 图 2)



3 SI03 (第 13 图 3)



4 SI03 (第 13 图 4)



5 SI03 (第 13 图 5)



6 SI03 (第 13 图 6)



7 SI03 (第 13 图 7)



8 SI03 (第 13 图 8)



9 SI03 (第 13 图 9)



10 SI03 (第 13 图 10)



11 SI03 (第 13 图 11)



12 SI03 (第 13 图 12)





1 SI03 (第 13 图 13)



2 SI03 (第 13 图 14)



3 SI04 (第 16 图 1)



4 SI04 (第 16 图 2)



5 SI04 (第 16 图 3)



6 SK03 (第 19 图 1)



7 SK03 (第 19 图 2)



8 SK03 (第 19 图 3)



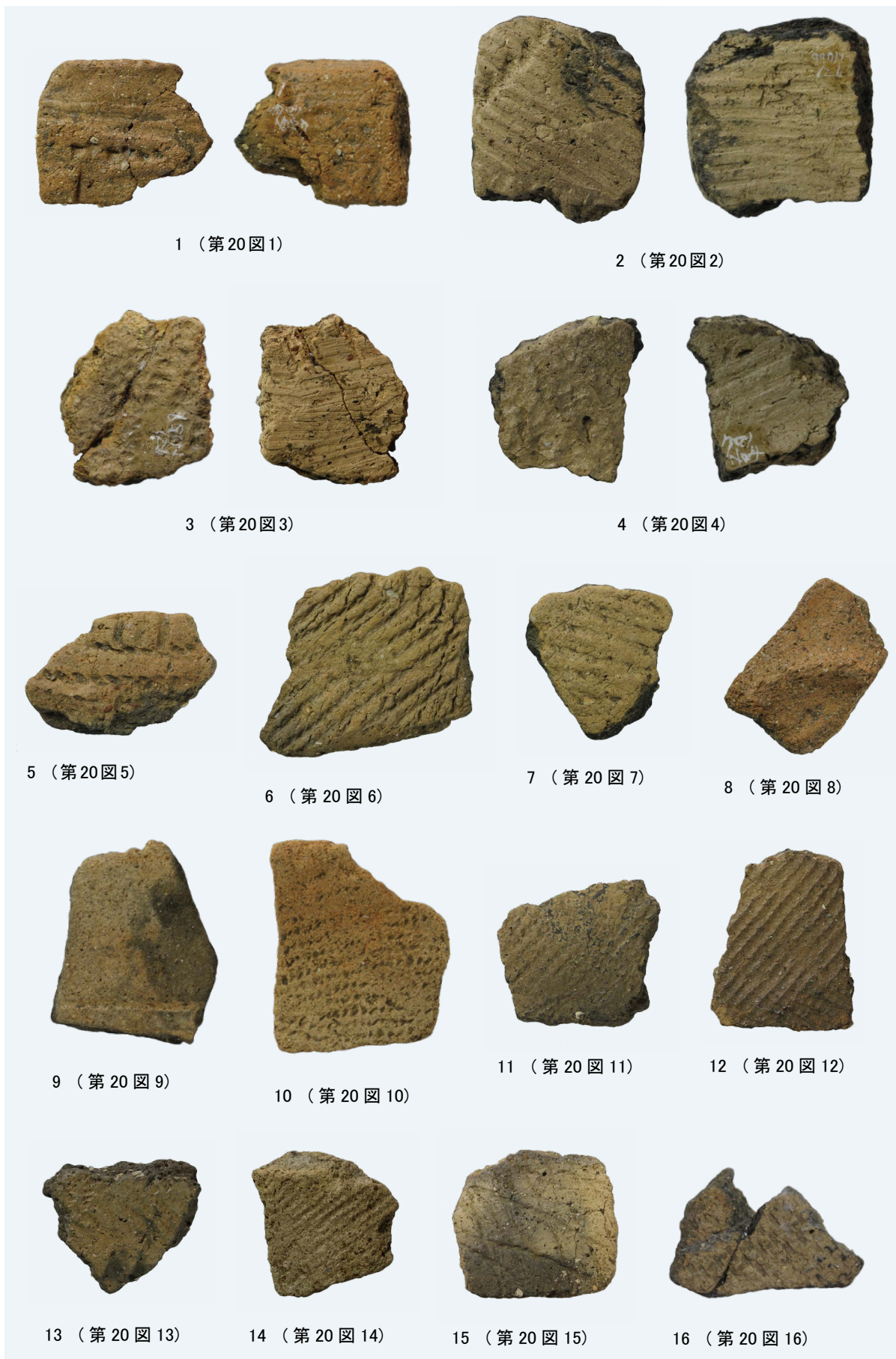
9 SK10 (第 19 图 4)



10 SK10 (第 19 图 5)

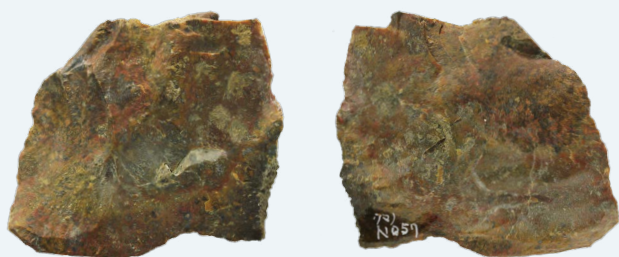


11 SK10 (第 19 图 6)









1 (第 22 图 9)



2 (第 22 图 10)



3 (第 22 图 11)



4 SI03 (第 14 图 1)



5 SI03 (第 14 图 2)



6 SI03 (第 14 图 3)



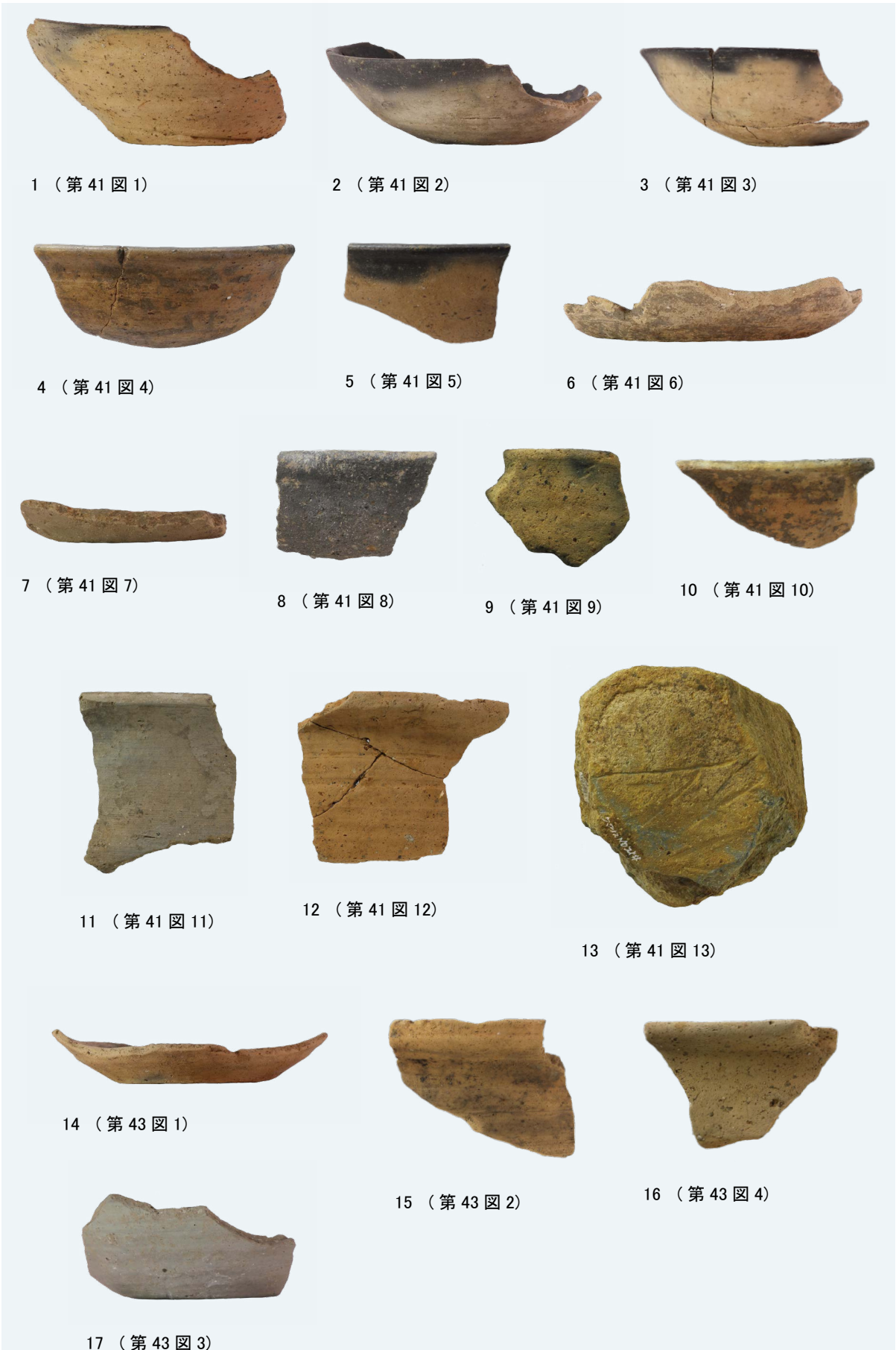
7 SI03 (第 14 图 4)



8 SI03 (第 14 图 5)











# 報告書抄録

ふりがな	くまのいせきだいいち・にじはくつちようさほうこくしょ							
書名	熊野遺跡第1・2次発掘調査報告書							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編集者名	川又隆央・川島秀義・太田昭夫							
編集機関	岩沼市教育委員会							
所在地	〒989-2480 宮城県岩沼市桜1丁目6-20 TEL(0223)-22-1111							
発行年月日	西暦2019年●月●日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くまのいせき 熊野遺跡 (1次)	いわぬましみいろよしあざくまの 岩沼市三色吉字熊野 すいじん らいじん うめ 水神、雷神、梅	42111	15015	38.07.14	140.50.44	2013.07.30 ～ 2013.08.19	128 m <sup>2</sup>	駐車場 整備工事
くまのいせき 熊野遺跡 (2次)	いわぬましみいろよしあざくまの 岩沼市三色吉字熊野 すいじん らいじん うめ 水神、雷神、梅	42111	15015	38.07.13	140.50.43	2015.07.29 ～ 2015.11.18	1,744 m <sup>2</sup>	駐車場 造成工事
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
熊野遺跡 (1次)	集落跡	古墳・古代		竪穴建物跡 土坑	土師器 石製品	竪穴建物跡5棟、土坑10基、ピット多数を確認し、調査。		
熊野遺跡 (2次)	集落跡	古墳・古代		竪穴建物跡 掘立柱建物跡 方形竪穴遺構 土坑	須恵器 土師器 磁器 石製品	竪穴建物跡7棟、方形竪穴遺構1棟、掘立柱建物跡6棟、柱列2列、性格不明遺構2基、土坑24基、溝跡8条、堀跡1条、ピット多数を確認し、調査。		
要約	<p>熊野遺跡は、低丘陵の頂部から裾部にかけて立地する古墳時代、飛鳥時代、平安時代、中世の集落跡である。</p> <p>2次にわたる調査で、竪穴建物跡が12棟、中世の方形竪穴遺構が1棟、掘立柱建物跡が6棟、柱穴列が2列、性格不明遺構が2基、土坑が34基、溝跡が8条、堀跡が1条検出された。遺物としては縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、青磁、石器、石製品が出土した。</p> <p>古墳時代では前期の竪穴建物跡から土器が比較的多く出土した。前期でも古い段階の土器群とみられ、当該期の新たな資料が加わった。飛鳥時代後半から平安時代前半では竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが確認されたが、官衙施設の存在が明らかになりつつある原遺跡や付近に造営されている横穴墓群との関連が注目される。中世では鎌倉時代後半の方形竪穴遺構が確認されたが、宮城県内の当該遺構の性格・用途を検討する上で貴重な1例となった。</p>							

岩沼市文化財調査報告書第 23 集  
熊野遺跡第 1・2 次発掘調査報告書

令和元年●月  
発行 岩沼市教育委員会  
岩沼市桜 1 丁目 6 番 20 号  
生涯学習課 TEL0223(22)1111 内線 573

印刷 ●●●●

岩沼市●●  
TEL0223(●●)●●